

社会正義

紀 要

7

目 次

<論 文>

- 経済と倫理……………アンセルモ・マタイス…… 3
- 貧しい人びとを優先するカトリック教会
……………山田 経三……23
- イエズス会系学校教育の特徴 <研究ノート>
……………アンセルモ・マタイス……47
-

<特別寄稿>

- 第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択
……………ジョン・ソブリノ……51
- 日本の解放の神学を求めて II
—「貧しい人びとを選択すること」の歴史
……………ホアン・M・リベラ… 105
- Science, Technology and Spiritual Values
—Searching for a Filipino Path to Modernization
……………Bienvenido F. Nebres… 123
-

<活動報告>

- 上智大学社会正義研究所活動報告（1987年～1988年）…………… 143
Institute for the Study of Social Justice, Sophia University
…………… 163

経 済 と 倫 理

アンセルモ・マタイス

はじめに

「大学」は英語で *university* といわれるが、原語は「一つの統合体」を意味するラテン語の “*universitas*” である。今日の大学はそうした言葉の本来の意味において一体 *university* だろうか、それとも *multiversity* だろうかと判断に迷う面を持っている。ヨーロッパを中心にして考えると、中世の伝統的な諸大学は明瞭な形で一つの *university* であったといえる。なるほど、神学や哲学や法学などがあったに違いない。その意味では同時に *multiversity* でもあったといえないことはない。しかし、どうして、そのような諸大学は *multiversity* ではなく *university* と呼ばれていたかという、そこに多様性のほかに、はっきりとした統一性があったからである。今日の大学を見渡すと、多様性ばかり目立ち、統一性はなかなかみえない、あるかないか分からない、むしろあるべきか、あるべきでないかさえも分からなくなってしまったのではないだろうか。中世のヨーロッパの大学を *university* 成らしめた統一原理は、いうまでもなく神学であったと指摘できよう。神学のおかげで、大学は *multiversity*、つまり諸学問の多様性は統一され、方向づけられ、一つの *university* という名誉ある名をいただいた。断片的な、ばらばらで、統一されていない諸学問の学府があれば、それは大学の名に値しないと思われたのである。

ヨーロッパでは、自然科学の誕生をみる近代とともに世俗化の運動が始

まり、徐々に科学は神学からの独立を宣言し、大学における統一原理としての神学の位置は弱まり始める。しかし、初めの段階から、すぐに **university** の資格を与えるゆえんの統一性がなくなるわけではない。神学の代わりには哲学が、新しい統一原理として登場してくるのである。しばらくの間、哲学こそ諸学問を方向づける統一原理として、その権威を獲得することになる。しかし、その状態はそう長く続かない。世俗化の波が激しく寄せてくるに従って、諸科学が神学からばかりではなく、さらに哲学からも独立を訴え、それを獲得することになる。各科学はそれぞれの内在的な法則によって構築されるべきものであり、そこに神学と哲学からのいかなる介入も許されるべきではない、となったのである。しかし、そうした独立宣言をなし遂げた自然科学が対価として払ったものがあまりにも大きかったと、いまあらためて考えなければならないのではないだろうか。今日では大学に統一性はみられず、**multiversity** しか残っていないのではないかと思われる。立派な研究がなされるかもしれないし、実験は目覚しい成果を取めているといえるかもしれない。にもかかわらず、諸学問を方向づけるものがないのではないだろうか。今日の「大学」は **multiversity** であって、決して **university** ではないと批判されても仕方がない面を確かに持っているようである。

60年ぐらゐ前にオルテガ・イ・ガセット (Ortega y Gasset) は『大学の使命』のなかで、既に良い意味でのジェネラリスト (**generalist**) の必要性を説いていた。細分化され、専門化された狭い領域に閉じ込められて、総合的な人間と世界に関する視野を持つとしない専門家を、20世紀の世界に登場した「野蛮人」と呼んだのは同じオルテガ・イ・ガセットだった。今日の学問的な状況をみると徐々にではあるが、さまざまな分野の研究をしながらも、なおかつその意味を総合的な人間の立場から問い直すという試みをめざす動きが出てきているようである。比較的早い時期に科学的な目覚しい進歩に対する反省と警戒が生じたことは周知の通りである。世界

中の一番優秀な頭脳を結集して生産された核兵器は、人類に取返しのつかない悲劇をもたらしたことは今世紀最大の事件である。戦後の公害の歴史も、やはり技術の進歩を総合的な見地から評価しないと大変なことになるかねないということを雄弁に物語っている。生命科学の発展は20世紀後半の科学研究の中心であるといわれているが、一方的にその研究を促進するだけでは十分でないことをいち早く把握したのは、米国における生命倫理の研究の同時進行であろう。わが国においても、十分ではないにしろ、多くの研究者と医者の中、いかに（how to）新たな技術を開発するかばかりではなく、人間にとってその意味（why）を問題にする必要があると強調するものが確かに増えているのは、歓迎すべきことである。もしかすると、そうした動きのなかに学問の新たな“university”を見出すことができるようになるかもしれない¹⁾。

また、経済は、見方によれば、一つの独立した学問として成り立っている。しかも、この学問は自然科学と同じようにますます細分化されて、いわゆる経済メカニズムが素人はもとより、専門家にとってさえもなかなか理解しにくい仕組みになってきている。従って、経済はただ経済法則によって必然的に左右されているという考え方を生み出しているように思われる。ところが、最近一方において、解放の神学の影響もあって、今日の経済は実際問題として世界に貧富の差を生み出し、いわゆる南北問題を引き起こしたが、これは必ずしも必然的な流れによるものではなく、政治的な意志さえあれば、その流れを逆転することができる²⁾と強調されることになった。こうした動きが新たな university の再建につながればいいのではないかと思われる。他方で、学術的な書物と専門雑誌等々に経済と倫理との関係が論じられることになったのは、同じ接点を示していると思われる。

カトリック教会は1891年に回勅「レルム・ノバルム (Rerum Novarum)」を公表してから約1世紀にわたって、経済と倫理との関係を論じてきた²⁾。

この小論では、ごく最近の二つの文献を紹介しながら、経済と倫理の関係を考えてみたいと思う。

〔1〕 米国の司教団

米国教会が、ベトナム戦争を契機にして一つの大きな歴史的転換期を迎えたのは注目に価する。その当時まで、大体において国家の体制に協力的であった教会は初めてベトナム戦争が既に正戦の領域をはるかに越えるものとして、いかなる人間的な基準によるにしても、正当化できないと主張して国家に挑戦した。そのとき以来、米国のカトリック教会が精力的にさまざまな社会問題に関して大胆な文書を発表しているのは周知の通りである。それらの文章は、上から押しつけるという従来形を取らず、民主的な方法を用いて、教会内外の多くの専門家を呼び、数年にわたる研究を通して作成された点が大きな特徴となって、教会の新たなスタイルを作ったといっても過言ではない。そのなかで扱われているテーマからして、1983年5月に発表された「平和の挑戦³⁾」と1986年11月に発表された「万人に経済正義を⁴⁾」などが最も世界の注目を集め、過熱的賛否論を呼び起こしたのは、米国の教会の新しい時代を示しているように思われる。前者は恐らく最近の米ソの軍縮の画期的な動きに影響を及ぼした一つの要因になっているだろうと思われる。しかし本論文においては根本的な論点に絞って、「経済と倫理」と直接に関係がある後者に限って論を進めたいと思う。

本経済教書は本文に先立って、「メッセージ」という形でその要約を書き記している。司教団はカトリック教会の長い伝統の継承者としての自己を意識し、教書の本文において、その伝統が聖書までに遡り、長い歴史を通して、ヨハネ・パウロ二世の教えにまで及ぶことを明らかにしている。しかし、経済と倫理の関係を強調する従来考え方を繰り返すばかりではなく、現代の水準にまで高め、米国の内外の具体的な諸問題に応用しよう

とするところにその特徴があるといえよう。いうまでもなく、この教書は、米国経済に関する青写真ではない⁵⁾。経済学者の意見が参考として聞かれたが、やはり司教自身は経済学者ではないので、経済理論や今日の複雑な経済問題に関して具体的な提案をするにしても、決定的な答えを用意することはできるわけではない。その代わりに、経済問題を考えるにあたって、どのような倫理的な側面を考慮に入れるべきなのかを十分に論じることができるはずである。本教書の重点は、まさにそのような原則にあると思われる。

既に、「メッセージ」のなかに次の六つの基本的道徳的諸原則があげられている。

(1) あらゆる経済的決定も、経済組織も、それが人間の尊厳を守るのか、それとも損なうのかという観点で判断されねばならない。

(2) 人間の尊厳は、人間の共同体においてのみ実現され、守ることができる。一体、経済生活は、共同体を形成している私たちの生活を高めているのか、それとも脅かすものとなっているのか。

(3) すべての人びとは、社会の経済生活に参加する権利を持っている。それは主に雇用を通してなされることになるであろう。

(4) 社会のすべての成員は、貧しい人や弱い人びとに対する特別の義務を持っている。キリスト者としての私たちは、すべての兄弟、姉妹の必要に応えるように召されているが、とりわけ、最も緊急な必要にせまられている人びとこそ、最も大きな対応を必要としている。

(5) 共同体の生活にとって、人権は、最低限の条件である。ヨハネ二十三世が、宣言されたように、すべての人びとは、生きる権利、衣食住の権利、余暇、医療、教育、雇用などの諸権利を持っている。

(6) 公的組織及び民間組織を通じて働いている社会全体には、人間の尊厳を高め、人権を守ってゆく道徳的責任がある。

第二章の初めにあって、述べられているように、経済生活は人間的・

道徳的・キリスト的であるとすれば、次のような三つの問いかけによって成り立たねばならない。経済は人びとのためにどのように役に立っているのか。経済は人びとに対してどのような影響を及ぼしているのか。そして人びとは経済にどのように参加しているのか。換言すれば、すべての経済的な決定、すべての経済政策、及び経済組織の根本的な道徳的基準は、実に、万人、特に貧しい人びとに仕えねばならないということである。実は、そのような決定や政策や組織などは、相互依存ということがますます自覚されてきている現代にあって、すべての諸国民の間に尊厳と連帯と正義に基づいて打ち立てられる新しい形態の共同体をめざす希望を生み出していると同時に、高まりつつある全地球的な自覚によって、諸国間になたって存在する生活水準や資源分配の不正に対して深い関心を引き起こすように求められている。内外の状況を眺めるときに、さまざまな問題が山積していることに気がつく。貧しく住む家のない人びと、職を失った中年の人びと、職にありつけない青年たち、わずかししか持たず、または全く何も持っていない人びとの間の希望の喪失、土地と生活様式を失い、屈辱的な低賃金のために耐え難い生活に甘んじなければならないこと、そして海の向こうに、絶対的貧困のうちに生きる8億もの諸国民と、栄養失調または飢餓に直面している4億5千万もの人びとが現実にいることは、米国におけるこれらすべての希望と諸問題に、不吉な影を投げかけている。

そのような非人間的な世界状況を前にして、当然ながら、いかにして人びとの生活を支えるはずの経済を再構築しなければならないのかという問いかけが生じてくる。司教団はその方向性を経済生活のための倫理的規範のもとに、三つの項目で論じようとする⁶⁾。

1. 社会生活の責務

(a) そのなかでまず「愛」と「連帯性」を論じなければならない。人間の尊厳を擁護する努力が効果をあげねばならないとするならば、知識と愛に関して存在する制約を考慮に入れなければならないが、それにもかかわ

らず、冷静な現実主義は、あきらめや冷笑的な悲観主義と混同されてはならない。それは、場合によって、至難で、長期にわたる努力を持続させ、勇気のある希望を育てる挑戦なのである。

(b) 第二番目にあげられているのが「正義」と「参加」であるのは注目に価すると思われる。「交換的正義」は、個人と個人の間、または私的な社会グループ間のすべての協定や交換のなかに、根本的な公正を要求する。「配分的正義」は、社会における所得や富や力の配分が、基本的な物質的必要の満たされていない人びとにどのような影響を及ぼすのかという観点で評価されるように要求する。「社会正義」は、人びとが社会生活への積極的で生産的な参加者となることを要請する。また社会が、このようにして彼らを参加できるようにする義務を持つことを示唆している。総合的な一つの結論を出すと、数多くの労働者たちを失業させたり、不完全就労にとどめたり、非人間的条件で就労させる経済的条件は、これらの基本的な正義の三つの形態の要求を満たしていないことになる。

(c) 第三番目の問題になるのは「周辺化」と「無力化」の克服である。「基本的正義」は、万人のために人間共同体の生活への最低限度の参加を確立することを要請する。参加からの排除は、政治的な言論の制限、少数者の手に集中する権力、国家による不法な抑圧などである。貧しい人びと、障害者たち、失業者たちは、余りにも簡単にしばしば全く見捨てられる。このような形態は、最貧途上諸国では、かつてないほど深刻なものになっていると指摘できよう。

2. 人権一共同体における生活の最低限の条件

「基本的人権」は、共同体における尊厳に満ちた生活の前提条件である。このような諸権利には、言論・信仰・結社の自由に対する市民的政治的権利が含まれているのはいうまでもない。しかし同時に、いくつかの人権は、人間の福祉に関係があり、具体的に経済的な性格を持っている。これらの諸権利のなかでまず第一にあげられるのは、生命、食糧、医療、住

居、休息、基礎教育の権利であろう。そのような諸権利を社会のなかに確立するための第一の処置は、人間の福祉としての基本的な経済的条件こそ、人間の尊厳にとって不可欠で、人間として正当で当然のことであるという新しい文化的コンセンサスを発展させることであり、またこれらの権利の保証によって、社会の全成員、すべての民間組織、及び政府に対して要求することになるであろう。これらの正義と連帯性の基本的な要求を満たすためには、米国社会の全分野での一致した努力が必要であるといわなければならない。

3. 国家の道徳的な優先順位

カトリックの長い伝統のなかで、国家の目的は共通善にあると主張されてきたが、その共通善は万人の正義、万人の人権の保護を要求する。しかし万人に正義をもたらす義務ということは、国家の良心に鑑みて、貧しい人びとこそが、最も緊急な権利を持っていることを意味する。従って、個人としても、また国家としても、私たちは、根本的な「貧しい人びとへの選択」をするように呼びかけられているといっても過言ではない。貧しく無力である人びとの立場から、社会・経済的活動を評価する義務は、自分自身のように自分の隣人を愛せよという根本的な掟から生まれる。周辺化され、その権利が否認されている人びとは、社会が万人に正義をもたらさねばならないとするならば、特別な権利を持っていることになる。優先順位課題は次のように述べられる。

(a) 貧しい人びとの基本的ニーズを満たすことは、最高の優先順位である。この原則は、人間の根本的必要を満たすことが、ぜいたくな消費財、共通善に関わりのない利潤、不必要な軍備への欲求を満たすよりも先に選択されなければならないことを認めている。

(b) 現在排除され、傷つけられやすい弱い人びとの経済生活への主体的参加を増大させることは、社会の高い優先順位の一つである。それはただ「援助」ということばかりではなく、むしろ「雇用」の機会を与えな

がら、参加させることを意味するのはいうまでもない。

(c) 富、才能、人的資源などの投下は、特に貧しく、経済的に保証を受けられない人びとの利益に向けられなければならない。

(d) 労働の組織のみならず、経済・社会的政策も、家庭生活の強さと安定にそれらがどのような影響を与えているかという観点から常に評価されねばならない。

このような優先順位課題が、1984年カナダ訪問のときにヨハネ・パウロ二世が述べられた言葉と同じ意味を持っているのは注目に価する。「貧しい人びとの必要は、金持ちの欲望よりも優先する。労働者の権利は、利潤を最大限にすることよりも、環境の保護は、工業の規制のない拡大よりも、社会的必要を満たす生産は、軍事目的のための生産よりも優先する⁷⁾」。もちろん、複雑なこの世界において、これらの優先順位を具体的に適用することについては、疑いもなく議論があるところであろう。しかしながら、この明示する方向に向かって進む努力が緊急に必要であると信じる。

司教団は第三章以降、雇用、貧困、食糧と農業、米国経済と発展途上国等々の問題に関して論じているが、本論文では、経済と倫理という根本的な問題に限定して論を進めている関係上、具体的課題に関する考察は次の機会に譲ることにしたいと思う。

〔2〕 人類共同体のために

一 国際債務問題の倫理的アプローチ⁸⁾

現代世界を特徴づける言葉の一つに、「相互依存」があるが、見方によれば発展途上国の先進国への一方的な依存の世界ではないかと思われる。このことが恐らく最も明らかにされているのは、累積債務問題の場合においてであろう。「万人に経済正義を」も当然ながらこの深刻な問題に取り組んでいるが、ここで取り上げてみたいのは米国司教団の教書と同じ時期

(1986年12月),『正義と平和』というバチカンのなかに設置されている委員会から発表された,「国際債務問題の倫理的アプローチ」である。

1960年代,発展途上国の経済成長がバラ色のごとくもてはやされていた頃,これらの国々には巨大な発展プロジェクトを掲げて海外から資本を求め,それに応じて,産油国から莫大な資金を預かっていた商業銀行が積極的に融資を申し出た。そのころ発展途上国に産する天然資源の価格は堅調であり,債務国の大半に返済能力が備わっていたと思われた。しかし世界は,1974年に第一次石油危機,1979年に第二次の石油危機に見舞われて,大きく揺れ動いた。発展途上国が巨大プロジェクトを展開していたちょうどそのとき,天然資源価格は下落し,世界市場で金利が上昇し,また先進工業諸国は保護貿易主義的色彩の濃い政策を取り始めたのである。三,四年前から,累積債務のレベルが返済能力以上のレベルに達する例がみられるようになり,返済のための借入れ金を求めようとする動きさえも出るようになった。しかしその条件として,一方において返済の外貨を稼ぐために輸出向きの経済を営まなければならないし,他方において賃金を押さえ,教育と社会福祉の予算を削減しなければならないという事態の結果,一番損害をこうむっているのは相変わらず底辺の貧しい人びとになっているのが現状であろう。まさに「相互依存」の世界が,実は一方的な依存の世界になっているゆえんである。

第一部において,倫理上の諸原則として,以下の六つほどがあげられている。

(1) 連帯性の新しい形態の創造。この連帯は強者による支配,国家エゴイズム,不平等,不正義を更に生み出さずに,すべての人びとの平等の尊厳を優先する必要がある。

(2) 共同責任を認める。共同責任の認識は,各国,各国民の未来を開き,正義に基づく国際平和のあり方,可能性を作り出すことができるはずである。

(3) 信頼関係を構築する。以下に述べられているように、この信頼関係は、具体的な態度、行動があって、初めて構築されるものである。

(4) 努力と犠牲を分かち合う。最も恵まれない立場にある人びとのニーズを優先しながら、債権者も債務者も調整する努力において平等な負担を背負うようにしなければならない。

(5) すべての人の参加を求める。何らかの形で損害をこうむりがちの人びとの参加がないと、従来の弱者の搾取が繰り返されるばかりになるであろう。

(6) 緊急策と長期的処置は必要であろう。場合によっては、生き残るための政策が求められよう。同時に長期を展望した金融制度の改革、無理のない財政政策の策定が推進される必要があるだろう。

第二部において緊急事態下における活動が論じられる。一部の発展途上国の場合、累積債務、特に年毎に支払わなければならない金利、その他の返済金額が、国庫収入に比較して途方もないものになっているのは周知の通りである。従ってこれらの国ぐにが負う契約上の義務に従って返済を行うと、その国の経済は手厳しい損害を受けることになる。資源、原材料の価格の下落、あるいは輸出商品を拒む保護貿易主義的海外市場の結果、各種の債権組織の要求に応じられない債務国の一部は、文字通り破産危機に瀕しているといえよう。そうした国ぐにの維持存続のために、国際的連帯を基盤とする緊急策の策定が、早急に求められている。

他方において、債務不履行といった最悪の事態を回避する処置を案出する必要があろう。こうした最悪の事態が現実のものとなれば、国際金融システムは危機的な局面に遭遇し、それまで当事者の枠内に収められていたリスクが一気に一般にまで広がることになる。しかし、何はともあれ、まず倫理的に最大の重みを持つ、国の存続、国民の生命権ということを指標に、意志決定、態度決定を行わなければならない。そして、支払い不能の状況に陥っている債務国の窮状を十分に認識し、限度を越える要求、性急な催

促を避ける必要がある。こうした要求，催促を行うことは，たとえ，法律的に正当といえても，権利の乱用として指弾される行為であると指摘しているのは注目に価する。従って，返済繰り延べ，負債の部分的免除，あるいは全額免除，返済能力を回復させるための支援といった処置が考えられよう。同時に一国を率いる立場にある人びとは，対外債務の水準を常に監視する責任がある。そして，近視眼的な思考やずさんな管理によって国民が苦しむといった状況が生じないように，財政上の運営を行っていく職務上の責任があることはいうまでもない。この関係において，IMFが最大の責任を持っているのは論を待たないであろう。今や緊急策とセットの形で，中・長期をにらんだ対策が提示されなければならない時期にきていると思われる。

第三部において，未来に対する共同責任が取り上げられる。同じ債務国といっても，必ずしも一様に論じられないのは，それぞれ異なった状況におかれているからである。それぞれの国の通貨の相対的価値や貿易額や天然資源の埋蔵量やそれを開発する技術力や海外に培われた信用度等々異なっているように，債務解決の大事業に取り組むはずのそれぞれの組織の期待される活動はさまざまな形をとってもおかしくない。いずれにしても，その理念となるのは，ヨハネ・パウロ二世が1986年，世界平和の日にあたって発表されたメッセージの次の言葉であろう。「この地上の人間生活のすべての分野—社会的・経済的・文化的・倫理的—における，公正で廉直な関係の果実として，平和のことを考えている……ビジネスに携わる人びとに，金融に関与する組織，商業活動に従事する機関で責任を負い，業務を推進するあなたがたに，私は訴える。あなたの兄弟，姉妹，すべての人びとに対するあなたの責任を，新しい目で点検し直してみるように」。

1. 先進工業諸国の責任

世界の国々にはますます相互依存の度を深めつつある状況下において，連帯の倫理が，権力と既得権に基づいている商業的・金融的・通貨的な関

係を、正義と相互奉仕の関係に変革するのに役立つであろう。先進工業国はその経済力の故に、他の国々に以上に重い責任を負っている。経済的に恵まれた立場にあるこれらの国々には、たとえ、時に不景気に見舞われ、産業構造の転換を迫られようと、あるいは失業問題を背負い込もうと、自分たちに世界に対する重い責任があると認識し、その立場を受け入れる必要がある。他の国々に対する自分の対策の影響を考えずに、行動できる時期は過ぎたはずである。具体的にいえば、次のような提言がなされている。

先進工業国は自国の利益にかなう経済政策を策定しようとしているようであるが、その策定の任にあたっている人びとは、同時に、政策が発展途上国とその国民にどういった影響を与えるか、その点に気を配る必要がある。そうでなければ、先進工業国の活況は、単に発展途上国を更に貧しい状態に追いやるだけになり、国家間の不平等を更に広げるといった結果をもたらしてしまうであろう。

また先進工業国は、発展途上国の輸出を妨げる保護貿易政策、あるいはそれに類似する政策を撤廃すべきである。そうした処置が行われるなら、そして同時に技術上のノウハウが提供されれば、発展途上国の経済的未来は一段と明るいものになる。

先進工業国によって課せられ、求められる金利は高く、債務国はいずれもその償還に通りでない困難を感じている。その金利を下げる努力が必要であろう。

相互的な経済の拡大をめざす政策の選択、保護貿易政策の撤廃、あるいは輸入障壁の縮小、金利の引き下げ、天然資源、原材料の適正価格、などはすべてが先進工業国に求められる態度であり、行為である。人類の連帯の進展と強化になるかならないかが、先進工業国の双肩にかかっているのである。

2. 発展途上国の責任

先進工業国の責任のほかに、やはり発展途上国の責任も問われなければならない。これらの国々にながまず手をつけなければならないのは、膨れ上がる一方の債務の背後にある原因、それも債務国自身に起因する理由の分析とその認識であろう。そのうえで、発展途上国の政府関係者は、のしかかる債務の重さを少しでも軽減する方向で経済政策を立案し、底辺の人びとの生活改善を優先しながら、国の発展を推進していくべきであろう。先にも述べたように、発展途上国といっても、多様性があるが故に、一つのパターンで問題にあたるというわけにはいかない。一般的に言えば、経済的に苦しい立場におかれている国々には、とにかくすべての責任を他国にかぶせ、問題の本質をそらせてしまおうとすることになりがちである。しかし残念ながら、貧富の差を分ける境界線は、国と国の間に存在しているだけではなく、それぞれの国の領土内において、また社会階層の間においても画然と存在している。そういう問題に手をつけずに、累積債務の問題を解決するというわけにはいかないだろう。また同時に、対外債務関連で行われているさまざまな監査や調査を無視した事実はなかったか、贈収賄、スキャンダル等々なかったか、通貨を投機的手段とすることはなかったか、国の貴重な資金、外貨をいたずらに流出させることはなかったか、国際契約で裏金を収受したことはなかったか、厳しく究明することは第一の必要事項であろう。さらに追究するとすれば、各国の政治・財界の指導者は個人的な利益を追求するのではなく、国民の共通善のために誠心誠意を尽くし、具体的な行動で示す必要があるだろう。例えば、利益やサービスや職場等々公平に分配し、貧者の救済をこそ、何をおいても第一と考えることが求められているといえよう。

発展途上国の責任は特に二つの分野で問われる。持続的な経済拡大と国の発展を実現するには、人的と物的を問わず、国内のあらゆる利用可能な資源を総動員しなければならない。しかし、経済拡大と発展の目的はあくまでも国民の基本的ニーズを満たし、医療、教育、文化等々を含めた生活

水準を向上させることを忘れてはならない。富の増大は、正義に基づく広範な分配があって、初めて奨励されるものであるということはいうまでもない。

発展途上国は、自分の国の発展と向上をめざす場合、他国から資本を求め、技術の供与を要請し、機器の輸入と援助を依頼するのが通常である。しかし、周到に取捨選択することが求められている。それらが無計画に行われると、債務額は跳ね上がり、国の発展の基盤すら破壊されることになるのは必定である。同時に、国際貿易に対して、まだ十分に発達していない分野において、競争力を持たずに、性急に国の門戸を開くと、破滅的な打撃を受ける可能性があることを考慮に入れておかなければならないであろう。

3. 債務者に対する債権者の責任

債務国が元本返済ばかりではなく、年賦の支払いにさえ応じられないという緊急事態に陥っている場合、各種の債権機関はこの状況を深刻に受け止め、債務国存続のための連帯という枠組のなかで、その責任を明確にする必要がある。もちろん、不正の場合を除いて、双方による契約の順守が基本であることはいうまでもない。しかし、債務国とその国民が存亡の瀬戸際に立たされている場合、債権者は何が何でも絶対に契約の履行を求めてよいというわけではない。

まず債権国は相手国の国民の基本的ニーズが満たされることを第一にして、債務国の事情にみあう新しい返済条件を考えるべきであろう。それは同時に、その国が成長し続けていくことが可能なぐらいの経済的余裕を与え、将来債務返済を確実にするためにも、十分に意味のある方策だと思われる。具体的にいえば、利率の引き下げ、最低限の利払い額を越えるものについての元本繰り入れ、償還の長期繰り延べ、相手国の通貨による返済の容認等々、返済の重圧の軽減にも役立ち、その国の経済力の回復にも資することとなる。

また、債権国は最貧国の国々にに特段の配慮を示す必要がある。場合によっては、借款を譲渡に切り替えるといった処置も必要かもしれない。しかしこうした免除処置が、相手国の財政・政治・経済的な信用を損なうことにならないように、細かい配慮を施す必要があるだろう。

他方において、商業銀行も債務問題の解決に重要な役割を果たすべきである。具体策として指摘できるのは、債務の繰り延べ、利率の改定、並びに引き下げ、発展途上国への投資の再開、また大いに疑問のあるプロジェクト（例えば、国威発揚、軍備拡大のための計画等々）よりも国民の発展に役立つプロジェクトの選択などが考えられる。考えてみれば、従来の商業銀行の投資のあり方よりも責任のある積極的な取り組みが求められているといえよう。

最後に多国籍企業も大きくこの問題に関わっているのは論を待たない。多国籍企業の持つ経済的・資金的・技術的パワーは巨大である。その事業計画も国境を越えている。世界経済、金融を動かすにあたって、重要な役割を演じ、発展途上諸国の経済にも大きな影響力を持つ彼らには、共同責任の一端を担う責任があり、連帯という理念のうえに立って、事業を遂行していくという自覚が求められている。人びとの連帯と共同責任は、多国籍企業の既得権や既成事実などと同列視されるものではなく、それを超越したところに存在すると考えられるべきであろう。

4. 多国参加金融機関の責任

今日において、国際機関は新たな緊急な責任に直面しているといわなければならない。発展途上国の債務危機を乗り越え、国際金融システムの崩壊を避け、一番困っている国々にの発展のために援助し、さまざまな形の貧困の拡大と戦い、紛争の脅威をなくしながら平和を促進することは、いくつもの例に過ぎない。国際機関はすべての人びとの奉仕のもとに、正義と連帯の精神を通して行動すれば、初めて自分の役割を果たしたといえよう。教会は専門的な問題に立ち入ることはできないが、しかし訴えなければ

ばならないのは、弱者への配慮が、金科玉条とされる国際金融の仕組みや機構以上に重い意味を持っているものであり、たとえかずかずの困難が伴うとも、貫かれなければならない原則である、ということである。具体的にいえば、国際通貨基金（IMF）などは、発展途上国への融資条件を、相手国、特に経済力のない人びとの生活改善に役立つように再検討しなければならないであろう。国際金融機関で働く人びとには、経済的専門知識が求められているのはいうまでもないが、同時に債務国の人びととその必要性を感得する体験も必要であろう。

最後に、この文書は先進諸国の人びとの注意を喚起するが、発展途上諸国の生活改善に寄与する広範な協力プランを作成し、実行する良い時期に既に至っているのではなかろうか。第二次大戦後、破壊された国々にの再健を目標としたいわゆるマーシャルプランを想起して訴えているが、苦しみのさなかにある人びとに速やかに脱出の機会を与え、新しい希望の光となる支援システムをスタートさせるのは、相対的に恵まれた立場にある先進工業国、その国々に人びとに課せられた、至上の責務なのではないだろうか。恐らく、数年にわたって必要と思われるこうした支援協力を得て、初めて発展途上諸国は、すぐにも取りかかる必要のある長期プログラムを発足させることができ、計画通りにそれを完了する、という成果を手にすることができるのである。「しかしそれには先進工業国、並びに各種国際機関の協力の後押しが必須である。事態が取り返しのつかない状態に突入する前に、われわれのこのアピールが考慮され、行動開始のきっかけとなることを願うものである」。

できる限りバチカンの文章に語らせたつもりでいるが、今日の複雑な国際社会・経済の問題において、真に人間的な解決をみようとするとすれば、倫理的な側面も考慮に入れなければならないであろう。

米国司教団による「万人に経済正義を」と、バチカンから発表された「国際債務問題の倫理的アプローチ」とは、百年にわたるカトリック教会

の社会に関する教説を継承しながら、一方は地域教会が全般にわたる諸問題を取り上げ、他方は今日の最も深刻な経済問題に取り組むが、両方とも教会の伝統に従って、人間を中心とする倫理の側面を浮き彫りにしているところに、その特徴があると思われる。これから日本において、これらの諸問題が議論される場合、参考になれば幸いと思う。

(筆者は上智大学社会正義研究所長、文学部人間学研究室教授)

[付記：この論文の執筆後、教皇ヨハネ・パウロ二世は、88年2月19日、回勅『ソリチトゥード・レイ・ソチアーリス』（開発のモラルについて＝仮題）を発表した。同回勅は、回勅『ポプロールム・プログレシオ』の20周年を記念して出されたものである。]

注

- 1) 拙稿「大学教育における価値の問題」『ソフィア』1980年、秋季号参照。
- 2) 拙著『地球社会をめざす教会』中央出版社、1985年参照。
- 3) アメリカ・カトリック司教協議会『平和の挑戦』中央出版社、1983年及びマタイス、関寛治共編『平和のメッセージ』明石書店、1985年参照。
- 4) National Conference of Catholic Bishops, *Economic Justice for All : Pastoral Letter on Catholic Social Teaching and the U. S. Economy*(Washington, D. C. : U. S. Catholic Conference, 1986). 邦訳(マタイス、片平博、保岡孝頭共訳)は1988年6月、中央出版社より出版予定。
- 5) 同上書12番。
- 6) 同上書61番。
- 7) 同上書94番。
- 8) Pontifical Commission "Iustitia et Pax," *At the Service of the Human Community : An Ethical Approach to the International Debt Question* (Vatican City : 1986). なお邦訳は山田経三訳「人類共同体のために―国際債務問題の倫理的アプローチ―」(社会司牧シリーズ③, 「アジアの声」増刊⑤) 上智大学山田研究室、1987年を参照させていただいたことをお断わりしておく。

Economics and Ethics

Anselmo Mataix

SUMMARY

In the beginning of this article I try to find out a principle of unity in the [multiversity] of the actual [university]. This principle will be applied specially to economics.

The main part of this article is dedicated to develop and summarize the underlying principles, which have to regulate economics, found in [Economic Justice for all], a pastoral letter on Catholic Social Teaching and the U. S. Economy written by the American Bishops, and in [At the Service of the Human Community: an Ethical Approach to the International Debt Question], a document issued by the Pontifical Commission "Justice and Pax of the Vatican."

貧しい人びとを優先するカトリック教会

山 田 経 三

序

現代世界におけるカトリック教会の一つの特徴に、「貧しい人びとの優先」(Option for the Poor)がある。第二バチカン公会議以降の主な公文書のなかに、そして各修道会の総会のなかにそれをみることができる。本稿では、それらのうち主なものを取り上げ、「貧しい人びとの優先」の意義について論じてみたい。

I 第二バチカン公会議の特徴

第二バチカン公会議の特徴として、次の三つをあげることができる。①「開かれた教会」、②「対話の教会」、③「貧しい人びとを優先する教会」がそれである。従来の公会議が教義の枠組みのなかで上から下に、演繹的に真理を論ずるものであったのに対して、第二バチカン公会議は「現代世界憲章」の冒頭にみられるように、全人類が抱えている現代の重大な問題にいかに応えるかという姿勢が、その特徴をなしている。全世界の諸問題に対して解決を見出そうとする取り組み故に、その姿勢は具体的な問題に直面して下から上に、帰納的に真理を追求するものであった。

①ここに、現代世界が抱えている課題と挑戦に応えようとする「開かれた教会」の姿が見出される。②それはまた、人類にとって共通の問題に取

り組むにあたっては当然、他の宗教、思想と「対話する教会」でもあった。③しかも、それらの問題に取り組む視座は、現代世界のなかで、特に弱い立場におかれている人びと、貧しい人びとを最優先するところから始まった。「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、とりわけ、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的な事がらで、キリストの弟子たちの心の中に反響を呼び起こさないようなものは一つもない。それは、かれらの共同体が人間によって構成されているからである。かれらはキリストにおいて集まり、父の国への旅において聖霊に導かれ、すべての人に伝えなければならない救いのメッセージを受けている。したがって、この共同体はみずからが人類とその歴史とに、実際に深く結ばれていることを自覚している」。

この内容が1968年のメデジン会議（ラテンアメリカの司教会議）においてさらに展開されていくことになる。これについては後に触れることになる。

さらに、第二バチカン公会議以降の世界教会の特徴として、次の七つをあげることができる。

- 1) 第二バチカン公会議に参加したアジア、アフリカ、ラテンアメリカなど第三世界からの司教たちは、従来のような欧米先進諸国から派遣された宣教師ではなく、現地の人びとで構成されていた。これら司教代表団は、個人的な訪問者として会議に出席したのでもなく、教皇の諮問機関として働いたのでもない。教皇のもとで、教皇とともに教会内の崇高な教導職を担う責任者として存在した。ここに自主的で独立した機能を備えた司教代表団の集まった、世界的な会議が実現したのであった。
- 2) 典礼という点からみると、教会の祭儀としては、各地域のその土地固有の言葉が使われるようになり、それは来るべき世界教会のしるしとして顕著なものであった。

貧しい人びとを優先するカトリック教会

- 3) 全教会にとっての実践ともいうべき「現代世界憲章」では、教会全体として人間の未来に対する責任を自覚するようになった。
- 4) 教会や神の啓示の記述において、公文書は新スコラ学的な言語スタイルの影響を受け過ぎないように努力が払われ、全世界で一層理解されやすくなった。
- 5) 非キリスト教、他宗教に対する教会の関係については、教会の教義の歴史上初めて、世界に広く普及している他宗教に対して、開かれた、前向きの評価が与えられた。
- 6) 教会の宣教活動については、「現代世界憲章」のなかに、人間の原罪を越えて与えられる神の救いの恵みが普遍的な効力を持ち、人が悪意で行動するときだけを除いて、すべての人に注がれるものとして強調されている。聖書のなかの真の救済信仰は、キリスト者のように言葉の啓示を知っていなくても、教会外でも得られるものだからである。従来の神学と比較すると、世界教会の世界宣教は、今までには存在しなかった形で考えられている。
- 7) こうした新しい見方から、宗教の自由についても新しさを発見することができる。全世界のあらゆる状況に対して、教会は神の福音の力に基づかずに、信仰を強制的に宣言させる力を拒否している。他宗教との協力的関係というエキュメニカルな動きも、世界教会の新しい特徴である。

Ⅱ 教会公文書にみる「貧しい人びとの優先」

今日、カトリック教会が採択している「貧しい人びとの優先」という表現の背景や内容について、まず述べてみたい。この表現を不可解なものと感じる人もいるかもしれないが、これは教会内で高まりつつある運動を巧みにとらえた言葉なのである。この表現の中味をよりよく理解するための手だてとして、背景を探るために、いくつかの公文書を紹介する。

(1) メデジン会議

1968年のメデジン会議の声明文には正確に表現されていないが、この会議こそ、10年後のプエブラ会議でラテンアメリカの司教たちが述べたように、まさしく「貧しい人びとともに歩み、連帯を計ろうとする司牧の方向性を決定した²⁾」ものであった。これは教会史上、初めての試みであり、ラテンアメリカに限らず、長い道のりを経てようやくつかみとった教会の選択なのである。この意義については、声明の中で四つのテーマとして見出すことができる。

1. 構造的不正

ラテンアメリカ内の抑圧、不正、極端な不平等は構造的不正に起因し、民衆の独立心を奪い、人びとを貧困のなかに陥れている。この状況を司教団は「制度的暴力」と表現している。

2. 教会の貧困

この題がつけられた14では、自由を渴望する民衆の叫びに対する教会の応答が示されている³⁾。ここでは三つの貧困が明らかにされている。物質的、精神的貧困、そして自主性の欠如である。教会は、物質的貧困は社会的不正であり、罪であることを告発し、精神的貧困について説き明かし、自主性の欠如については、教会自身が積極的に克服していかなければならないとみなしている。その具体的行動のヒントとして二つあげている。一つは最も貧しく、最も助けを必要とする人びとに物資を調達し、司牧に携わる人材を派遣することである⁴⁾。いま一つとしては、貧しい人びととの連帯を計り、彼らの抱える苦悩、問題を自らのものとして、貧しい人びとと語り合えるようになることである。実際の行動として、不正と抑圧を告発し、貧しい人びとが余儀なくされている苛酷な社会状況に闘いを挑み、この社会を牛耳る人びとがその責任に目覚めるよう、進んで権力者などとの対話を求めていく姿勢が望まれている。

3. 意識化

貧しい人びとを優先するカトリック教会

この会議では、草の根レベルにおいて、基礎教育によって政治意識を呼び起こし、正義促進の運動を広げていくことが、教会の司牧活動の選択として取り上げられている。「正義と平和は意識革命（意識化）と、政府へも圧力のかけられる民間組織の結成によってかちとることができる」のである⁵⁾。

4. 解放への闘い

意識化の論議で明らかとなったように、教会の役割は社会を根底からくつがえすような全体的な勇気ある変革を支援することにある⁶⁾。また、暴力行使に走りやすいことも認めるが、社会意識に目覚め、組織として団結したキリスト教基礎共同体の力こそ、正義と平和を創り出していくことを強く訴えた⁷⁾。

(2) プエブラ会議

プエブラ会議（1977年）において、ラテンアメリカ司教団は貧しい人びととの連帯をより一層明確にした。「教会は貧しい人びとの側に立ち、その完全な解放をめざす転換を必要としている⁸⁾」。これは全4部からなる声明文1134～1165の第一章に述べられている。

その内容を以下に要約する。

1. 目的

- 1) われわれの目的は、キリストが貧しい人びとの苦しみを分かち合い、神の福音を特に貧しい人びとに伝えたことを明らかにすることである。
- 2) ラテンアメリカには不公平、不正が満ち溢れているが、正義と自由に基づく社会を築き上げたいなら、われわれは「貧しい人びととの連帯」を必要とする。
- 3) 社会的、政治的、経済的構造は変革を要する。しかし同時に、回心によって一人ひとりの、また集団としての民衆の生き方も変わらなければならない。
- 4) 貧しい人びとと連帯して、彼らを利己主義や誤った考え方から解放す

る。

5) 同様に貧困の証人として、教会は富める人びとをも回心に導く。

2. 方法

1) 教会はその組織、構造、聖職者自身の生き方を改めなければならない。

2) こうした回心には簡素な生活と、世俗の権力ではなく、神の力に身を任せる生き方が求められる。

3) またこれは、教会自身が貧しい人びとに心を開き、その価値観を理解し、彼らの参加を喜んで迎えるように変わっていくことでもある。

3. 具体的行動

1) われわれはこの大陸中に蔓延する極度の貧困が神の福音に背くものであると宣告する。

2) 貧困の根源である構造を分析し、告発する。

3) 他の教会や公正な社会を望むすべての人びとと手をつなぎたい。

4) 労働者、農民が自由に自らの未来を築く人びととして扱われるよう支援する。

5) また、こうした人びとが利益を守り、公共の福祉を促進する組織を自由に形成できるよう、彼らの基本的人権を守る。

6) その土地の文化、民族の維持、育成に力を貸す。

7) 教会の貧しい人びとの優先が、すべての人びとに新たな希望をもたらすことを願う。

(3) メデジン・プエブラを越えて

メデジン会議は、その後の教会公文書に多大の影響を与えたが、それは「世界の正義」(1971年、世界司教会議(シノドス))や「福音宣教」(パウロ六世、1975年)に反映している。特に、貧しい人びとを優先するという点において、ヨハネ・パウロ二世のプエブラ声明に対する反響は、その後の教皇の世界巡訪中の発言によく表れている。なかでも1980年6月30日～7月11日までのブラジル訪問が鮮明な印象を残した。ここではその際行

われた三つの説教から若干引用してみたい。

1. CELAM の 150 人の司教に対して

多くの民衆が悲惨な状況に陥り、富める者と貧しい者との格差が淵のように横たわっている現実直面して、歴史的なプエブラ会議の冒頭に強調されたように、あなたがたは貧しい人びとの優先を正当に求めました。これは排他的な意味を持つものでは決してありません。貧しい人びとは事実神がお招きになる人びとです。貧しい人びとの顔には、ヤハウェの使い、キリストが宿っているのです。貧しい人びとへの福音宣教こそ、イエスの使命の最上の証しであります。あなたがたは正しく、次のように宣言しました。「われわれの仲間に対する最善の奉仕は福音宣教であり、神の子としての力を発揮させてやり、不正から解放し、内的成長を促すことである」と。これこそ教会の愛を表す選択であり、教会の普遍的な福音宣教の使命とともにある愛なのです。

2. ブラジルの司教たちに対して

プエブラで力強く宣言された、貧しい人びとの優先は、つましく暮らし、力もなく、苦しみを受けても人知れず涙を流しているような、社会の片隅に追いやられている人びとの孤独な魂への呼びかけなのです。こうした人びとが、人間として、また神の子としての尊厳を自覚させるための呼びかけなのです。

3. ヴィディガルのファヴェラの市民に対して

この説教は、「貧しい者の教会はキリストとともに至福を宣言する」と題したものであるが、なにゆえ教会が貧しい人びとの優先を実施すべきなのか、あるいはすべきでないのか、が詳細に分析されている。教皇は「貧しい者の教会」を、次のように説明している。

—これは、一つの階級やカーストの教会ではない。

—人びと、社会に緊張や闘争を招くことは望まない。

—権力闘争や政治へ直結した目的のために働くものではない。

しかし、教会がすべての人の教会であるからには、貧しい者の教会は、異なるカテゴリーの人びとにそれぞれ異なった意味合いを持っている。一物質的に全く恵まれない人びとにとっては、彼らが神に最も近い存在であるから、人間としての尊厳を保ち、いつも他の人びとに心を開いているように、と励ます教会でなければならない。

一多少暮らしにゆとりがある人びとには、自分たちのことだけにとらわれずに、もっと貧しい人びとのことを考え、組織だった方法でその貧しさ、苦しさを分かち合うように、とさとす教会である。

一富める人びとには、裕福であることを良心のとがめとし、持てる物を与えるように促す教会である。このときいかに与えるか、またいかに社会経済上、人と人の間に格差ではなく、平等をもたらす生活をつくり出せるか、についても考えさせる働きもする。

この後、教皇は貧しい者自身が、自分たちを抑圧している不正な構造を変えらるるためにとるべき行動について強調し、貧困と闘うことを大いに励まされた。

その他、ヨハネ・パウロ二世教皇の回勅「働くことについて」や「いくしみ深い神」をはじめ、多くの回勅についても述べたいところであるが、紙面の関係上割愛せざるを得ない。

III 修道会総会にみる「貧しい人びとの優先」

1980年代初めから最近に至るまでの間、ほとんどすべての男子、女子修道会、宣教会は全世界の代表が集まって開催する総会を持っているが、そこに共通点がみられる。ほとんどすべての修道会が、その声明において、「貧しい人びとの優先」を強調していることである。紙面の関係上すべてを紹介するわけにはいかないが、若干の観想修道会と活動修道会の総会だけを要約的に取り上げることにする。

(1) カルメル会

1980年、カルメル会は総会をブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開いた。公文書には「貧しい人びとへの責任を問われて」という題がつけられている。以下にその第3章、「恵まれない人びとの優先」を引用する。

カルメル会は、人びとを解放する存在として、神の意志を表すものでなければなりません。事実、歴史のなかで「小さきもの」として扱われる人びとと連帯し、言葉ではなく私たちの生き方によって福音宣教を行う私たちの会内にも希望や進歩はみられるのです。そこで、まごころをもって貧しい人びとを最優先することを提案します。正義について私たちは語りませんが、それは決して避けているのではなく、神の福音の本質的な要素です。もし私たちがキリストに誠実でありたいなら、あらゆる手段に訴えてでも、この社会の一部と化し、この時代の多くの人びとの肩に重くのしかかる構造的不正に抵抗し、闘わなければなりません。

私たちは「貧しい人びとの最優先」(Option for the Poor) といいますが、これはカルメル会のカリスマの主な特徴である務め、「イエス・キリストの足跡に従って生きること」を維持させていくこととしてすすめられるものです。イエスの足跡をたどって生きることはまた、貧しい人びと、キリストのイメージが好んで反映されている人びとと共に忠誠を尽くして生きることなのです。

この選択は同時にカルメル会の托鉢集団のなかでの清貧という誓願から論理的に生まれるものでもあります。カルメル会は誕生したときから、会の規則として定めたように、生涯変わらぬ信仰生活の証しとして解放者たる姿勢をとり、神への従順をもとに生きなさい、と呼びかけられる神の声に応えているのです。例としてマリアとエリヤをあげれば、二人は貧しい托鉢修道者の立場から貧しい人びとへの奉仕を行いました。この貧しい人びとの最優先は、それぞれの生活や仕事の環境によって表し方が異なるでしょう。しかし、この実行には生活の場や新しい勇氣ある生き方の選択が

必要とされます。それには聖霊の力の働きかけがあるのかもしれませんが。

「小さきもの」への選択をすると、完全な安定を守ることができないのは明らかです。誤解されたり、地位を失ったり、排斥されたり、この世の有力者に押しつぶされる危険があります。すなわち、この世の「小さき人びと」の「十字架の道」に身を投じる「殉教」の人生ということも真剣に考えなければなりません。

(2) 神言会

次の二つの文書は、1982年11月の第11総会が公布したものである。「貧しい人びとの連帯による正義と平和の推進」、「清貧と財政への指針」。その序文にこう記されている。この二つを全会員に出すのは、責任者たちがこれらこそ今後のわれわれにとって、最優先されるものとして評価しているからであり、またわれわれの貧しさの証しが、正義と平和の運動の確かな証しと密接につながっていることも感じているからである。

挑戦への対応

1. 対応の必要条件

貧しい人びとと連帯して正義と平和の推進をめざす挑戦に呼応するにはまず、自分たちの生活様式と、従来の使徒的活動を反省する必要がある。

1-1 意識化と貧しい人びとの生活への仲間入り

われわれ一人ひとりの育てられてきた環境や受けてきた教育によって、貧しい人びとと全く接触できなくなることが多い。快適で安穩としていられる世界にしながら、正義と平和のために活動することは不可能である。常に自らの意識化を心がけ、われわれの生きている社会、政治状況を批判、分析する姿勢を保つことによって初めて、抑圧されている、貧しい人びとの悲惨な姿に目が開かれてくるのである。従って、少なくとも一度は、今日多くの人びとが強いられているみじめで、危険や不満の多い境遇にわが身を近づける機会を見つけるべきである。

1-2 個人また共同体としての生活様式

使徒的活動として要請されることが、時として個人や共同体の生活様式の正当化に利用されることがあるが、誓願したはずの貧しさが、その生活様式に表れていないことがよくある。われわれが、貧しい人びとを最優先することを証すためには、個人として、共同体としての生活様式が、簡素で寛大、暖かいもてなし、そして身近にいる貧しい人びとへのまごころもった関わり、被雇用者への公正さといったものに裏打ちされていなければならない。

1-3 相互の関係

国際性や聖職者と信徒との協力関係という特性があるにもかかわらず、われわれの共同体のなかにある偏見を克服しきれてはいない。正義の推進へのわれわれの関わりが意義を持つのは、われわれの間に立ちほだかる人種や文化、地位の壁が愛の精神や、他人を尊敬する気持ちによって越えられたときだけである。

1-4 不正と搾取の構造への加担

使徒的活動に必要な収入をまかなわなければならない大きな組織である立場上、不正や搾取を招く構造に取り込まれた企業を支援してしまう。しかし、正義を推進するためには、こうした構造へのわれわれの加担を、真実の目をもって批判し、可能ならばその構造から手を切ることも必要となる。

1-5 教育施設

われわれの教育施設のほとんどが、貧しい人びとのためのミッション・スクールとして始まったのにもかかわらず、いつの間にか、富める人びとや中流階級向けの学校になってしまうこともある。われわれの正義推進活動は、こうした学校施設を福音である正義と平和、慈しみの意味を教え、抑圧された貧しい人びとへのキリスト者の責任を自覚させる場にしていくことを明らかにさせていかなければならない。これは先進諸国、第三世界の別なく、われわれの開いた教育施設すべてにあてはまることである。同

様に、貧しい人びとの優先を実行するにあたって、できるだけ教育を受ける機会に恵まれない人びとのために、学校施設を提供することも望まれよう。上のような目的にかなわない学校を閉鎖することも真剣に考慮しなければならない。

1—6 マス・メディア関係

マス・メディアや出版物は、福音宣教というわれわれの務めに重大な役割を果たしてきている。マスコミに関わる場合、正義と平和問題に焦点をあてて、貧しい人びとの優先を補い、充実させるべきである。マスコミの力を借りて、われわれは声なき声の代弁者になるのである。

2. 直接的な使徒的活動

貧しい人びととの連帯による正義と平和推進活動に参加するには、貧しい人びとのために、また貧しい人びとと共に、もっと直接的に使徒的活動に関わっていかなければならない。

不正と抑圧の問題は、世界のさまざまな地域で、その現れ方を異にするため、われわれの参加の形も当然、地域ごとに違おうであろう。あえて下記に、われわれの取り得る主要な活動タイプを述べてみたい。

2—1 天災や社会変動によってひき起こされた悲惨な貧困状態を即座に改善することを目的とした救援、奉仕。

2—2 いろいろな面で援助を受けるだけにとどまっている貧しい人びとを助けるための社会計画（例、施療院、孤児院など）。

2—3 貧しい人びとが、自ら自由と開発を生み出す中心の力となれるような、自立に基づく共同体を組織する開発計画。

2—4 必要性と可能性に目覚めさせる、貧しい人びとの意識化運動と、彼らの生活を悪化させている社会政策決定への参加権と平等取得闘争への協力、そして富める者を対象として、利益獲得、既得権遵守が貧しい人びとの苦しみの原因となっている社会構造についての理解を促す。

2—5 人権侵害と権力の濫用の実例を公にし、正義の推進と人権擁護の

ために発言する。

2-6 核武装や兵器増強による国内外の資源濫用に抗議し、軍備縮小と平和推進のための平和運動に支援、参加する。

2-7 一時的ではなく、可能な限り全面的に貧しい人びとの生活様式を取り入れて、草の根レベルでの彼らの仲間となる。

(3) ドミニコ会

ドミニコ会は1983年3月に総会をローマで開いた。ドミニコ会もまた、「貧しい人びとの優先」を決めたが、これには総長の選挙が影響している。この選挙で南アフリカ管区長のアルパート・ノラン神父⁹⁾が総長に選ばれたが、彼はすぐに辞任するというので、歴史にその名をとどめることになった。この理由を次のように説明している。ノラン師は以前から総会の会員に「南アフリカ共和国内で自由のために闘っている抑圧された人びとを、神学と宣教活動によって支援するという私の仕事は、総長の任務よりも重要で、やめるには忍びない」と語っていた。しかし、総会参加の会員はノラン師を選ぶことに決め、彼が貧しい人びと、抑圧されている人びとに宣教を通じて表したことは、今日貧しい人びととともに立ち上がっている多くの会員のあり方と志を象徴するものだとしている。ノラン師は棄権し、ダミエン・バーン神父が急拠、ノラン師の代わりに選ばれ、次のように述べた。「単にド・コエスノングル元総長とその功績の後継者であるだけでなく、ノラン師がその選挙で示したこと、すなわちドミニコ会の宣教や神学を福音宣教の根本的要素として、正義と平和を求める闘いに教会の奉仕を位置づけたことも、引き継いでいくつもりである」と。

次に、ドミニコ会が採択した「貧しい人びとの優先」について説明した文章を引用する。

1) 貧困を増大させ、抑圧を広げるいかなる不正な状況も、教会とドミニコ会のカリスマに常に挑戦している。貧しい人びとと正義の最優先は、われわれの宣教と生への確信を求めるしるしであり、動機ともなる。

- 2) 福音宣教者として、貧しい人びとの優先が、われわれの宣べ伝えている神そのものの優先であることを確信していなければならない。貧しい人びとの叫びを神は耳にされ、彼らの権利を擁護される¹⁰⁾。貧しい人びとが「祝福されたもの」と呼ばれるのは（マリアの賛歌と山上の垂訓）彼らに救い主の希望を伝え、メシアが貧しい人びとのなかに初めて現われ、ともに生き、その苦しみを分かち合い、解放をもたらしたからである。
- 3) 神の福音を貧しい人びとに宣べ伝えるにはまず、貧しい人びとこそ神の国の「選ばれた人びと」であるから、彼らに福音宣教がなされなければならない。貧しい人びとと一致することによって、キリストの例にあるように、キリストに従うことと、貧困を「社会的罪」として告発することが一つになる。
- 4) 貧しい人びととの真の連帯のなかで得られるわれわれの貧しさは単なる物質の拒否とは異なる意味を持つ。従順が真の責任よりも受身やあきらめを表すことが多い世界にあって、われわれの従順は抑圧や権力の濫用への反抗のしるしとなりうる。またわれわれの貞潔は人格の品位を下げ、人間を単なる物としてしか扱わない性を拒絶し、人間をその男性、女性としての人格をもって受け入れる証しとなる。
- 5) 正義と貧しい人びとを優先することは、不正の構造の告発、世界における兄弟的交わりと和解のための働き、そしてわれわれ自身の回心のための闘いを義務づける。貧しい人びとを優先しなければ、富める人びとを優先する危険を冒すことになる。
- 6) 貧困と人権蹂躪、構造的な軍備増強競争と国際融資機関それぞれの相互依存関係について調査し、その秘密を暴露していく必要がある。
- 7) 軍事競争の速度が増せば増すほど、それだけ軍事化の危険度も高まり、軍備とわれわれとのつながりが不明瞭で、矛盾的なものとさえ思われてくる。平和への選択は、貧しい人びとと正義への選択の絶対的な要素なのである。

(4) イエズス会

イエズス会は1983年9月に第33総会を開いた。以下にその教令の一部(48項)を引用する。われわれの使命は、貧しい人びととの連帯にある。従順がわれわれを使命に赴かせるが、貧しさがわれわれを信用されるものにしてくれるのである。他の多くの修道会とともに、われわれも貧しい人びとの最優先を採択したい。この選択は貧しい人びとを特別に愛するという決定である。なぜならわれわれはすべての家族、すべての人の癒しを望むからである。こうした愛はキリストのように、だれ一人として排斥せず、またすべての人の求めに応じるのである。直接的にも間接的にも、この選択はイエズス会士の生き方に具体的な形で表れるであろう。従来われわれの使徒的活動の方向性や新しい使徒的活動の選択に、「貧しい人びとを最優先する」方針は、具体的な形で表われる。

1980年6月、ローマのイエズス会本部に世界から社会使徒職の代表が集まって「現代世界の諸問題に取り組むべきイエズス会の現実と展望——『信仰の奉仕と正義の推進』の視点から——」というテーマの会議が開かれた。筆者もアジアを代表して参加したが、ペトロ・アルベ前総長は閉会にあたって、次のような挨拶をした。「……キリストの愛に根ざしているイエズス会にとって、この愛こそが『信仰の奉仕と正義の推進』を果たす力である¹¹⁾。『愛であるゆえに正義である神への信仰¹²⁾』に私たちは召されている。愛、正義、信仰は相互に緊密に結ばれている。『私たちは神の愛と人間への奉仕を不可分に結合する福音の証人である¹³⁾』。……私たちがこの福音に戻るときに、どうして信仰の奉仕と正義の推進を分け得ようか。一方では次のように自らに問いかける。私たちの兄弟が世界の不正な罪深い構造の拒絶の結果、苦悩しているのに、私たちが必要としているその兄弟に対して、私たちの持っているものを分かち合おうとせず、真実の具体的愛を示そうとせずに、どうして私たちは福音をのべ、信仰を宣布することができるだろうか。他方では、兄弟に対して私たち自身を捧げつくす

ほどにかりたてる愛が、私たちを神と神の親密な一致から切離すときに、私たちが使徒的活動を実行していると、どうして信じることができるだろうか。真のイエズス会員は神の愛と隣人愛によって、信仰の奉仕と正義の推進にかりたてられていることを、会の社会使徒職の理論も実践もともに示している。神の愛と隣人愛だけが信仰の奉仕と正義の推進に意味を与えるのであるが、この愛を私たちすべての会員が明確に理解し、この愛に忠実に生き得るよう、神に祈り求めながら話を終えたい。

われわれにとって今日、重大な問題は、いかにしてこうした公文書や声明をわれわれの日常の生活や仕事のなかで、個人個人のキリスト者としてだけでなく、全世界のカトリック教会のメンバー、修道会、共同体全体として実現させていくか、ということである。その意味で最後に「貧しい人びとの優先」の意義について考察する¹⁴⁾。

Ⅳ 「貧しい人びとの優先」の意義

貧しい人びとを優先するとはどういうことかについての最良の文献は第三世界に見出される。それは第三世界の状況に色濃く特徴づけられている。従って、先進諸国の人びとにとっては、この問題を身近な体験として受けとめるのは困難であろう。「貧しい人びとを優先する」という問題が、他のどのような神学的な問題よりも分かりにくい理由は二つある。その一つは、先進諸国の人びとが地球的な規模の貧困に直面すると、必ずやっかいな感情にとりつかれる点である。先進諸国の人びとは不正な制度から利益を受けていると自覚し、自分たちに幾分責任があるのではないかと自責の念にとりつかれるからである。いま一つには、より深い神学的な困難さがある。それは「貧しい人びと」と「一般の人びと（大衆）」との関係に関する事柄である。第三世界の神学者たちは自分たちの周りの状況から、第三世界に住む大多数の人びとは確かに貧しいので、これら二種類の人びとを

貧しい人びとを優先するカトリック教会

一つのグループ、つまり貧しい人びととして描いている。しかし裕福な国ぐにの状況はそれと全く異なる。先進諸国においては、経済的な意味で貧しいといわれているのは、人口の四分の一以下に過ぎない。むしろ政治的、文化的な意味では先進諸国の多くの人びとも「貧しい人びと」といえるであろうが。

本物の神学は、それがどのような地域的な状況から生まれたものであったとしても、世界全体の現実を取り扱うべきである。従って先進諸国の神学者は、キリスト者が「貧しい人びとの教会」になれるよう助けようとするなら、まず世界の貧しい人びとの大部分が、自分たちとは別の大陸に住んでいるという事実を直視すべきである。換言すれば、先進諸国の教会が、社会正義を本腰入れて推進しようとすることはなまやさしいことではなく、また同時に、そこに住んでいる「人びとの教会」の一員として生活することは容易なことではない。ブラジルの教会と米国の教会を比較すると、この点は明らかになる。ブラジル教会の指導者が貧しい人びとを優先する決断をするなら、富裕で権力を持つ人びとから反対されることを覚悟しなければならない。しかし、反対者はどれほど権力があっても、国民のなかでは少数派に過ぎない。大多数の国民は「私たちの教会」になったことを喜ぶであろう。他方、米国の大部分の人びとは、地球的な規模からすれば、特権階級に属し、また金持ちである。そのため、先進諸国の教会の指導者が貧しい人びとを優先すると決断したとしても、自国の大多数を占める主流のキリスト者の支持を得ることは必ずしも期待できない。

先進諸国において、貧しい人びとを優先するとは、どのようなことを意味するのであろうか。貧しい人びとを優先するということは、ある意味で極めて「革命的」な事柄を要求している。貧しい人びとを優先しようとするれば、自分たちの生活様式においても、仕事においても、政治的な活動に関しても、教会のあり方についても、決定的な変革を起こさなければならないからである。つまり、価値基準の優先順位を根本的に転換することだ

からである。私たちに最も影響を及ぼすのは、どのような社会で暮らしたいのか、ということではなく、明日、どのような選択をしようとしているかということである。本当に大切なのは抽象理論ではなく、今すぐに何を始めるかである。

貧しい人びとを優先するとは、貧困を選択することを意味するのではない。貧しい人びとを選択することである。貧しい人びとを優先するとは、人びとを、特に社会のなかで軽視され、抑圧され、差別され、弱い立場におかれている人びとを大切に作る生き方を選び、また、それを実践することである。すなわち、制度や組織よりも人間が大切であると日常の行動をもって宣言することにほかならない。「貧しい人びと」とは経済的にどの程度まで貧しい人びとのことかとか、経済的に限定せずもっと広義に定義すべきではないか、などと議論するのは不毛である。基本的人権、すなわち衣食住の権利、労働する権利、決定に参加する権利、良心に従って神を礼拝する権利、特に生存権さえも人びとから奪っている制度よりも、その人びとを大切にすることである。

貧しい人びとの優先的な選択とは、要するに個人の人格的な選択である。しかし同時に、ここで問題にしている優先的な選択とは、単なる個人的な霊的成長をめざす苦行や修徳ではない。この選択は、単に個人のレベルや対人レベルでの事柄ではなく、公的な性格を持つ行為であり、政治的な次元に属する行為である。貧しい人びとを優先する選択とは、地域や国内においても、世界的な次元においても、社会を損なっている構造的な不正に対する一つの応答である。より人間らしい世界、より正義にかなった社会を築き上げようとする熟慮の末の献身である。貧しい人びとを優先する選択は、社会正義を推進し、共同体において弱い立場におかれている人びとと、弱い立場の国ぐにを守ることである。

「貧しい人びとを優先する選択」という表現に対しては、しばしば強い抵抗や反発がある。その背後には、特権階級や、またそのような階級に追

従っている人びとが不公平な特権を手放したくないという気持ちがある。それだけでなく、この選択の意味を正しく理解していないことにも由来している。つまり、構造的な不正が何であるかをよく把握していないことによる。個人の行為による不正と構造的な不正との違いがはっきりしていなければ、貧しい人びとを優先することの本質を見誤る。その結果、この選択は単に対人レベルで、金持ちの人びとを排斥することとして解釈され、何よりも重視すべき構造については見逃してしまうことになる。この選択はまず構造的に正義にかなった社会を築き上げようとするものである。

「貧しい人びとを優先する選択」について語る場合、それは貧しい人びとが優先される社会のために働くことを意味している。このことは、金持ちの特権階級の人びと、貧しくない人びとを排斥することではない。ヨハネ・パウロ二世教皇が述べているように、それは、貧しい人びとを優先する選択であっても、貧しい人びとだけの選択ではない。だれ一人排斥されない。しかし、貧しい人びとが優先されるのは、彼らのニードが他の人びとよりも大きいからである。「あらゆる人びとへの公平な分配」は正義にかなった社会をつくり出すが、それが可能となるのは、一人ひとりが既に公平な取り分を得ているときだけである。もし社会のある人びとが既に、不正の犠牲者になっているなら、公平な分配はその不公平をさらに悪化させるだけである。従って、社会正義は、時間や財産など私たちが持っているすべてを、すべての人に平等に分配することを要求するのではない。むしろ、社会正義は、私たちが社会のなかにバランスをつくり出すように働くことを要求している。恵まれているグループは既に十分な財産を持っている。従って、貧しい人びとを選ぶのは、社会のなかのバランスがとれるようにするためである。

それでは、貧しい人びとを優先するように求められているのは、だれであろうか。すべての人である。貧しい人びとの優先は、キリスト教信仰への普遍的な招きの一部であり、すべての人に向けられた招きである。その

使命の性格は、社会の上層部にいる人びとや中流の人びと、また底辺の人びとそれぞれに異なっている。例えば、経済的、社会的、政治的権力を握っている人びと、各組織において責任の立場にある人びとにとって、この呼びかけは直接に回心の呼びかけである。彼らは、抑圧されている貧しい人びとの叫びに耳を傾けるよう招かれている。彼らにとって、貧しい人びとを優先する第一歩は、今日の社会構造が彼らを、他の人に対して不公平に優先権を行使する立場においていることを自覚することである。

結語にかえて

日本のカトリック司教団は1984年6月に、「基本方針と優先課題」を発表し、そのなかで次のように述べている。「今日の日本の社会や文化のなかには、すでに福音的な芽生えもあるが、多くの人びとを弱い立場に追いやり、抑圧、差別している現実もある。私たちカトリック教会の全員が、このような『小さな人びと』とともに、キリストの力でこの芽生えを育て、すべての人を大切にする社会と文化に変革する福音の担い手になる¹⁵⁾」。更に、1986年12月、同司教団は、福音宣教推進全国会議の課題として「開かれた教会づくり」の第一の柱として「社会とともに歩む教会」を掲げ、「人びとと苦しみを分かち合う教会」、「社会の良心となる教会」、「新しい社会をつくる教会」をあげている。

本稿で紹介した世界教会、各修道会が課題として取り上げ、取り組んでいる貧しい人びとを優先する方針に沿って、日本カトリック教会のすべてのメンバーも、現代世界に福音を証しする実践に積極的に励んでいきたいものである。

(筆者は上智大学社会正義研究所員、経済学部経営学科教授)

注

- 1) 第二バチカン公会議、『現代世界憲章』1965年，1項（長江恵訳，中央出版社，1969年）。
- 2) プエブラ会議文書，1977年，1134項。
- 3) メデジン会議文書，1968年，14：2項。
- 4) 同上，14：9項。
- 5) 同上，2：18項。
- 6) 同上，2：16項。
- 7) 同上，2：19項。
- 8) プエブラ会議文書，1134項。
- 9) 彼については，最近翻訳出版された書物，アルバート・ノーラン著，野村裕訳『解放の福音・イエス』新世社，1987年を参照されたい。
- 10) 出エジプト記，22章21～23節参照。
- 11) イエズス会第32総会教令（邦訳，イエズス会日本管区発行，1976年）。
- 12) 同上，第2教令。
- 13) 同上，第4教令31項。
- 14) この内容は，主に Donal Dorr, *Spirituality and Justice* (N. Y. : Orbis Books, 1985) に負うところが多い。
- 15) 日本カトリック司教団の1984年6月定例司教総会における「基本方針」2項。

The Catholic Church which prefers the Poor

Keizō Yamada

The Option for the Poor has become one of the main characteristics of the Catholic church today. This can be seen both in the formal statements of the church and in the various Religious Orders' chapters. In this study I intend to consider the meaning of the Option for the Poor in these documents.

I. The characteristics of Vatican II.

II. Option for the Poor as seen in the formal statements of the church.

1) Bishops' Conference at Medellin

1. Structural Injustice
2. The poverty of the Church
3. Conscientization
4. The struggle for the Liberation

2) Bishops' Conference at Puebla

1. The purpose
2. The methods
3. The concrete actions

3) Beyond Medellin and Puebla

1. The Pope's message to the 150 Bishops of CELAM
2. The Pope's message to the Bishops of Brazil
3. The Pope's message to the citizens of the Favella of

Vidigal

III. Option for the Poor as seen in the chapters of various Religious Orders

1. Carmelites

貧しい人びとを優先するカトリック教会

2. S. V. D.

3. Dominicans

4. Jesuits

IV. The meaning of the Option for the Poor

<研究ノート>

イエズス会系学校教育の特徴

アンセルモ・マタイス

1986年12月、イエズス会本部から、イエズス会の「ratio studiorum = 勉学の方針」の出版400周年を記念して、「ratio studiorum」の現代版が発表された* のは、まさに現代におけるイエズス会の使命「信仰の奉仕と正義の促進」をいかにして、現代の大学を含めて、学校教育に推し進めることができるかという目的によると思われる。以下に上智大学社会正義研究所の理念に焦点をあわせて、主なところを要約してみたい。

イエズス会の教育はただ知識を提供するばかりではない。むしろ一つの特徴は、価値観の形成が教育の不可欠の要素の一つであると肯定されているところにある。利己主義と他者に対する無関心の克服は一つの目標にされなければならない。またその教育は現実の世界を理解し、批判的にそれを評価するような能力を育てようとするのである。その理解は人びとと世界との構造が変わることが可能であると信じていることを含んでいる。またすべての人びとの人間尊厳とともに、自由の可能性を提供できる、正義にかなう体制作りに貢献しようとするものでもある。その教育のモデルは終局的にイエズスにほかならないが、そのイエズスは神の愛と許しを証しし、苦しんでいるすべての人びととの連帯において生き、他者への奉仕に自分の命を捧げる。そのようにして学生自身も「man for others = 他者のための」キリストに習って、他者への奉仕の生き方に導かれることになる。

* The Characteristics of Jesuit Education, Rome, December 8, 1986. 邦訳も88年3月に出版予定『イエズス会の教育の特徴』（高祖敏明訳，中央出版社）。

この文献の中心になるのは第5セッションである。イエズス会の教育は人生の積極的な献身の準備であり、正義を行う信仰に仕え、他者のための男女を形成しようとし、貧しい人びとのための特別な関心を示すことになっている。正義を行い、平和のために働く信仰の目標は新しき人間と新しき社会であろう。新しき社会において個人個人は完全な人間になる機会を得て、他者の人間の開発の促進の責任を受け入れるのである。端的に言えば、学生から要求されている積極的な献身とは、より人間らしい世界と愛の共同体を目的にする戦いへの自由な参加であるといえよう。イエズス会の学校では、焦点になるのは正義のための教育であると主張されるのは注目に値する。

1. 正義の問題はカリキュラムに扱われるべきであるが、それは必ずしも一つの講座を設けるということの意味するわけではない。むしろ、あらゆる講座に浸透しなければならない事柄であるべきであろう。その意味で社会の分析と批判は不可欠であろう。

2. イエズス会の学校の方針と計画は、正義を行う信仰を具体的に証しするものでなければならない。逆にいうとすれば、消費社会の価値に対して逆な証しをすることになる。

3. 正義の業がなければ、正義への真の改心があり得ない。社会の分析は不正の構造的な次元の体験に基づく反省になる。教育の共同体の成員は、今日の深刻な問題を自覚し、関わりなければならない。

「他者のための男女」という言葉は、繰り返し浮き彫りにされているが、学生自身はいただいている才能などが自己満足と自己利益のためではなく、人間共同体の福祉のために開発しなければならないと自覚することを意味する。しかも他者への奉仕というものは出世と金儲けよりも深いところで自己実現につながるという、世間と違う価値観を身に着ける必要がある。

現代のカトリック教会の根本的な方針の一つには「貧しい人びとへの優

先的選択」がある。そのなかに経済的手段を持たない人びと、障害者、疎外され、人間の尊厳に価する生活を何らかの意味で送れない人びとが含まれている。この選択はイエズス会の教育において、どのような学生が受け入れられるのか、またどのような教育が施されるのかなどに反映されるべきであろう。原則として、その教育は貧しい人びとを含むすべてに開かれるべきであろう。しかし、どのような学生が受け入れられるかというよりも、根本的なのはどのような教育が施されているかであろう。学校の共同体全体は、伝え、証しし、学校の方針と政策に具現化する価値というのは、人間尊厳のなかに生きる手段を持たない人びとに対して特別な関心と呼び起こすものであると強調されている。結論として教育の諸計画は貧しい人びとの福利を目的にし、貧しい人びとの観点からなされる必要があろう。

別な角度からみれば、イエズス会の教育機関は社会のなかに存在しながらも、必ずしも社会に迎合する必要はない。今日の唯物論を前にして、精神的な価値を大事にする世界観、利己主義を前にして、他者への関心、消費至上主義を前にして、質素、社会的不正を前にして、貧しい人びとの側に立つことを促進することになろう。

初期の伝統を継承して教育の水準の高さとその卓越性は強調されているが、しかしそれ自体は目的ではなく、あくまでも貧しい人びとのニーズを優先し、正義の促進のために自分の利益を犠牲にするという価値の形成と結びついて初めて評価されるものである。

教育の「卓越性」との関連において「magis = より大いなる」という、イグナチオ・ロヨラから伝わってきた貴重な言葉が次のように解説されているのは興味深いと思われる。「人生の各段階において、一人ひとりがそれぞれの個性的能力・資質の十全な発達を遂げることであり、同時に、生涯を通して喜んで、こうした能力発達を継続すること、また、開発したこれらの能力を、他の人びとのために使うという動機を含むものである」。社会の「リーダー」を育成するということは、また伝統的なイエズス会の

教育の目標であったが、しかしその「リーダー」はあくまでも奉仕する「リーダー」であり、また正義のために働く人びとを作り出す波及効果をもたらすものでなければならない。

イエズス会の教育の上述した特徴はただ会員のものだけではなく、学校の共同体を形成しているすべての教職員、並びに学生諸君のそれぞれの活動に行き渡るものでなければならないのはいうまでもない。

(筆者は上智大学社会正義研究所長、文学部人間学研究室教授)

The Characteristics of Jesuit Education

Anselmo Mataix

SUMMARY

I make a presentation of [The Characteristics of Jesuit Education] issued by the Jesuits to commemorate the 400 th anniversary of the [Ratio studiorum]. I put particular emphasis in the relation between education and promotion of Justice.

<特別寄稿>

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

ジョン・ソブリノ

（エルサルバドル，セントロアメリカーナ大学教授）

はじめに

I 第三世界からみた教書『万人に経済正義を』の重要点

1. 教書の大前提
2. 世界の現状
3. 教書の原則「貧しい人びとへの選択」
4. 世界経済が貧困を生み出すメカニズム
5. 教書の限界

II 教書が打ち出す原理についての神学的分析

論題 1

「第三世界の貧困は深刻であり，生き続けることすら難しい。人びとは次第次第に死に追いやられている。この深刻な貧困はわれわれの世界を死の世界としている」。

論題 2

「今日の第三世界の貧困は本質的に不正に基づくものである。これは他人から押しつけられた貧困であって，貧しい人びとは犠牲者にされている。この不正な世界は，それ自体，暴力の世界であり，死の世界である。そして，それ故，罪の世界である」。

論題 3

「第三世界の貧困はこの世界の真相を明らかにした。しかし，世界はそれをありのままに認めようとはしない。貧しい人びとは抑圧され，貧しい人びとが表

本稿は1987年11月27日，上智大学社会正義研究所，国際基督教大学社会科学研究所主催，第7回国際シンポジウム「万人に経済正義を」において一部講演された“Pobreza y Opción por los Pobres en el Tercer Mundo”と題する論文の全訳である。

した真実も押しつぶされている。この不正な世界はまた嘘の世界でもある」。

論 題 4

「この不正な貧困の世界においては、貧しい人びとのための選択、貧困に反対する選択が必要である。この選択は、貧しい人びとの側に立つもので、闘争的で、しかも普遍的広がりを持つものである」。

論 題 5

「貧しい人びとへの選択は人びとに要請されているものである。しかし、同時に、この選択をなす人びとにとってもこれは救いとなる。逆説的ではあるが、貧しい人びとが世界に光と救いをもたらす。この選択において、世界の人びとは連帯のうちに相互の関係を結び、生命と和解と愛とを生み出す」。

結 論

はじめに

米国カトリック司教団の教書『万人に経済正義を』は米国にとっても、また米国と同様の問題をかかえる先進工業国にとっても極めて重要な文書である。先進工業国ばかりではない。先進工業国の動きからいやおうなく多大な影響を受ける第三世界の国々にとっても、これは重要な文書であるといわねばならない。

この論文では、まず第一部として、第三世界に起こっている注目すべき事柄のうち、教書が取り上げているいくつかの問題について簡潔な解説を試み、続いて第二部として、同教書に盛られたいくつかの理論的原則を掘り下げてみたいと思う。われわれはいま、同教書についてラテン・アメリカの視点から考察しようとしている。より具体的にいえば、中米、特にエルサルバドルの視点からである。またこの際、現在南米で行われているキリスト教神学の視点も取り上げねばなるまい。かなうことであれば、このような考察がこの日本の国のためにもなることを願っている。日本は強い経済力を持ち、世界をより正義にかなったものとしたり、あるいは不正なものとする力すら持っているからである。現在、地球には50億もの人間が生活している。人びとは、それぞれの哲学やイデオロギー、あるいは宗教

を持ち、またそれによって表された人生の意義についてのさまざまな考え方を持っている。経済上の正義を実現することは、こういった人びとの生死の可能性や、和解か衝突かという可能性に大きな影響を及ぼすのである。

I 第三世界からみた教書『万人に経済正義を』の重要点

1. 教書の大前提

世界は全体として悪い状態にあり、変えなければならない。これが教書の大前提である。人類の大部分が基本的な生活水準にも達しない状態にある。教書はこの悪を分析し、世界のおかれている悲惨な状況を説明するために最も根本的な経済的要因を取り出してみせ、かつその克服の方策を考えている。これがこの教書の重要性である。

経済問題は確かに重要である。教書もいうように、経済は「人びとの生か死か」を決するのである。そのような根本的な観点から経済問題を判断しなければならない。倫理的にみて、経済は人を死に追いやるようなものではなく、生命を保ち育むものとなっているのか、そして、技術的には、実際に生命を保ち育てているのか、それが問題である。

教書は経済問題が人類にとって根本的問題であることを、信仰によって強調している。もちろん、この場合、信仰とは司教団自らが守り教えるキリスト教信仰を意味している。しかし、他の諸宗教の信仰からしても同じような強調がなされるであろう。司教団の基本的主張に従えば、経済の問題が人間の生死に関わるものである以上、その経済的現実との関係において、また経済的現実を通して、唯一の神が表されねばならない。聖書の伝統によれば、神は生命が失われることに反対し、貧困を生み出すことに反対しているからである。これは神の最大の告知でもある。あたら限りの生命と隣人愛とをもたらしこと、これこそ神の与えたまう救いの、唯一とまではないわいまでも、非常に基本的な要素なのである。更に、神は特に進

んで貧しい者、貧困に追いやられている者に対して、生命の守り手としてご自身をお現しになる。神は啓示により、ご自身が、特に貧しい者の側にお立ちになることを示しておられるのである。

このように経済問題を宗教的観点からみるというのは、重要な姿勢であり、特に司教団にとっては決定的に重要な姿勢であるといわねばならない。これによって、経済問題が人間にとって根本的問題であることを明らかにすることができるからである。宗教的な観点からみて初めて、経済において問題とされなければならないものが、やはり神の創造になるもの、人間の生命²⁾であることが分かり、また神のユートピア、愛の支配としての神の国³⁾、この世界の富にすべての人が正当にあずかるように分配すること、そのような問題が問われねばならないことが分かるのである。

2. 世界の現状

経済の問題に取り組むにあたり、教書はまず、この世界の生と死をめぐる状況を描き出す。経済システムの理論的、イデオロギー的分析といった問題はさておき、経済システムが生み出す結果についての分析を行っているわけである。ラテン・アメリカの司教団がメデジンやプエブラで行ったと同様に、この教書はより現実的事実からこの世界をみている。そこで表れてくる問題は、すなわち貧困である。教書はこう論じている。

「世界の人口の約半分のほぼ25億の人びとが、一人当りの年間所得4百ドル未満の国ぐにに住んでいます。これらの国ぐにの少なくとも8億の人びとが『人間としての品位のどんな合理的な定義であれ、それ以下』という絶対的貧困のうちに生活しています。世界的な豊作にもかかわらず、5億近くの人びとが恒常的に苦しんでいます。これらの国ぐにに生まれた100人の中の15人は5歳前に死亡し、生き残った幾百万の子どもたちも肉体的精神的に発育不全であります」(254番)。

このおびただしい残酷な現実、非人間的な、人間を人間らしくなくしてしまう現実、これは何を意味しているのであろうか。これはまさに世界の

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

経済秩序が破綻しているしるしである。世界経済は生命を生み育てるどころではない。むしろ、人びとを死に追いやっている。教書は、更に、この現実には愛の破綻のしるしでもあるという。なぜなら、教書自ら指摘するように、「富める者と貧しい者との間の衝撃的な不平等という醜態⁴⁾」が存在し、「絶望的に貧しい国ぐに一中略一とわが国との間にあるぞっとするほどの不平等⁵⁾」は驚くばかりだからである。教書によれば、現在のこの著しい貧困の状況は不正に基づくものである。「これらの悲惨な状態は、進行する歴史の不可逆的な結果でも一中略一なく、まさに人間の決定と人間の組織の結果なのであります⁶⁾」といわれている通りである。更にいえば、貧困は「特定の文化に内在する性質からくる結果⁷⁾」でもない。これは米国にみられる新保守主義者たちの議論を批判するために、教書が付け加えた主張である。

現在の世界にみられる貧困は、まことに著しく、不正なものである。しかも、更に悪いことには、この貧困の状態はますますひどいものとなりつつある。1968年、メデジンで開かれたラテン・アメリカ司教会議は、悲惨な状況は社会全体に及び、その叫びは天にまでも届いている⁸⁾、と述べたが、その11年後のプエブラ会議では、この叫びはますます大きなものとなり、貧困の状況は改善されるどころか、ますますひどいものとなっている、と主張されている。1987年の時点でも、ラテン・アメリカの経済学者の多くが、貧しい人びとの将来はいまより更に暗い、と予測している状況である。『万人に経済正義を』はこの貧困の悪化の状況を詳細にわたって分析しようとしているわけではない。ただ、第三世界諸国の累積債務問題に触れ、これが増大してゆく結果、第三世界の国々にはそれこそ一日一日と貧しくなっているといっているのである⁹⁾。富める国と貧しい国の格差はますます広がりつつあり、これが是正されなければならない。教書はそう主張するのである¹⁰⁾。

『万人に経済正義を』の基本的現状認識を理解するには、以上の紹介で

十分であろう。世界の経済秩序は技術的に破綻してしまった。世界経済はいまや、生命を育むどころか、大量で残酷な貧困を生み出し、しかもその貧困は増大しつつある。そこからは対立は生まれてきても、愛は生まれてこない。また、教書が全体として主張するように、世界経済秩序は倫理的にも破綻している。一体世界経済は、このあまりに多くの貧困のほんの何割かでも解決したのであろうか。

3. 教書の原則「貧しい人びとへの選択」

上述のような現状認識に立って、教書は一つの重要な原則を打ち出す。「貧しい人びとへの選択」がそれである。この原則は、世界の本当の姿をみるためにも、世界の経済秩序の是非を計り、世界経済が正しく機能するようにさせるためにも、重要な原則である。

「貧しい人びとへの選択」という表現は、一般に知られているように、教会的、司牧的、あるいは神学的用語に由来するものである。しかし、それだけではない。その理由については後に論じよう。いずれにせよ、この原則は経済問題をも含む人間生活の全領域に適用されねばならない。経済は、その言葉の定義からいっても、貧困を克服すべきものだからである。

『万人に経済正義を』は頻繁に、経済の領域における「貧しい人びとへの選択」について論及している。例えば、経済上の諸決定は、それが貧しい人びとのためになされることであるのか、貧しい人びとを目的としてなされることであるのか、あるいはまた、貧しい人びとに自らの力で生きる力を与えるものであるのか、そのような視点から判断されなければならない、と主張され¹¹⁾、また「生産の形態もまた、基本的必要の充実—中略—などにそれが及ぼす影響に照らして、はかられねばなりません¹²⁾」ともいわれている。更に、貧しい人びとを選択するというその「選択」自体の意味を米国の司教団はこう表現している。「万人に正義をもたらす義務ということは、国家の良心に鑑みて、貧しい人びとこそが、最も緊急な権利を持っていることを意味するのです¹³⁾」。では、貧しい人びとのための選択

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

の内容とは、いかなるものであろうか。生活上必要欠くべからざるものを貧しい人びとも十分持つことができるようにすること、これこそが最も優先しなければならないことである¹⁴⁾。

それ故、結論は明らかである。こういわれている。「個人としても、また国家としても、私たちは、根本的な『貧しい人びとへの選択』をするように呼びかけられています¹⁵⁾」。すなわち、貧しい人びとの視点から経済の働きを分析し、まず何よりも貧しい人びとのために経済活動を計画するようにすること、これが結論である。この姿勢がなかったが故に、世界経済は破綻してしまったのである。司教たちはまた、キリスト教の観点からみることも忘れない。「わが国と世界にみられる飢え、家もなく、安全も正義もない状況に直面するとき、だれもキリスト者であると自称することも、それで満足することもできないでしょう¹⁶⁾」。

4. 世界経済が貧困を生み出すメカニズム

教書『万人に経済正義を』は世界経済の仕組みそのものを分析しようとはしていない。むしろ、世界経済が貧困を生み出す重要なメカニズムを全体として取り上げようとしている。このメカニズムの分析は貧しい人びとへの選択という原則に導かれており、世界経済秩序が実際どのようにして貧困を生み出し、その状態を広げていっているのかを具体的に示しており、その意味で極めて重要なものといわねばならない。米国の司教たちはこの事態についての自国の責任を意識し、世界経済が最悪の事態に至っていると宣言し、この事態を変えるよう要求している。その意味では司教たちは模範的に責任を果たそうとしているといえよう。

教書は五つの点にわたって、世界経済が貧困を生み出すメカニズムを分析している。第一の点は、対外援助についてである。教書によれば、米国は他の先進工業国に比べ、この面では比較的おくれを取っているという。より厳密に言えば、第三世界諸国に対する米国の援助額は、回を重ねるごとに減少してきており、相互援助も常に軍事的面により多く注がれ、しか

も米国自体の安全保障という動機から行われるために、相手国が経済発展によって受けるはずの益を減らす結果となってきたのである¹⁷⁾。教書によれば、先進諸国は経済援助額の17倍もの予算を軍備に費やしている。米国にいたっては、この比率は、1985年時点で20対1にも達する。更に、この対外援助にしても、米国はその3分の2を軍事的面の援助にふりむけており、対外援助の対象国も米国自体にとって戦略的に重要性が高いと判断される国にしぼられている始末である。

第二の点は貿易の状況についてである。教書によれば、第三世界の輸出品の価格は不当におさえられており、労働者は搾取されている。そしてその搾取の結果、第三世界に進出した企業は不当な利益をあげている¹⁸⁾。更に付け加えれば、先進諸国におけるテクノロジーや遺伝子工学の進歩により、第三世界の農産物輸出货量は減少しつつあり、将来も更に減少するものと予測されている。

教書が第三点として取り上げている問題は国際金融のシステムである。第三世界の債務国は巨額の負債を抱えており、その国の経済に与える影響は深刻なものがある。債務は破局的な状況である。教書は次のように論じている。「発展途上国の対外債務の総計は、今日1兆ドルに近づいていて、これらの国々へのGNP総計の3分の1余りに、匹敵するものであります。この総額は、1979年—1984年の間に倍増し、なお上昇し続けています。平均して、輸出収入のまず20%は債務の金利に食われて、元金はほとんど減っていません。若干の国々には債務の金利の支払いが、ほぼ輸出収入の金額となっており、従ってそれらの国々への開発計画のために使用できる財源は乏しい状態におかれているのです¹⁹⁾」。

第四点は海外投資についてである。教書はこの問題については、極めて慎重な扱いを示している。海外投資は途上国の発展のためには不可欠である。しかし、他方で途上国の先進工業国に対する依存体制を定着化し、第三世界の貧しい人びとをそこなう結果になるという。

最後の第五点は、世界の栄養状態の問題である。上記四つの問題がすべてこの問題に関係しており、この問題に集約されているといえよう。現在の世界にみられる飢餓の状態は、貧困にあえぐ人びとの苦しみを示すものであり、また同時に、世界経済秩序の破綻を示している。世界の貧困の状況は破廉恥きわまりない。世界は豊かな収穫をあげているのに、なお幾億もの民衆が飢えに直面しているのである²⁰⁾。

5. 教書の限界

教書『万人に経済正義を』が記述する世界の貧困の状況や、世界経済秩序のありようは大変正確なものであり、同時に心胆寒からしめるものである。人類の大半を占める貧しい人びとにとって、世界経済秩序は生命を育み愛を生み出すようなものではない。この人びとにとってははかるうじて生き残るのが精いっぱいであり、場合によっては死が待っている。『万人に経済正義を』はこの状況を十分に告げ、人びとの良心に訴え、変革を要求している。

しかし、教書は極めて重要な点で沈黙してしまっている。確かに教書は、世界経済システムの構造について語り、そのメカニズムや生み出される結果を細部に至るまで十分に分析している。ところが、司教たち自ら繰り返し主張するように、現状を解決する技術的問題については探求しようとしていない。貧しい人びとに経済的惨状をもたらしている基盤は何なのか、いつまでも多くの貧困を生み出し続ける原因は何なのか、そして一体何が原因で、実際に貧困が生まれ、増加しているのか。そのような、おおもとの原因の解消を方法論的に追求するという点では、教書は黙して語らないのである。上述した貧困の状態が生み出される起源、あるいは原理、それは基本的にいえば資本主義の経済システムそのものなのである。

この問題に本気で取り組んでこそ、教書はその最終目的を達成することができるはずである。なぜ司教団はこれをなさなかったのか。なぜ経済システムが持つ機能を改革するよう訴えるだけで事足りりとしてしまったの

か。いろいろな理由が考えられよう。しかし、何といたっても最大の理由は、司教団が資本主義という体制にのり、自国社会の問題と正面から取り組むことを避け、また資本主義というだけでなく、民主的とかキリスト教国とか呼ばれている第一世界の国々への問題を見つめようとしなかったことである。これは教書の持つ重大な限界である。教書は問題の根源を分析しようとせず、第一世界が最高の真理として誇るもの、政治の分野における民主主義と、宗教・文化の領域におけるキリスト教的なるものを真剣に問いつめようとはしなかったからである。

確かに、教書のこの限界は重大なものである。しかし、そうはいても、この教書がわれわれにとって重要なものであることには変わりはない。教書はこの世界が非人間的な状況にあることを告げ、経済がこの状況について重大な責任を負っていると訴え、その状況を「貧しい人びとへの選択」という原則により根本的に変革するよう求めているのである。実際、この教書は米国政府や、第一世界の宗教指導者を含む各方面からの反対を受けた。反対を受けるということは、何か重要なことをいっているのである。この世界の実情が大多数の貧しい人びとに敵対しており、神のみ心に反しているからこそ、重要な発言が反対を受けるのである。教書はいい得ることをすべていっているとはいえない。それでも、確かにいうべきことはいっているのである。

Ⅱ 教書が打ち出す原則についての神学的分析

次に教書の掲げる重要な二つの原則の検討に移ろう。すなわち、第一に貧困と人間の生死の関係、次に貧しい人びとへの選択という原則である。われわれはこの検討を神学の視点から行おうとしている。それも特に、ラテン・アメリカで行われている、いわゆる「解放の神学」の視点からである。もちろん、世界の現状についても、全体として頭に入れておかねばな

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

るまい。解放の神学という視点と、世界の現状という視点からみるために、この検討はおのずと限定されたものとなり、問題解決のための直接的、具体的な助けとはならないかもしれない。しかし、解決の方法を探る一条の光となり、力となることを願っている。あまり手を広げた分析をしないように、五つの短い論題に的を絞ることとしよう。最初の三つは、貧困と貧困を生み出す世界について。残りの二つは、貧しい人びとへの選択についてである。

論題 1

「第三世界の貧困は深刻であり、生き続けることすら難しい。人びとは次第次第に死に追いやられている。この深刻な貧困はわれわれの世界を死の世界としている」。

世界経済秩序は、厳密に経済的な意味で倒錯している。現代の経済学者の多くも繰り返そう主張している。貧しい国々には第一世界との貿易によって、最終的には損失をこうむっている。一方で第三世界の人びとが飢えて苦しんでいるというのに、他方では多くの費用をかけて生産された食糧が備蓄されている。貧しい国々の方が、累積債務により、資本を減らし、豊かな国々に流出しなければならない状態に追いこまれている。こういった現象はいずれも、世界経済が倒錯している証しである。しかし、最大の倒錯は、何といたっても世界経済秩序が貧困を生み出しているということ自体である。

世界経済の倒錯がどれほどひどいものであるかは、第三世界がおかれた貧困の状況をみれば分かる。第三世界の貧困は、人びとが生きることすら困難にしており、人びとはゆっくりと、しかし、確実に死に追いやられている。生きることが保障されているような国々には、考えられないほどである。もちろん、比較的豊かな土地でも、やはり程度の差はあれ貧困が

あり、深刻な悪を生み出している。しかし、それでも、第三世界の貧困は比較にならない。長期にわたり蔓延する栄養失調状態、不健康、住まいの欠如、こういったものはこのうえない悪を生み出しているのである。すなわち、生きることができないということである。栄養や健康や住居、こういった最低限必要なものは、ギリシア語で「オイコス」と呼ばれていた。「家」の基礎という意味である。この「オイコス」なる語から「エコノミイ」なる語も派生したのである。第三世界では、貧困により、まさにこの基礎がおびやかされている。貧困がそこまで進んでいるのであるから、最低限度必要なものもなかなか手に入らない。全く手に入らない場合すらある。そのような状況では生きることすら絶望的なのである。

最低限のものも持てないというこの状態から、貧しい人びとの人間性そのものを否定する方向すら出てくる。第三世界の状況では、所有することよりも生きることを優先する、などといった人生観は生まれ得ない。所有することと生きることとを分離し、後者を重視するなどというのは、最低限の所有が保障されて初めていい得ることである。第三世界では、所有しないということは、そのまま人間的に生きることの否定に直結するのである。所有しないということは知識がないということ、無能であるということであって、そのことによって貧しい人びとは最低限の人間の尊厳も奪われ、自動的に取るに足らないものとされ、社会の周辺に追いやられた存在となってしまう。こうして、第三世界の社会構造においては、最低限の生活がおびやかされるということはそのまま、人間の尊厳がおびやかされるということになる。理論的にいえば、貧しい人びとも「人間性」なるものに訴え、生命と尊厳とを求めることができるといえよう。しかし、実際には、その訴えも取り上げるに足らないものとされ、貧しい人びとの役には立たない。第一世界の国々には自国民が人間的に生きることのほうをはるかに重要なものと考えてしまう。しかし、いちばん大切なことはすべての人の最低限の生命と尊厳とを保障することなのであって、これは二の次に

してよいような問題ではないのである。

貧困とは人間の生命と尊厳の否定にほかならない。そして、とりわけ第三世界においてはその貧困が大規模で残酷な現実となっており、しかも更に悪いことには、その状況はますます悪化している。ラテン・アメリカでは、今世紀末までに、人口の3分の1、およそ1億7千万の人びとが重度の貧困に陥り、健康な生活に必要なものや、住居、教育等を受けることができなくなると予測されている。更に、もう3分の1の人びと、同じく約1億7千万の人びとの状況は極度に深刻となる。この人びとは必要な栄養すら得ることができず、生命の維持すら危険な状況になるという。

上述の予測が当たっているとすれば、第三世界は生命の維持すらおぼつかない、死の世界と化してしまうことになる。キリスト教的に言えば、第三世界の状況は、生命の神が否定された状況となり、神のみ心に反する状況となる。唯一なる神は造られたすべてのものが生きることを望んでおられるからである。生命のしるしも生命の秘跡もみられない世界。そして、その点から言えば、被造物が神を全く表さない世界。第三世界はまさにそのような世界になってしまう。

「貧困とは生命をまっとうせずに死ぬことだ」。ラテン・アメリカではそういわれる。この早過ぎる死は、それ自体、聖書が示す創造の理念の否定であり、神の栄光の否定である。既に、紀元2世紀に、聖イレネウスはこの神の栄光を「人の生命」と表現しており、またロメロ大司教もこれを「貧しい人の生命」といい表している。貧しい人びとが次第に死に追い込まれてゆくこの世界を前にすれば、その原因を分析するまでもなく、一つの結論が引き出される。ロメロ大司教の言葉を借りれば、こうである。「最低限必要なものを守らねばならない。最低限のものというのが、それは神の最大の賜物、すなわち生命である」。

「今日の第三世界の貧困は本質的に不正に基づくものである。これは他人から押しつけられた貧困であって、貧しい人びとは犠牲者にされている。この不正な世界は、それ自体、暴力の世界であり、死の世界である。そして、それ故、罪の世界である」。

今日の第三世界にみられる貧困は、技術的に解決できないようなものではない。世界は貧困を解決しようとしていないのである。解決しようとしていないどころか、貧困を生み出し、その上更にひどいものにしようとしている。それ故、この世界は不正な世界だというのである。既に述べた貧困の状況は、自然に生まれてきたものではない。歴史的に作られてきたものである。貧しい人びとは人間の行為によって貧しくさせられているのであり、抑圧されているのである。

人びとを貧しくし、抑圧する行為自体が愛を否定している。愛はさまざまな方法で否定され、不正による残酷の全体像が姿を現す。貧しい人びとはこの不正な世界の犠牲者なのである。不公平の訴えは世界に満ち、愛の破綻を示している。生活に必要な物資についても、基礎的資源の利用についても、テクノロジーについても、果ては公共の資源である大気や海洋の利用についてまでも、著しい不公平が存在する。プエブラ会議も指摘したところであるが、「貧しい人びとはますます貧しくなり、その犠牲の上で、富める人びとはますます富んでいく²¹⁾」。そのような世界では、貧しい人びとは殺人者の手にかかった犠牲者に等しい。

殺人者というのは確かに強すぎる言葉である。これは経済構造自体についていったのであって、個々の人間を指していったのではない。そう理解していただきたい。しかし同時に不正な世界の現実を理解しようとするならば、この言葉を避けるわけにはゆかない。聖書も同様の表現を使っている。例えば、イザヤは、不正な者の手はその生み出す物の故に、血まみれであるといい²²⁾、ヨハネも人を憎む者は人殺しである²³⁾と論じている。不

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

正はまた暴力である。不正な世界自体は暴力の世界であり、その世界に生きる貧しい人びとは、いろいろな形の深刻な暴力を受けている。これは、ラテン・アメリカで展開された基本的な認識である。そして、この認識、見方を支持することは大変重要である。第一世界の国々にはこの暴力について全く別の見方、正反対の見方がなされるのが常だからである。もう一度確認しよう。不正は暴力なのであり、それも極めて重大な暴力なのである。

a) 20年前、メデジンに集まったラテン・アメリカの司教たちは、こう宣言した。貧困を生み出す構造的な不正がある。この不正はそれ自体「制度化された暴力²⁴⁾」であると。構造的な不正とは権力の不正な使用をいう。この正義に反した構造は貧しい人びとに暴力をふるって大きな痛みを与え、不正に生命を脅かし、基本的権利すら踏みしじる。構造的な不正は最大の不正である。倫理的にみて最も非難すべきものであるばかりではなく、他のさまざまな暴力を引き起こす最大の原因ともなるからである。

b) この暴力が耐えがたいものとなり、暴力を受ける側の主観的な条件が整うと、そこに生き残りをめざす運動が現れる。運動といっても、初期の段階では決して力の行使をとまなうものではない。暴力に対する生き残りの運動は避けることのできないものである。『メデジン文書』もこう論じている。「少しでも人権に目覚めている人にとってはまったく受け入れがたいような状況を、永年にわたって耐え忍んできた民衆の忍耐は、誰にももてあそばれてはならない²⁵⁾」。研究者たちの意見も同じである。実際の力を行使する紛争には、耐えがたい不正という深い根があるのである。

民衆というものは、その気質からいっても、暴力的であるとか好戦的であるとかいうことはない。中米の民衆とて同じである。彼らは忍耐と希望とを持って生きており、とてつもない貧困を不正に押しつけられて、やむにやまれず、これに抵抗しようとしてきたのである。この正当な抵抗に対し、不正な組織の側も、対抗措置をとった。貧しい人びとの抑圧、制度化

された本格的なテロ行為、国家によるテロである。しかも、そのために軍隊を動員し、国家の治安機構を利用し、軍隊のような者たちも使うといったありさまである。貧困に陥れる不正な暴力に、更に貧しい人びとの正当な抵抗すら排除しようとする暴力的な抑圧や、人びとを恐れさせ、抵抗の気力もそごうとするテロという抑圧が加えられた。貧しい人びとの側からすれば、貧困による死が迫り来るうえに、暴力的抑圧による死が加えられてしまった格好である。エルサルバドルを例に取れば、度重なる残忍な虐殺や信じがたい拷問により、およそ6万人もの民衆が生命を奪われてしまったのである。

c) 経済的、社会的な対立が暴力を行使するものとなると、そこに戦争が勃発する。戦争はさまざまな要素が複雑に絡み合って起こる。ナショナリズムも戦争を起こす動機となれば、国家や国家群の安全保障という動機もある。民族のアイデンティティとか気質や文化のあり方すら戦争を引き起こす要素となる。それ故、個々の戦争を倫理的、政治的に判断するというのもなかなか複雑な問題である。いま、一つの重要な例をあげると、中米ではとにかく戦争を停止しなければならないという意見が広く受け入れられている。ところが戦争について分析するにつれ、その複雑さが知られるようになり、戦争と貧困との関係を注意深く考えてみることの重要性が分かってきた。そこで、両者の関係が次のような手順で明らかにされてきた。①まず、第二次世界大戦後に第三世界で起こった武力紛争、それも特に貧しい第三世界の国々に的を絞って、そこで起こった100ほどの武力紛争の記録を調べる。②武力紛争の根本的な原因が、特に中米の場合についていえば、構造的な不正にあり、それに加えて、社会的抑圧にあることが分かる。③さらに、上記の戦争や紛争全体の犠牲者数は驚くべき数にのぼる。先の世界大戦の犠牲者に比肩し得るものすらある。そして、その犠牲者の圧倒的多数は貧しい人びとなのである。これが第三に分かることである。④最後に、絶え間なく起こる紛争は、貧しい国ぐにをますます貧し

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

くしていることがわかる。エルサルバドルやニカラグアをみれば分かる通りである。軍事産業を担う国ぐにが富んでゆくなかで、これらの国ぐにの根本的貧困状態は、ますます深刻なものとなってゆくのである。

貧困の悲しむべき悪循環は絶えることがない。貧しい人びとは不正により死に追い込まれ、暴力的抑圧の犠牲となり、更に加えて戦争の犠牲にさせられている。苦しみに苦しみが重なる。貧しい人びとは迫り来る死の犠牲者であり、そのうえ暴力的な死の犠牲者である。このことは、はっきりと主張しておかねばならない。この主張は事実である。統計もその事態を示している。この主張はまた正しい。なぜなら、確かに貧しい人びとは、その貧困の故に、迫り来る死にさらされており、その事態を変えようと自らを組織し正当な闘いを闘おうとすれば暴力的な死の犠牲者とされ、更に戦争が起これば無差別な殺りくの犠牲とされているからである。サンサルバドルの大司教、リベラ師も、こう論じている。「わが国の戦いにおいては、外国が武器を提供し、われわれは死者を提供している」と。

第三世界の貧しい人びとは死と隣り合わせにいる。「平和のときにも、戦争のときにも」、ゆっくりと迫り来る死が、また暴力的な死が、彼らのすぐそばにある。決して誇張ではない。この世界は貧困を生み出し、貧困はいくつもの形の死を生み出している。この世界は単に死の世界というにとどまらず、死を与える世界となっている。キリスト教的な言葉に置き換えれば、この世界は罪の世界である。罪の意味は明らかである。われわれの信仰によれば、罪は死をもたらすものなのである。神の一人子が死をお受けになったのも、この罪の故であり、神の子たちが死を免れないのも、この罪の故である。

論題 3

「第三世界の貧困はこの世界の真相を明らかにした。しかし、世界はそれをありのままに認めようとはしない。貧しい人びとは抑圧され、貧しい

人びとが表した真実も押しつぶされている。この不正な世界はまた嘘の世界でもある」。

第三世界の現状については、『万人に経済正義を』も教え、数多くの国際的機関による統計も、よくこれを描き出しており、従っておおむね一般に知られているところである。貧困ということ自体については更によく知られている。例えば人間が生活する上で必要な最低カロリー、つまり一人の人間がどれだけ食べねばならないかは割り出されており、その点から貧困が定義されている。この種の定義は宗教的定義などに比べると、貧困の第一義的な意味を明らかにしており、有利な定義であるといえる。また、人類の大部分が貧困状態に陥るようになるということも、同じように数量的方法で明らかにされている。しかし、このように数量的に定義されただけでは、貧困がより大きな問題であるということとは分らない。また、この貧困という問題が、第三世界の益のためにも、世界全体の良好な存続のためにも、ぜひとも早急に解決しなければならない問題であるということも、数量的定義自体が示すところではない。

貧困は「より大きな問題」であるといった。それは、この問題が世界の諸問題の一体性を示す、より大きな力を持った堅固で永続的な事実であるということ、人類全体に、より大きな力を持ち、その解決は人類全体に、より大きな救いを提供し得る堅固で永続的な事実であるということである。貧困がそれほど大きな問題であるというのは、少々矛盾していると思われるかもしれない。この問題については、以下にもう一度論じることしよう。ラテン・アメリカの司教たちは、「大きな嘆きの声」、「破壊的で屈辱的な災厄」という言葉で貧困をいい表しているが、これに加えて、貧困からの解放を願う望みは、聖霊のしるしであるともいうことができよう。

貧困が、より大きな問題であるということとは知られているとしても、どれほど大きな問題であるか、ありのままに認められているとはいいい難い。

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

そこに大きな矛盾がある。貧困について得られた恐ろしい統計的データや、それが将来人類全体に及ぼすと思われる脅威については、何度も繰り返し語り続けられている。ところが、このデータやその示す脅威を耳にししながら、人類はなかなか次の段階に進もうとしない。別の問題に気を取られているからである。例えば、国家や国家群の安全保障とか、核戦争の防止、軍縮、更に生態系破壊の予防や、協定によるテロ行為の排除、さまざまな制度の民主化、エイズの根絶など、人類は余りに多くの問題に心を奪われているのである。

こういった問題も確かに重要であり、解決しなければならないものである。特に、その事柄自体が重要であるというにとどまらず、いくつかの問題は貧困問題とも相互に関係を有するものであるから、貧困の克服という観点からみても、重要な問題であるといわねばならない。しかし、問題の重要性を他にすり替えてはならない。そのようなことをすれば貧困問題の重要性を相対化してしまうことになり、また倫理的決断や政治的知識を必要とする決定を行い、貧困の問題に立ち向かおうとする姿勢をなくしてしまうことになる。実際、第一世界の国々には上部構造的な問題、すなわち政治的、イデオロギー的問題の解決を優先し、個人の利益とか、国家及び国家群の利益を重視しており、経済的、社会的な下部構造の問題や、世界全体の利益の問題の解決は後回しにしているといわざるを得ない。彼らは、一つの政治的イデオロギーを支持することや一国の利益を計ることが、ひいては世界全体の益につながるのだという。しかしこの議論がごまかしに過ぎないことは実際の歴史をみれば分かる。要するに、第一世界は貧困という問題は知っていても、この問題を嘆きとしてとらえ、早急に解決すべきものとは考えていないのである。

富める国の人びとが、貧困の問題をこの世界のより大きな問題と考えるには、いろいろな理由で困難が伴う。貧困を克服するには深刻な不平等を解消するほかはないのであるが、そのためには、現在豊かな暮らしを享受

している人びとの規準からすればはるかに簡素な生活を送るようにすることによって平等を計らなければならないからである。このようなことはだれでもすぐに、まちがいなく分かることである。おそらく、この点で、先進国の人びとは一様に、貧困の問題を解決する実際的可能性はないものとあきらめてしまうのである。技術的には解決可能であるにもかかわらず、貧困の問題が解決の方向に向かわないのはそのためである。真実を知識として知ることと、積極的に考えることとは異なる。ここには二つの別の型の理性の働きがあるのである。

第一世界には、第三世界にみられるような重大な貧困状態は存在しない。第三世界の貧困と同じ貧困を直接体験することもなければ、それに相当するイメージも、感覚も、適当な言葉もない。統計上の数値で貧困を知ることがあっても、この数値は経験的裏づけがなく語りかける力のない資料に過ぎない。基本的物資が保障されている生活をしながら、生存に必要な、なくてはならぬものすらおぼつかない貧困状態を考えてみようというのは、このうえなく困難なことであり、事実上不可能である。第一世界の生活の場では、貧困という言葉すらも、自分たちの知り得るものとの類比でしか考えられない意味のあいまいな言葉となってしまう。確かに、貧困と類似した現象は第一世界でも起こらないわけではない。著しい低賃金とか、失業、企業の操業停止、社会保障に頼らざるを得ない生活等はその例といえる。しかし、これらは貧困に類似しているに過ぎない。フロイトの主張に対して、「リビドーが人間の行動の基本的説明原理だなどというのは、貴方のところにくる患者さんが食べ物に満ち足りているからだ」と反論した人がいる。私の記憶では、エルンスト・ブロッホである。安心して暮らせる生活のなかで、最低限のニーズに事欠くような生活は理解できない。第一世界にあっては、貧困についての適切な知識を得ることすらも困難なのである。

更に、貧困についての適切な知識を得ようと望むことすらも、また難し

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

い。なぜなら、貧困があるということ自体が、自動的にこの世界に対する倫理的判断につながるからである。貧しい人びとは偶然に出現したわけではない。われわれが自らの手で作り出したもの、われわれのシステム、われわれの制度の産物なのである。貧しい人びとは、この世界の転倒した姿を映し出している。転倒してはいるが、真実の姿である。豊かさや、進歩、洗練された生活、このようなものはほんの少数の人びとが享受しているに過ぎない。大多数の人びとは貧しく、人間らしい尊厳を奪われた生活を強いられており、この人びとの血と死が豊かさの仮面をはいでしまった。世界は貧困を生み出すことにより、自らの真の姿を知るようになった。ところが、世界の真実の姿をみて、人びとは驚き、目をそむけなくなった。そこで第三世界の状況がそれほどひどいものにみえないように遠回しな表現を捜し出そうとした。彼らは貧しい国々に発展途上国と呼ぶことにしたのである。これから発展する途上にあるとっているのであろうか。あるいは、著しく開発が遅れているとっているのであろうか。発展とはいうがその国の国民全員のためのものなのであろうか、少数の者のために過ぎないものなのではなからうか。進歩は本当に達成されたのか、それとも人びとはなお明らかに人間的でない状況におかれているのか。発展途上とはいったい、いかなる意味なのであろうか。政治面では、特に今日のラテン・アメリカの国々について、民主主義の初期的段階という言い方がなされる。これもまた、民主的制度が本当に進歩しているのかいないのか、また特に、経済、社会面で民主的前進がみられるのかみられないのか、判然としない言葉である。

世界は実際、貧困の状況を知っている。ところが、これをありのままに認めようとはしない。人間の罪深さの故である。キリスト教の信仰によれば、罪は真実を隠そうとする。真実ならざるものを広め、真実に反する事を示そうとする。聖書は、「あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考える時が来る²⁰⁾」とっている。これが罪の姿である。同じこ

とは、現代でも起り続けている。国民を抑圧しながら、民主化を進めているのだといい、人権を侵害しておきながら、国民を守っているのだという。本当の姿を曲げ、見誤らせる可能性は、確かにある。預言者イザヤもこの可能性をみて叫んでいった。「災いだ、悪を善と言ひ、善を悪と言う者は。彼らは闇を光とし、光を闇とし、苦いものを甘いとし、甘いものを苦いとする²⁷⁾」と。われわれの現実の世界にも、同じようなことを数多くみることができる。マルクーゼの言葉を借りれば、非合理的なものが合理的にみえるのである。

この真実の見誤りの可能性は人間の原罪の傾向によるものである。パウロは周到な構想の下に記した文章の中で、すべての人に向け、人間は「真理を囚われの身にしている」、「真理を覆い隠している」と論じているが²⁸⁾、これは真理を捉えることが理論的、実践的に難しいということをいおうとただけのものではない。真理を曲げて、自分に都合のよいものにしようとする人間の傾向をいっているのである。パウロによれば、真理を曲げようとするこの態度は不正によって現実のものとなる。このように考えれば、パウロのこの言葉を巡る解釈はより正確なものとなるであろう。われわれがいま考察しているテーマにあてはめれば、まず現実不正が行われ（すなわち、死をもたらす貧困が人びとにもたらされ）、更に現実の認識について不正が行われる（すなわち、貧困の真の姿を見誤り、曲解する）というわけである。人間はその罪の故に、「善」に対しても「真理」に対してもそむいている。それ故、まず、隣人を抑圧し、次にその真実を覆い隠そうとするのである。

パウロは極めて普遍的な表現をとっているが、そのいうところは今日の世界にも起こっていることである。貧困の問題は明らかにそうである。貧困を生み出す構造的な不正もそうである。ところが、世界はそのどちらについても、真実を認めようとはせず、逆に覆い隠そうとしている。

パウロは更に分析を続け、真理を覆い隠そうという最初の行為の結果が

どのようになるかという問題にもふれる。まず、歴史的にみても神学的観点からみても、真実を覆い隠されたものは本当の神を表さない。むしろ反対に、偶像を生み出し、神ならぬものを神とし、その結果、真の神性は重ねて覆い隠されてしまう。そこからは、また、自分を義とする姿勢が生まれ、「われ関せず」といった態度が生まれ、偽りの救いまでが編み出されてしまう。ここに論じている問題でいえば、貧困を生み出す経済メカニズムそのものが、偶像とされてしまうということになる。つまり、経済メカニズムの限界やその欠陥は、理論的に認められており、その犠牲者が生み出されているということも認められていながら、なお手つかずのまま放っておかれてしまうということになる。こういった態度は、「仕事は仕事」というあやまった陳腐な言葉にもみることができし、あるいは自己正当化とか、「われ関せず」といった、より欺瞞的な態度にもみることができし。欧米では大体、どちらの態度もみることができるようである。

真理が覆い隠されることにより起こる第二の結果は、「人間の心が暗くなる」ことである。つまり、事柄の本質を見抜くための光を失ってしまうということである。心以外に本質を照らし出す光はない。他の光はどれも影を作るばかりである。心の光を失った人間は、真実を知ろうとして知性を働かせ、その知性の要請に従おうとはせず、真実を前にして自分を守るためにのみ知性を用い、悲惨な状況は無視してしまう。彼らは、世界が貧困を生み出し何らの対策もなく捨ておかれているのをみても、ただ身を守ることだけを考えているのみである。

第三の結果は、人間がその本質の統一性を失い、倒錯に身を落としてしまうということである。実際のところ、貧困を生み出し、しかもそれを認めようとしないこの世界は、あやまった生き方をしている。そのような生き方は深い意味を欠いている。それ故、いろいろな方法で救いを求めようとはするが、それでもみつけないのである。

以上のパウロの教えは、この世界の現状をまとめて把握するためにも有

益である。この世界は死の世界である。多くの人びとが貧困にあえいでいるからである。この世界は死をもたらす世界である。貧困は歴史的に引き起こされたものであるからである。この世界は虚偽の世界である。第一に貧困を認めようとせず、次にその事実を覆い隠そうとするからである。パウロの時代と同様、今日の世界もまた、自らの追い込まれた状況を打開する力を持つ、新しい現実、新しい光の現れを必要としている。これは実に、緊急の要請である。この要請に応えるものこそ、貧しい人びとへの選択なのである。

論題 4

「この不正な貧困の世界においては、貧しい人びとのための選択、貧困に反対する選択が必要である。この選択は、貧しい人びとの側に立つもので、闘争的で、しかも普遍的広がりを持つものである」。

『万人に経済正義を』も訴えるように、この貧困の世界にあっては、貧しい人びとへの選択こそ必要である。貧しい人びとへの選択とは、世界の大部分を占める貧しい人びとのためを考え、貧困に反対するという視点から行う選択である。この選択が世界の経済的、政治的構造のなかで有効に機能するようにするためには、経済、政治両面にわたる分析を行う必要がある。しかし、いまこの論題4については、キリスト教信仰の観点からみた、この選択の重要性を論じることとしよう。

a) 「選択」という言葉を使い、例えば「援助」というような伝統的な言葉を用いなかっただけで、われわれは何か決定的に重要な違いを意識しているのだといわねばなるまい。貧しい人びとへの選択とは、援助といったようなすべての行為に先立つものであり、根本的には議論の対象となるものではない。まさに「選択」なのである。しかし、それ故に、貧しい人びとへの選択は純粹に意志に関わるもので、理性的なものではないということ

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

にはならない。いわんとするところは逆である。実際の世界にあっては、この選択は合理的なものとして議論の対象となり得る。この議論はアイロニーと、そして悲劇性を持ったものとなる。なぜなら、次のような言葉を十分に考え抜かなければならないからである。「この圧倒的多数が貧しい世界の中で、真に責任ある生き方をしようとするならば、一体だれを選択すべきであるのか」。このような問いを考え抜かねばならないというのは、われわれの世界が非合理的な世界であるからである。しかし、それでも、「貧しい人びとを選択する」ことはやはり「選択」であって、根本的なところでは議論によるものではない。根本的なところでは、この世界の悲劇を前にした生きた根本的な姿勢なのであって、これは議論に先立つものなのである。いい換えれば、もし人が何らかの理由により、世界の現状に目をつぶっていようと思うならば、そのような姿勢では貧しい人びとのためにどのような議論をしようとする無駄なのである。おそらくは、自分の利益を考えて、貧しい人びとに関わる行為を変えるべきだという議論も成り立とう。それも確かに貧困の現状を解決しようという意図からなされるものではある。しかし、そのような議論は、決して、貧しい人びとへの選択などではない。

神学では、この貧しい人びとへの選択が根本的なものであることを主張するために、神も同じようになされ、イエスも同じように貧しい人びとを選択されたというような議論がなされる。この主張は確かに、信仰による動機づけにはなる。しかし、この選択自体の合理性、あるいは非合理性を明らかにするというわけにはいかない。なぜなら、神が貧しい人びとを選択されたといっても、それはただ神が「そうされた」というだけのことであって、それ以上の答えにはならないからである。プエブラ会議は神がそうされたということを強調している。この会議の司教たちは神が「そのようにされた」ということを認めようとしない人びとに対し繰り返し、神はそうされたのだと言明してはばからない。しかし、明らかに、神がそうさ

れたということ自体が、貧しい人びとへの選択を基礎づけるわけではない。会議の主張は簡潔である。人びとが貧しいというその事実だけで、その人びとの個人的状況や道徳的状況に関わりなく、神はその人びとを守り、愛されるのである²⁹⁾。

貧しい人びとへの選択が議論し得るものであるのは、それが命じられたものであるという理由によるわけでもない。確かに、この選択は信仰によるものであり、今日では、教会の教えるところでもある。しかし、それを根拠として、この選択に欠くべからざる光が与えられているというわけでもない。善きサマリア人のたとえ話で、イエスは隣人愛の教えを示され、道ばたに倒れ傷ついた貧しい旅人を助けるサマリア人の姿をお示しになった。サマリア人はその行いによって愛の教えを実践した。しかし、イエスは教えを実践するためにそのようにせよといわれたのではない。隣人を助けることは、教え以前のものである。なぜなら、貧しい人びとと出会うというそのこと自体によって、サマリア人は哀れみの心へとつき動かされたからである。

以上の考察から、貧しい人びとへの選択とは、外面的には議論することのできない何か究極的なものであることが分かる。それは、すなわち、世界をみる見方、そして世界に働きかける姿勢なのである。キリスト者は、神ご自身も世界をみて、働きかけておられると信じている。それ故、神がなされるのと同じように、世界をみて、働きかけることは、キリスト者にとっては直接的に要請されていることとなる。キリスト者にとっては、貧しい人びとを選択するということが、この要請を照らし出す。他の何ものでもない選択自体である。ベルジャーエフは有名な言葉を残している。「もし私が飢えているならば、それは私の体にとって悪いことである。しかし、もし私以外のだれかが飢えているならば、これは道徳的な悪である」。これ以上に真実を捉えた言葉があるだろうか。このように物事をみること、このように人びとの飢餓を決定的なものとしてみること、これが

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

選択である。確かに今日に至るまで、どのようなときにも、聖書のなかから貧しい人びとへの選択が読み取られたことはなかった。いまでは福音の教えの本質的要素と考えられている解放という問題すらも、過去においては聖書から読み取られていたわけではなかった。このことは、解放の神学に関する二つのバチカン文書も指摘しているところである。また、過去の歴史において、貧しい人びとへの選択が実際になされたということもない。このことから、この選択が聖書解釈によって起こったものではないことが分かるはずである。歴史上の出来事をみれば、貧しい人びとへの選択がどれほど究極的なものであるかが分かり、また更に、この選択が論理的にみても、あらゆる宗教的哲学的現状認識に先立つものである力が分かる。宗教的、哲学的現状認識は、ただこの選択を強めたり、弱くしたりする力を持っているのみである。

b) 貧しい人びとへの選択とは、世界の現状をみる見方、またその現状に対応した態度であって、本質的に貧しい人びととの関係に立つものである。この選択は、何よりも貧しい人びとの視点から世界の現状をみて、何よりも貧しい人びとのためにその現状に対応しようとする。すなわち、この選択はまず第一に、現状を知ることと、貧しい人びとを愛することによるのである。その結果、この選択はみることにおいても行動することにおいても、貧しい人びとの側に偏ったものとなる。この偏りは貧しい人びとへの選択の一つの原理ともいえるものである。

偏りという原理はそれ自体で明らかなものではない。また、この原理に対して、普遍性という反対の原理も引き出される。われわれの生活する世界の一体性を知るとか、その一体性にできるだけ正しく対応するとか、そのような問題を本当に考えるならば、どうして普遍的な見方を避けることができようか。実際、さまざまな宗教やイデオロギーは、常にそのような普遍的な見方をとっている。すべての人間は神の子であるとか、人間は皆有限なもので、それ故全体の計画に従わねばならないとか、あるいはすべ

ての人は世界の市民であるとかいった考え方は、皆そのような普遍的な見方をとっているといえよう。この普遍性の主張は、普遍的な人間性なるものがあるという前提に立っており、その前提からしてはじめて、人類の一体性を知り、それに基づいて行動し、またさまざまな事柄を知り、判断することができるというわけである。

しかし、このような普遍性に焦点を合わせる見方は真に普遍的ではない。悪い意味で観念的である。なぜ、真に普遍的でないかといえば、普遍性を唱える人びと自身が、貧しい人びとの視点からはみないのであるから、ある意味で、屈折した光でものをみているといえるからである。普遍性という観点から、よく、現代人は、とか、人権とは、とか、人生の意義は、ということがいわれる。しかし、このような言葉で描かれているのは、実際に、第一世界に生きるほんのひとにぎりの人びとに過ぎない。見せかけの普遍性も、実は偏っている。つまり、貧困を造り出している人びとの側に偏っているのである。

普遍性に焦点を合わせた見方は悪い意味で観念的である。確かに普遍的人間性というものは存在するが、それは具体的な形で、緊張関係のなかで、実現されるものなのである。そしてその人間性が実現される仕方は、望むと望まざるとに関わらず、千差万別、さまざまなのである。理想的に言えば、すべての道の行き着く点は、一つであるべきではあるが、少なくとも現在の人間性実現のあり方はさまざまである。例えば、おのおのの土地の物質的、社会的な具体状況によっても人間性実現のあり方は異なってくるし、どのような緊張関係にあるかによっても異なってくる。貧困を生み出す側と、貧困に追いやられている側とでは、大違いである。人びとのおかれた状況の違いは、常にだんだんと広がってきたというばかりではない。歴史的に対立してきたものでもある。そのように、人間のおかれた状況の違いは大変に大きなもので、人間の生と死、希望、人間や共同体の意味、人生観といった根本の問題にまでも影響を及ぼすものなのである。

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

われわれの選択の持つ偏りの原理の意味するところは、すべての事柄をよりよくみて、そのことについてよりよく行動するためには、貧しい人びとの視点から物事をみて、貧しい人びとへの愛をまず具体化する必要がある、ということである。貧しい人びとの視点からして何がより大きな問題であるのか、どのようにすることが歴史をよりよく展開させる可能性につながるのかということ判断することである。更に、何よりも「隣人愛」を具体化し、貧しい人びとに対する正義と、大多数の人びとに対する愛とを実現すること、これも貧しい人びとの視点から世界をみる重要な要素である。遍りの原理は期待をも生み出す。これはわれわれの経験からも明らかである。期待とは、偏りの原理によって、本当に、われわれの世界の一体性が一層よくわかり、真実を覆い隠そうとする内的な傾向を克服することができるという期待である。更に、そこから、この世界に対する本当の愛も生まれてくる。この愛は、大多数の貧しい人びとへの愛と、また正義とを持つもので、同時に、人間関係から生じる家族愛とか、結婚関係における愛、また友情等の愛に反するようなこともない愛である。

偏りの原理はまた、貧しい人びとへの選択がこの世界にあっては実際、闘争的なもの、痛みを伴うものであることを示している。世界全体が緊張関係にあり、対立状態にある以上、一方につくということはそのまま、他方と対立し、緊張関係をなすこととなる。より具体的にいえば、貧しい人びとのために闘うということは、貧困を生み出している人びとと闘うということになるわけである。政治的にいえば、対立する双方の利害を一致させることが、貧困問題の解決のためには重要であるといえよう。しかし、この政治的現実主義といえども、貧しい人びとへの選択が持つ闘争的性格を消し去ることはできない。理論上、貧しい人びとへの選択が貧困を造り出している人びとに対立するのは、その人びとが貧困を造り出しているということ自体の故である。人間として対立しているわけではない。教会も認めるように、貧しい人びとへの選択は何人をも除外するものではな

い。つまり、貧しい人びとへの選択は、貧困を造り出している人びとに対してすら人間的、宗教的に奉仕するものなのである。しかし、それでも、選択とはやはり一方を選ぶことである。それ故、必然的に対立を生むのである。貧しい人びとへの選択は一方を選ぶことであり、基本的、不可避的に対立を引き起こすものである。しかし、同時にこの選択はすべての人に実り豊かなものでもある。貧困に追い込まれている人にとっても、貧困を生み出している人にとっても、それぞれの非人間的状況から人びとを解放し、人間が人間らしく生きるようにする、そのような実り豊かなものなのである。

c) 以上論じたことから明らかなように、ラテン・アメリカの神学は貧しい人びとへの選択において、全人類が直面している問題を見ている。この問題を意識しているか否か、貧しい人びとへの選択を実際なしているか否かには関わらず、ラテン・アメリカの神学は全人類の問題を見ているのである。貧しい人びとへの選択ということ自体は、確かに、教会用語に由来するものであり、各地の教会がその基礎をすえ、宗教的な動機から実践してきた。しかし、この選択はもともと、人間の歴史をみる見方、その歴史的状況に対応する仕方なのであり、また、自己自身との関係、他者との関係で人間をみる見方、人間相互の関係を形成する方法、普遍的人間性を正しく理解する仕方、そしてこの世において救いの道に生きる究極的な道、なのである。現在の世界は、ますます一つのものとなり、各地の現状も十分知られるようになった。通信手段も著しく発達した。その結果、貧しい人びとへの選択がすべての人のためになることも、いよいよ明らかになってきた。現実には、人びとはさまざまな宗教やイデオロギーを持ち、人種的にも異なるわけであるが、その上でなお、人びとは貧しい人びとへの選択がめざすところを分かっている。もちろん、これを実践しているか否かは、また別の問題であるが、理解していることは確かである。

貧しい人びとへの選択は普遍的、人間の問題である。それ故、人は例外

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

なくこの問題と直面しなければならない。われわれの選択の、この普遍的、人間的次元は、実は聖書の伝統に根を持つものである。宗教的ないい方ではあるが、聖書はよく人類全体のことについて語っている。つまり、人間がだれでも有する人間性のことである。そして、聖書はこの人間性の実現が、最終的には、貧しい人びとへの選択をなしたか否かにかかっているというのである。マタイによる福音書に記された最後の審判の様子³⁰⁾は、このことをよく示している。その記述によれば、救いを得ているか否か、いかえれば、真に人間らしく生きてきたか否かは、貧しい人びとへの選択という規準で決められるのである。宗教上の立場がどうであったかということには関わりなく、ただ貧しい人びとへの選択をなしたか否かだけが問題とされている。旧約聖書の例もあげれば、おそらく最も厳かに、人間の重要性を訴えているのは次の箇所であろう。「人よ、何が善であり、主が何をあなたに求めておられるかは、あなたに告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである³¹⁾」。終わりの一節、「へりくだって神と共に歩むこと、これである」は、信仰を持たない人びとからは無視されてしまう言葉であるかも知れない。それでもこの言葉を、ごう慢さのない真の謙遜への招きと受けとめることはできよう。この一節をのぞいた部分は、明らかにすべての人間に向けられた要請である。聖書のいう「正義を行い、慈しみを愛し」とは、今日の言葉でいえば、まさに貧しい人びとへの選択にほかならないのである。

今日、人類を組織的な形で分けようと思えば、それは信仰者か偶像崇拜者かという点であって、キリスト者であるかそうではないかという点ではない。宗教的、イデオロギー的立場とは関係がないのである。具体的にいえば、貧しい人びとの生命という点から生命を考え、実現しようとしているか、あるいはその反対であるかが問題である。解放の神学はこの点を強調し続けてきた。解放の神学は、キリスト教信仰や人間性の充足ということを貧しい人びとの生命を考え実現することだけに限定してしまおうとい

っているのではない。ただ、貧しい人びとの生命の実現という点に、最低限必要な根本的問題、すべての人にとって根本的な問題を見出しているのである。

貧しい人びとへの選択は、すべての人が取り組まなければならない問題である。特に、現代のように世界が相互に関わりを持ち依存しあっている時代では、どうしても、生命の側をとるのか死の側をとるのか、犠牲者の側に立つのか殺人者の側に立つのかという選択が避けることのできない問題となる。ロメロ大司教もこの事実を明らかに意識して、こういわれている。「このように考えると、この選択は、すべての人につきつけられたものであり、それ故、教会にとってもその信仰に根本的に訴える問題なのである。教会は生命の側に立つのか、死の側に立つのか。中立の立場はもはや断じて許されない。更に具体的に問えば、われわれの教会はエルサルバドルの人びとの生命に仕えるものであるのか、それともその死をもたらすものの共犯者となるのか、これが選択なのである。この選択において、われわれはわれわれの信仰にとって根本的な問題として歴史に介入する。いいかえれば、われわれが生命の主を信じるのか、死をもたらす偶像に仕えるのかがこの選択において決まるのである」。

以上が、貧しい人びとへの選択の意味するところである。そこで、われわれは、この選択の実現が急務であることを示す新しい言葉を作り出さねばならない。教会がこれまでに成した歴史上のさまざまな選択や、貧しい人びとのために考えていない国々への選択に対して、新しい言葉でわれわれの選択を示さねばならない。貧しい人びとへの選択とは、この世界の貧しい人びとの側に立つことを明らかにし、貧しい人びとのために生き、貧しい人びとのために身を捧げることなのである。

論題 5

「貧しい人びとへの選択は人びとに要請されているものである。しかし、

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

同時に、この選択をなす人びとにとってもこれは救いとなる。逆説的ではあるが、貧しい人びとが世界に光と救いをもたらす。この選択において、世界の人びとは連帯のうちに相互の関係を結び、生命と和解と愛とを生み出す」。

貧しい人びとへの選択は一つの要請であり、同時にまた、救いでもある。この選択による益はだれよりもまず貧しい人びとにもたらされる。しかし、それだけではない。この選択を実践する人びとにも益がもたらされるのである。逆にいえば、世界がこの選択をせず、貧困を生み出す人びとの側に立とうとするならば、世界はその本質を損ない、害を受けずにはすまされない。非人間的なものとされた世界は、「不安の文化」を榮えさせ、学問的技術的にはいかに進歩しても、人間性については逆に後退させてしまう結果となる。不安は無意識のうちに広がり、人びとは消費主義の内に逃避しようとし、群衆のうちに生活しながら、なお孤独な状態におかれる。人びとは皆このような良心の苦悶に陥っており、逃れることはできない。この苦悶は心のうちにひそむものであるが、なお強力に、生きる喜びや本当の幸福を奪っているのである。

このような人びとの現状をみてなお、われわれは貧しい人びとへの選択が救いを提供するものであるという逆説を主張する。貧困により、非人間的な状況におかれている人びとが、力を持ち、豊かな生活を営みながら非人間化されている人びとに人間性の回復をもたらすのである。「貧しい人びとへの選択」という表現そのものが、救いの期待を抱かせる。選択ということは、賭けをするのと同様、何かを期待してなされるものだからである。貧しい人びとへの選択は、確かに形式的にいえば、貧しい人びと自身の救いのためになされるのであるが、同時にまた、この選択は、基本的に世界の現状を誠実に認め、自己自身についても誠実な目でみようとする行為であるために、人間の自己自身に対する和解をももたらし、あるいは少

なくとも、人間自身のうちにある対立を取り除こうと努める行為となる。そして、これはすべての人にとって、救いとなるのである。

貧しい人びとへの選択は救いをもたらすものであると論じたが、その意味は更に深い。キリスト教信仰という観点からみると、貧しい人びとは積極的な救いをもたらすのである。貧しい人びとを選択するその人びとの人間性をも完成するからである。この主張はとっぴなものと思われるかもしれない。哲学的分析によるものではなく、信仰の本質に属する問題だからである。そして、実際、この選択を実践する人びとは、この主張に同意してくれるのである。

話を整理するために、プエブラ会議の引用から入ろう。同会議は「貧しい人びとという力ある福音宣教師」という表現を用いている。「福音宣教」とか「福音」という言葉はキリスト教の基本的用語である。この言葉は、まさに、イエズスの使命と人格とを的確にいい表している。それ故、極めて重要な言葉であるといわねばなるまい。内容からいえば、福音宣教とは良きおとずれを伝えること、救いを宣べ伝えることである。イエズスご自身にとっては、この世の貧しい人びとに伝えられる良きおとずれ、それが福音であった。そして、プエブラ会議の言葉に戻れば、貧しい人びとは力強い福音宣教師であり、良きおとずれを告げ、われわれに救いをもたらしてくれるのである。救いとは、宗教的に分析すれば、神の言葉と愛とを分かち合うことである。ただ、われわれはいま、全人類に対する救いの意味について論じようとしている。その意味で、貧しい人びとが差し出す救いとは何なのであろうか。

a) 聖書は大胆にも、メシアを神の苦難のしもべと呼んでいる。そして、現実に貧しい人びとはその身に苦難を負い、この世の罪によりゆがめられ滅亡に追いやられている。苦難のしもべという聖書の言葉は世界の国々にとって、一つの光となる。この光は人間についての根本的な理解をもたらす。この光なしには得ることのできないほどの、根本的な理解である。

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

この光に照らされて初めて、われわれはあやまりに陥ることなく、世界や人間の根本的なありさまを正しく理解することができる。すなわち、この光によってこそ、この世界が罪の世界であり、根本的に改めねばならず、そうしてこそ初めて生命の希望を持ち続けることができるということが分かるのである。光は大変小さなものであるが、このうえなく大きなものを照らし出す。世界と人間の本当の姿を照らし出し、必要な改革の方向を示すのである。形式的にいえば、世界が自らの現状を知り、更にどうあるべきかを知るならば、当然貧しく苦しんでいる人びとに目を向けなければならないこととなる。そして、貧しい人びとに目を向けるときにこそ、世界は光を見出すであろう。根本的問題を知る光、またそれに連なるさまざまな問題、即ち社会的、経済的、神学的問題や、科学上、技術上の問題を照らし出す光である。

b) 貧しい人びとは救いをもたらす。それは、この人びとのおかれた現状が、歴史的にみても、構造的にみても、回心をもたらす場だからである。貧しい人びとのこの働きは、決して小さなものではない。なぜなら、キリスト教の教えによれば、人間はその完成のためには必ず回心を経験し、自らの欠陥を退けなければならないからである。救いとは、人間が完全に人間らしく完成されることである。「人間全体」がその能力を発展させるという意味ではない。この救いを示すには、キリスト教でいう「新しい人」という言葉がふさわしい。人間は自己本位の生き方から、人びとのために生きる生き方に変えられ、死への道から生命の道に変えられて、新しい人となるのである。もちろん、新しい人となるのは、人間の持つ積極的能力を否定することではない。ただそういった回心なしには、新しい人も世界を改善することなどはできないのである。

回心の場とはどのような場であるか。何が人を回心に導く力を持っているのか。このような問いは無益なものでもなければ、単なる学問的な詮索でもない。人間は人間に対して不正をなし、真理を覆い隠してしまおうと

する内面的な傾向を持っている。この内面的傾向を抑える力を持つものがあるとすれば、それは一体何であるのか。これは実に根本的な問いである。この現代世界の現実のなかで、われわれは貧しい人びとの世界こそ、そのおかれた社会の構造的状況からしても、人間のこの罪の傾向を抑える力を持っていると信じる。少なくとも、こう問うことはできるであろう。何が回心に導く力を持っているのか。自分自身のことを思いわずらう心から人びとのことを考える心に導くものは何なのか。人間のうちのエゴイズムに打ち勝たせるものは何なのか。貧しさこそが回心に導くのでなければ、一体何がその力を持っているというのか。

c) 貧しい人びとは、今日の世界が失ってしまい、また実に効果的に相対化してしまった価値観を世界に指し示す。その点で貧しい人びとは救いを提供しているのである。貧しい人びとのおかれた具体的状況を理想化するとか、人間が人間故に持っている否定的な価値や、貧困を造り出した人びとが貧しい人びとに植えつけた価値観を無視すべきであるというのではない。しかし、なお、特にラテン・アメリカの数多くの貧しい人びとの群れや信徒たちをみれば、この貧しい人びとが、そのおかれた状況や抱いている精神の故に、救いの模範ともいうべきものを持っていることを認めないわけにはいかない。貧しい世界の人びとこそが、他のさまざまな地域の人びと以上に、救いに関わる価値観を持っている。生命を求め、特に人間の尊厳にふさわしい生命を求める根源的な願いや、生命の可能性を信じようとする希望、世界にはびこる個人主義、共に手を取り合い連帯して生きようとする見方からすれば非人間的と思われる個人主義を克服しようとの姿勢、心を開いて人びとを受け入れようとの姿勢、進んで人びとに奉仕しようとする広い心、苦難と抑圧と迫害とを堪え忍ぶ力、生存のための労働と解放の闘いにおける創造性、消費主義にも商業主義にも落ち込むことのない真に民衆に根ざした芸術や文化の創造、このようなものはいずれも、貧しい人びとの世界にこそよりよくみることのできるものである。キリスト

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

者としてみても、貧しい人びとの信仰と希望と愛の深さを疑うことはできない。彼らは、確かに、神を信じ、神が共にいてくださるとの希望を持ち、人びとを兄弟とし、生命を与えるまでにも至る愛を持っている。そのようなわけで、貧しい人びとの世界には、そのおかれた社会的構造の故に、第一世界では見ることでできない人間性と信仰とが蓄えられているのである。この信仰こそは、世界が非人間化の坂道をこれ以上転げ落ちてゆかないようにする力を持つものとなるのではなからうか。

d) 貧しい人びとは理想の世界を新たに描き出す。それなくしては何者も、いかなる人物も、いかなる民族も生き続けることができない理想世界である。この理想の世界は、常に新たに大きくなる欲望を反映するものではない。むしろ、世界の富を互いに分かち合うところこそ、この理想世界の核心がある。貧しい人びとの指し示す理想世界は質素である。地上の富はすべての人に分け与えられ、それによって人類は分裂することなく結びつけられる。貧しい人びとの指し示す理想世界は単純である。人類が決心さえすれば、技術的には実現し得るものである。それは「乳と蜜の流れる」地ではない。すべての人が地を耕し、その実を口にし、家を立て、そこに住むことのできる世界である³²⁾。この理想世界は全人類のもつ貴いものを結集する力を持つ。すべての人が何かを提供し、そしてすべての人が人間らしく生きることができるのである。

e) 貧しい人びとは、自分たちを選択する者を受け入れる。世界の人びとに光と力を与え、救いの模範となるばかりではなく、自分たちを選択する人びとを、社会構造からいえば抑圧者の側であるにもかかわらず受け入れることによって、実際に和解をも成し遂げるのである。抑圧者をも受け入れるということは極めて重要である。それによって、人類が愛をもち得ることを明らかに示すこととなるからである。さらに、貧しい人びとを選択する人びとの側も、貧しい人びとに受け入れられることによって、おそらくは第一に、自分たちが本当に人間であって人類の一部なのであり、特別

な存在なわけではないことを知る。あるいはまた、人類の一部であると知ることによって、他の道では得られない深い尊厳を得ることができるようになる。貧しい人びとを選択することや、貧しい人びとと共にいることにはなお危険や苦痛が伴う。しかし、貧しい人びとに受け入れられ、人類の一部であると知ることによって、この危険や苦痛も全く違った意味を持ち、尊厳のあるもの、受けるに値するものと変わるのである。

貧しい人びとは、自分たちを選択する人びとを受け入れ、暗黙の許しを与える。この暗黙の許しは貧しい人びとの「受け入れ」という行為にみられる重要な一要素である。貧困を作り出している側に属しながら、なお貧しい人びとの下へゆき、貧しい人びとに受け入れられるということは、それだけでもおのずから、罪が許されたことを意味するのではなからうか。そういうわけで、自らの罪を認めることと罪の許しとは同時に起こる。罪の許しが同時に起こればこそ、人びとは自らが罪人であるとの自覚をまひさせたり失ってしまうことなく、根本的に自己に誠実であることができる。罪人が同時に罪許された者であればこそ、自分の未来に希望を抱くことができるからである。貧しい人びとが自らを選択する人びとを受け入れるということは罪の許しを示すばかりではない。それはまた、キリスト教信仰にとって根本的な、そして今日の世界がまったく欠いている、恵みの経験をも指し示す。今日の世界は神の恵みを経験していないようであるが、それでもなお、神は驚くほど豊かに、恵みと賜物とをこの世界に与えておられるのである。

f) 最後に、貧しい人びとの場合は、超越性を歴史的に捉えて生きるためにはこのうえなく良い場である。貧しい人びとを選択するということは、大きな問題や、強い要請、また大きな可能性を引き起こす客観的な世界の動きのなかに身を投じることとなるからである。それはまた、歴史がさまざまな分野で展開してゆく場でもある。経済学的、社会学的にはもちろん、共同体としても個人としても、実践的、倫理的にも、学問的、宗教的にも、

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

この貧しい人びとの場でこそ歴史は展開してゆく。つまり、歴史はこの貧しい人びとの場でこそ、自ら超越的なものを取り次ぐことができ、また超越的なものに対する問題もこの貧しい人びとの場でこそ一層明らかなものとなるのである。貧しい人びとへの選択は、社会構造的な理由により、他の何者よりも鋭く、さまざまな根本的問題を照らし出す。貧しい人びとに賭けることは分別にかなったことであるのか、あるいははっきりいって無分別な行為なのか。希望を持つことは、あきらめや絶望よりも賢明な行為なのか。生命を与えるまでにいたる本当の愛は、自己中心や無関心よりも真実なものであるのか。このような根本的な問題が、貧しい人びとへの選択において問われるのである。宗教的にいえば、歴史は本当に神にいたる道であるのか、貧しい人びとへの選択はこの神のみ心に答え応じる方法であるのか、それともただの幻想であるか、ということである。このような問いに対する答えを予見することはできない。ただ、貧しい人びとへの選択を貫いている多くの信徒にとっては、この選択が神の秘義に対する信仰を支え、成長させ、鋭いものとする役を果たしていることだけは確かである。

結 論

この論文で論じたことは、二つの点にまとめられる。第一に、この世界の貧しい人びと、苦しんでいる民衆は、恐ろしい悲劇的な状況にあり、人類はこの状況を解決しようという選択をなさねばならないということ。そして第二には、これとは逆に、貧しい人びとの出会いは救いにつながるということである。現代世界の貧しい人びとは、ちょうど福音と同じように、訴えるものとなり、また良きおとずれとなっている。貧しい人びとは、本来自分たちのものであるものを、与え、帰すよう世界に訴え求めている。すなわち、生命をである。そして同時に、貧しい人びとは世界に意味と救

いとを与えている。そういうわけで、貧しい人びとへの選択は、連帯となり、相互に与え合うものとなり、互いに導くものとなり、また隣人愛を実現するものとなるのである。

貧しい人びとへの選択をなし、貧しい人びとと連帯することは本当に難しい。その理由は、貧しい人びとと労苦を共にすることによる個人的な損失やリスクばかりではない。その困難の第一の理由は、貧困を生み出している原因が構造的なものであり、従ってその解決策も構造的問題を解決するものでなければならないという点にある。構造的問題というのは、経済的、政治的な国際秩序、極端なナショナリズムや、国家群を重視する政策などであり、これらのものが貧困を生み出し、愛を破綻させているのである。しかし、いかに困難であろうとも、何かをなすことはできるし、またそのために多くの努力をつまなければならない。

米国が、自国の司教たちの声に耳を傾け、その政策を変えて、第三世界を重視するようになり、また経済的に重要な役割を担っている日本が、本当の発展のためにその持てる力を用い、また、世界の教会指導者や諸宗教の指導者たちが共に手を取り、貧しい人びとの生命を守るという最低限にして最重要の課題に取り組むならば、そのときにこそ、第三世界の人びとも、すべての人類も、希望を持つことができる。逆にこの人びとが務めを果たさず希望を奪うならば、その責任は重大である。米国や日本、また世界の宗教指導者たちがその努力を惜しむならば、第三世界はこのままずるずると死に向かいゆき、人類も皆破滅してしまうであろう。

キリスト者として、生命の希望を持ち、生命に責任を持つことは、基本的な信仰の問題である。生命を守ることができないならば、神を信じる信仰も無益である。逆に、われわれが信仰によって貧しい人びとの生命を守ろうとするならば、われわれはイエズスに従っていることになる。イエズスは生命をもたらすために、それも、豊かにもたらすために、世に来られたからである。神はまた、この世を愛して下さっている。それ故、貧しい

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

人びとの生命を守ろうとすることは、神の愛にあずかることにもなる。イエズス会士、P・ルティリオ・グランデ神父³³⁾の言葉を借りれば、貧しい人びとの生命を守ろうとすることは、「人類の最も尊い運動」にあずかることである。すなわち、この世界に神の国を建て、真実の支配する世界、正義と愛と平和の世界をつくろうとする運動にあずかることである。そのような運動にあずかることによってこそ、われわれは、人間が皆人間らしく生きる、本当に人間にふさわしい世界をつくることができるのである。

(訳者=小林紀由, 日本大学文理学部助手)

注

- 1) 米国カトリック司教団教書『万人に経済正義を』5番。
- 2) 同上, 1番参照。
- 3) 同上, 41番以下参照。
- 4) 同上, 252番。
- 5) 同上, 254番。
- 6) 同上。
- 7) 同上。
- 8) 『メデジン文書』1番参照(訳注, 同文書邦訳は, ホアン・マシア著『パチカンと解放の神学』, 南窓社, 1986, 103-147頁所収)。
- 9) 米国カトリック司教団教書『万人に経済正義を』271番参照。
- 10) 同上, 290番参照。
- 11) 同上, 24番参照。
- 12) 同上, 71番。
- 13) 同上, 86番。
- 14) 同上, 50番参照。
- 15) 同上, 87番。
- 16) 同上, 27番。
- 17) 同上, 265番以下参照。
- 18) 同上, 267番以下参照。
- 19) 同上, 271番。
- 20) 同上, 282番参照。

21) 『プエブラ会議文書』30番参照。

22) イザヤ書1・15参照。

訳注 こう記されている。

「お前たちが手を広げて祈っても、わたしは目を覆う。どれほど祈りを繰り返しても、決して聞かない。お前たちの血にまみれた手を。」

23) ヨハネの手紙一3・15参照。

訳注 こう記されている。

「兄弟を憎む者は皆、人殺しです。あなたがたの知っているとおりに、すべて人殺しには永遠の命がとどまっています」

24) 『メデジン文書』16番参照。

25) 同上。

26) ヨハネによる福音書16・2。

27) イザヤ書5・20。

28) 訳注 筆者はここできかなり自由な引用をしている。おそらく筆者が意識していた聖書の箇所は、ローマの信徒への手紙1・18—25であろう。こう記されている。

「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。

そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拜んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべき方です。アーメン」。

その他、テサロニケの信徒への手紙二2・10—12についても参照。

29) 『プエブラ会議文書』1142番参照。

30) マタイによる福音書25・31—46。

31) ミカ書6・8。

32) イザヤ書65・21以下参照。

33) 彼は、貧しい人びとの生命を守ろうとして殺されたエルサルバドル人最初の

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

司祭である。

〔なお、本シンポジウム当日には筆者より本稿の具体的な事例として、2つの話が付け加えられた。Text A は63頁1行目後に、Text B は66頁9行目後に挿入される。〕

Text A：人びとは心から喜びを実感した。やっとのことで彼らは、安全な場所を見つけ出し、皆一緒に共同生活をそこで始めたのだ。しかし、外から見る者にとっては、こうした人びとの喜びのなかに一種の驚きと悲惨さを感じる。つまり、掘って立て小屋って、一体どんなものなのか。それは板切れやボール紙やプラスチックや、また運が良ければ天井がわりのブリキ板などのたぐい、拾い集めのもので精いっぱい作られた汚い小屋なのである。この十平方メートルの住まいで、一個のテーブル、二、三の古椅子、マットレスもないたった一つのベッドしかない、時にはベッドもなくじかに床に寝るだけの一部屋に、六、七人が生活するのである。近所には衛生施設もない。料理のため、手洗いのため、飲料水のため、風呂を浴びるためにドラム缶一杯の水をどこかから買って運んでこなくてはならない。竹やアシで編んだテーブルは食事の準備のためにも使われる。雨期には雨水が容赦なく小屋に流れ込むので、浸水しないようにとだれもが小屋の内側からプラスチック板で、覆うのである。

これが人びとの住む掘って立て小屋なのだ。人びとは、それでも、やっとのことでいま安定した地面に自分たちの小屋を建てることができたので大変嬉しいのである。数多くのエルサルバドル人にとっての貧困の悲惨さを表現するにはこれで十分であろう。特に、ある一人の女性が次のようにいったことを耳にしたとき、そう感じざるを得ない。

「私たちはこれまで雨が降ったときなどはいつも恐ろしかった。以前と比べると、今は安全なしっかりした地面に家があるからもう怖くはない。もう斜面沿いに住まなくていいし、地滑りの危険にも遭わないでよい。雨

がどしゃぶりでも、寝るときは心配がいらぬ。こうして暮らしていけるように神様に祈り、そして神様から答えを求めるだけだ。これまで住んでいたところは雨が降ると真夜中でも強い風や激しい雨で家の壁板が壊れないかと心配でよく起きたもんだ。今では随分良くなった。でもまだ、私たちの問題の解決はどうしたら一体見出すことができるかと、何時も思案する。私たちだって同じ人間なんだ。いま住んでいるところは、私たちの土地ではなくて、市の所有地だから。市長は私たちの問題に積極的に取り組んでくれたことはこれまでにない。だからこのようにいつも感じる。市長さん、できたら私たちを平和な生活のままにさせておいてもらいたいものだ」。

Text B：私は1981年12月11日にモソテ地区で起こった虐殺のたった一人の生き残りだと確信している。私はモソテでは、いまいる難民収容所と同じような場所にいたのだ。そこには子どもだけしか見あたらなかった。というのは、人びとは住んでいた村を捨てて、モソテ地区に逃れてやってきたからである。そこで軍の兵士たちは避難してきた人びとを見つけ次第、皆殺しにしてしまい、数多くの人びとがそのように殺されてしまった。

兵士たちは徒歩でやってきた。早朝7時の軍用機が着陸した。一人も生き残らせず、全員を殺すと命令を受けた。この兵士たちはアトラカトル大隊方面からきた。そこで、家にいた女たちや教会内にいた男たちをそれぞれ監禁した。私たちの人数は全員で1100人であった。子どもたちは女たちと一緒にいた。10時だか、11時頃周りを見てみると、兵士たちは教会内の男たちを殺し始めていた。まず機関銃で撃ち殺し、首を切り落としていた。窓の外の方をみて、私は叫んだ。「あゝ 兵隊が人殺しをしている。みんな殺されてしまうわ」と。そこにいた女たちは一斉に泣き叫び始めてしまった。子どもたちは何が起きているのか分からないまま強いショックを受けたのであった。兵士たちは戸口のまえで見張りをしていたので、だれも外に逃げることはできなかった。

第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択

午後2時、兵士たちは女たちを外に連れ出し始めた。既に男たち全員を殺してしまっていた。5時頃彼らはずいに私を殺すために家から連れ出した。家には二、三人の女たちが取り残されていた。私は連れ出されるとき、どうしても家を出たくなかった。兵士たちは子どもたちを閉じ込め、彼らの首に縄を掛け、窒息させ、最後に首を切り落とそうとした。兵士は私の腕に抱いていた私の八ヶ月になる末娘を奪い取り、大型ナイフをもって首縄を掛け、その娘と長男を家に閉じ込めてしまった。そして、他の女たちと私を殺すために外に連れ出していった。

「おお、神様、全能であられる神様、ここで彼らの手で私を殺させないように。私たちには何の罪もないことをあなたは御存じであろう」と私は祈った。兵士たちが私たちを殺そうとするところまで連れ出してくると、他の女たちと私を並べさせた。その時に、私はとっさに身をかがめながら列から離れ、近くの小さなシゲミに隠れ込み、樹の枝で足が見られないように覆って身を守った。そうして、私は女たちが機関銃で撃ち殺されていくところを目撃することになった。私の他に20人の女たちがいた。兵士たちはその女たち全員を殺してしまった。再び別のグループの人達を連れてきて、弾丸を一斉に浴びせるようにしてつぎつぎに殺してしまった。

女たちは泣き叫んだ。「殺さないで。私たちはなにも知らない。だれとも関わりはない。どうして私たちを殺すの」。兵士たちは、「泣き叫ぶのをやめろ、そうでないと悪魔が来てお前たちを連れ去っていくぞ」といっていた。だが、彼らは女たちを逆に殺していったのであった。私は兵士たちの足元の真うしろに隠れていた。兵士たちは女たちを殺した後、自分たちは皆がゲリラであるから皆殺しにきたのだといっていた。そして、死体をもろとも焼き払い、炎のなかに放置したのだ。その一瞬、炎の真只中から一人の子どもが泣いていた。どこからかもう一人の男の人が出てきて、一人の兵士に向かっていった。「その子をまだ殺していないぞ」と。そうすると兵士は行って、子どもを撃ち殺してしまった。泣いていた子どもの

声はパタリと止まった。私はもう少しで炎に包み込まれようとする状態であった。私は起こった虐殺の近くにいたのだ。

しばらくしてから、「さて、これで全員死んでしまった。さあ、次は子どもたちを殺しに行こう」と兵士たちはいった。二、三人の兵士がそこに残り、他の兵士たちはその場を去った。私は何とか脱出の機会をうかがっていた。けれど私の子どもたちはまだ家のなかに監禁されたままであった。結局、兵士たちは私の四人の子どもを殺してしまった。九歳、六歳と三歳の男の子に八ヶ月の末娘たちである。また夫も殺された。いま生き残っているのは、この難民収容所にやってきた私の両親と、遠くに住んでいたためにこの難を逃れた私の二人の娘たちである。

私は七日間、だれ一人にも会うことなしに、何も飲まず食わずのまま、山のなかでたった独りでいた。兵士たちは全員を殺してしまっていた。私がただ独りいま生きているのはきっと神様のご意志である。神様は私に生き続けることをお許しくださったのは、軍隊が人びとに対してしたすべてのことを私が証言するためである。最初はゴテラ地区に連れていかれると私たちのだれもが信じていた。すべての人たちは欺かれたのだった。だれもが、兵士たちが私たちを殺そうとは信じてもいなかった。でも私はその兵士たちが人びとを殺している、男の人や女の人の死体を焼き払っていることを目撃したのだ。私は兵士たちが子どもたちを殺したところは見えないが、私が隠れているときに、確かにその子どもたちの叫び声や泣き声を聞いたのであった。

(訳者＝アンセルモ・マタイス、保岡孝顕)

The Poverty in the Third World and the Option for the Poor

Jon Sobrino

SUMMARY

What I want to deal here is to analyse and reflect on some of the theological principles which are behind the US Catholic Social Teaching and the US Economy: Economic Justice for All. I do this reflection from the viewpoint of Central America guided by the type of theology which we do there, of so-called liberation theology. For the first part of my paper, I will discuss some important points in the US pastoral letter. And for the second part, I want to concentrate my analysis on the relation between poverty and life and death and the option for the poor by offering five propositions.

I. On the US pastoral letter from the viewpoint of the Third World

(1) The major proposition of the letter is that the world in general is in bad condition now and it must be changed. What is important in the letter is to analyse its wrong condition affecting the great majority of the human beings, especially those who cannot sustain even elementary levels of living. The economy is fundamental, because as the letter says, it determines "whether people live or die." (no. 5) The economy should be judged from this basic perspective.

(2) To approach the theme, the pastoral letter presents the situation of the life and death in the world. As the Latin

American Bishops did in Medellin and Puebla, the pastoral letter presents the massive, cruel, inhuman and dehumanizing reality of the world. The world economic order has both ethically and technically collapsed. It does not produce life, but takes people steadily closer to death.

(3) Based on this reality, the pastoral letter offers an important principle –the option for the poor. This term comes from the ecclesiastic, pastoral and theological language, but it is a principle which must be applied in all the areas of life, and certainly in the economy which, according to its definition, must be oriented to overcome the poverty. The affirmation of the pastoral letter on the option for the poor in the economy appeals frequently: “Economic decisions must be judged in light of what they do for the poor, what they do to the poor, and what they enable the poor to do for themselves.” (no. 24)

(4) The pastoral letter does not analyse the structure itself of the world economic system, but rather does mention the important mechanisms of the economy which generate poverty. This analysis is important, because it is guided by the option for the poor, because it shows how the economic order actually generate poverty, and because, with noticing the fundamental responsibility of their own country for this, the US bishops are offering a good example of taking the responsibility to transform such situation. There are five points of the economy which the pastoral letter analyses. (i) the external aid for development, (ii) the international commerce, (iii) the world monetary and financial system, (iv) the foreign investment, and (v) the nutrition in the world.

(5) The picture which the pastoral letter takes on the poverty and the responsibility of the economic world order is very well described and appalling. Nevertheless, the pastoral letter becomes silent about one crucial point: They should have asked themselves,

at least methodologically, what is the base of the economic misfortune observable among the poor, what generates enduring poverty of the majority, and what actually produces more poverty. In a word, the root cause of such a problem derives fundamentally from the capitalist economic system itself. Therefore, the limitation of the pastoral letter is serious, because it eludes the analysis of the root of the problems and shuns asking seriously for what the First World takes pride in as the ultimate truth: democracy in the political arena and Christianity in religion and culture.

This limitation, although being serious, must not ignore the significance of the pastoral letter: the denunciation of the inhuman situation of the world, the most serious responsibility of the economy for producing it and the demand for a radical change being guided by the principle-option for the poor.

II. The theological analysis of the principle of the pastoral letter

(1) The first proposition is that poverty in the Third World means serious difficulty to survive and therefore gets people slowly close to death. And if this poverty is massive in the world, then our world is a world of death.

(2) The second proposition is that poverty in the Third World is substantially unjust. Therefore, it is a poverty which is inflicted by others to the poor. So, those poor people become victims. An unjust world is in itself a violent world; a world which gives death, and therefore, the world which is sin.

(3) The third proposition is that the poverty of the Third World unmasks what the ultimate truth of our world is, but we do not want to recognize it. The world of forces oppresses the poor and represses the truth which the poor express. So, an unjust world is not only a world of death, but it is also a world of lie.

(4) The fourth proposition is that if the above-mentioned points are true, or substantially true, then the question is what can change this world. I think the option for the poor is not only something which priests or Christians should do, but also the option for the poor is something with which any human being is confronted. Economic world order should make an option for the poor.

(5) The fifth proposition is that the option for the poor is demanding, but it is also salvation for those who make it. Paradoxically, the poor of this world offer us light and salvation. In this way, all human beings relate to each other in solidarity, and build life, reconciliation and fraternity.

Conclusion: I think that the option for the poor is demanding, but it is also salvation. Obviously the first who profit from the option for the poor are the poor themselves, but also those who make it. If I formulate it negatively, a world which does not make the option for the poor but against them or if structurally and personally we do not make the option for the poor, the world, then, becomes more and more inhuman, and what is worse, it dehumanizes others.

It seems that the US and Japan still find it very difficult to make an option for the poor.

In any way, at least I should like to propose that universities should make an option for the poor obviously, and also lawyers, medical doctors and so on. If everybody puts a little bit in the option for the poor, then, I think there is hope for humanity. And if not, I do not see any hope, because you are just having more and more dehumanizing reality of the world such as dying of hunger.

I believe that life has a meaning. But I think it comes from this option for the poor.

Supplement:

The following two texts were provided by the author during his presentation of the paper at the VIIth International Symposium held at Sophia University on November 27-29, 1987 under the auspice of the Institute for the Study of Social Justice.

TEXT A The Joy of Living in a Shack

The people's joy was sincere—they had finally reached a secure place and were together as one community. But for the outside observer, there is something surprising and tragic in this joy. What, after all, is a shack? A dirty shelter, made of abandoned materials like wood, cardboard, plastic, and, with luck, corrugated tin for a roof. In these ten square meters, seven or eight people live in a single room, with a table, two or three old chairs, a bed without a mattress or a cot, and sometimes only the floor to sleep on; there are no sanitary services, and a barrel of water must be bought in order to cook, wash, drink and bathe; a table made of bamboo reeds serves as a place to prepare the meals. In the rainy season, water penetrates the shack without mercy, and everyone must cover themselves with plastic—inside the shack—to protect themselves from the water.

This is a shack. Still, these people are happy because they can build their shacks on firm ground. It's difficult to express in a more tragic way what poverty means for so many Salvadorans. We thought of this when we heard one woman say:

"We were really afraid when the rains came; but here, when it rains, we are no longer afraid. I feel more secure now because we are on firm ground; we no longer live on the slopes, nor are we in danger of landslides. When I go to sleep, I don't worry, even if it rains a lot. I just ask God for an answer in order to go on. I used to get up in the night where we lived before

whenever it rained, because I thought the walls would collapse in the strong winds and slashing rain.”

“But now I feel better. Still, I wonder what solution we will find to our problems—we are human beings too. We feel this way because we live on land owned by the city; it’s not our own land, and the mayor has not responded positively. If he wanted, he could leave us here in peace.”

Source: *Letter to the Church from El Salvador*, no. 144 (July 16-31, 1987), Information Service of the Pastoral Center, Central American University, San Salvador, p. 9.

TEXT B Passion of the Salvadoran People

“I believe I am the only survivor of the massacre in Mozote. It occurred on December 11, 1981. We were there then, just as we are here now in the refugee camp; all you could see were children since the people had fled their villages to come to Mozote. That’s how they killed so many people, because we had all taken refuge there and when they found us they killed all of us.

The soldiers came on foot, and at 7 a.m., an airplane landed. They said that they had orders to kill everyone, that nobody was to remain alive. They were from the Atlacatl Battalion and they locked us up, the women in the houses and the men in the church. We were 1,100 people in all. The children were with the women. They kept us locked up the entire morning. At 10 or 11 a.m., we looked around and saw that they were killing the men in the church; first they machine-gunned them and then they decapitated them. I was looking out the window and said: ‘Look, they’re killing the men and they’re going to kill everyone!’ All the women began to cry and scream. The children were shocked, they didn’t understand what was happening, and the soldiers guarded the doors so that no one could leave.

At 2 p.m., they began to take the women out; they had finished killing the men. They took me away at 5 p.m. to kill me. Only a few women were still left. When they came for me I didn't want to go. They left the children locked up and they made nooses to strangle them and decapitate them. They took away the 8-month-old daughter I carried in my arms. They had their large knives and continued to make nooses. They took my 8-month-old daughter and my oldest son and took them inside, while they took me away with the other women to kill us.

'My God', I said, 'God almighty, don't let me die here. God knows we're not guilty of anything.' As we came to the place where they were going to finish us off, they lined us up to kill us. I sat down alone and moved away, hiding beneath a small bush. I covered myself with the boughs to defend myself, so they couldn't see my feet. Then I watched them machine-gunned the women to death. There were twenty women in my group and I was the last. So they killed the women lined up there and brought back another group which they killed in a shower of bullets.

The women screamed and wept: 'Don't kill us, we don't know anything, we're not involved with anyone. Why are you going to kill us?' The soldiers replied, 'Don't cry, don't scream, because the devil will come and take you away.' But they continued to kill them. I was right there beneath their feet, hiding. When they finished killing the people, they sat down nearby and said they had been sent to kill everyone, because these people were all guerrillas. They burned all the bodies and left them amidst the flames. One child cried out from the midst of the fire. Another man came and said to a soldier, 'Look, you didn't finish killing him.' So the soldier went and shot him; the child stopped crying. I was almost engulfed in flames. I was so close to the slaughter there.

Later, they said, 'They're all dead here; let's go and kill the

children.' They left, leaving a few soldiers here and there; and I looked for the moment to escape. But my children were still locked in the houses. They killed all four of my children: my nine, six and three-year-olds, and my 8-month-old daughter. My children were killed there, and my husband too. Only my parents are alive—they had already come to the refugee camp here—and my two daughters who had been saved because they lived further away.

I spent seven days and seven nights in the hills all alone, without meeting other people, without food or drink. I didn't find anyone; they had killed them all. It has to be God's will that I am still alive; God has allowed me to live so that I can make a declaration about what the Army did. Everyone was deceived. They believed they would be taken to Gotera. We too didn't believe they were going to kill us, but I saw when they were killing the people and burning the bodies of men and women. I didn't see them kill the children but I heard their screams and cries when I was still hiding."

Source: *Letter to the Church from El Salvador*, no. 137 (April 1-15, 1987), Information Service of the Pastoral Center, Central American University, San Salvador, pp. 7-8.

<特別寄稿>

日本の解放の神学を求めて II
——「貧しい人びとを選択すること」の歴史——

ホアン・M・リベラ

I 「貧しさ」および「貧しい人びと」の新解釈

「貧しい人びとを選択すること」（“option for the poor”，以降「OP」と略）は，歴史的に新しい概念でもないし，今世紀の新発見でもない。それは，伝統との「根本的な連続性」を表すと同時に，「形式的な（formal）非連続」，つまり歴史的な表現レベルでの変遷をも表す概念なのである。

「連続性」についていえば，昨今，論議の対象とされている「OP」の概念は，キリスト教の本質をなす神と人間との関係，さらには神と貧しい人びととの関係は，啓示から流れ出た歴史に深く根づいているという，あまねく支持されている認識の延長線上にある。しかし，論点はそこにはない。「OP」は，起源としては古いものであっても，絶えず新たな形で解釈しなおされて立ち現れる，貧しい人びとに対する愛の常に新しい表現である。換言すれば，「OP」は，各時代にさまざまな様相をまとして歴史に出現する「アガペ」の新たな実現なのである。

過去において，「アガペ」は時代の「しるし」に従って，「施し」，「金銭的援助」，「社会福祉」，「促進」などの形態をとったが，現代においては，「社会的，政治的な愛」という形に変わった。そこに非連続性が認められる。

拙論『日本の解放の神学を求めてI』で述べたように¹⁾，現代の貧し

さは過去の貧しさとは異なる。現代の貧しさの特徴として次の三点があげられる。①社会的、経済的貧しさ（「周辺世界」ないし収奪されている人びと）②社会的、文化的貧しさ（黒人、アメリカ先住民、女性など）③「第一世界」に出現しつつある「新しい貧しさ」（身体障害者、麻薬中毒者、老人など）である。しかし、それぞれ類型は異なっても、あらゆる貧しさには共通点がある。それは、貧しさが集合的な現象であるということ、そして、競争的な過程の産物であるということである。ラテン・アメリカの場合、貧しい人びとが国民全体の80%を占める²⁾。以前は、貧困の原因が民衆自身の対処能力の欠如に求められてきたが、解放の神学者たちが指摘するように、現代の貧しさは「自然的な」現象ではなく、「人為的に惹き起こされた」現象なのである。従って、この新たな現象に対処するために、もう一つの（alternative）プロジェクトが必要となる。それが「OP」という概念なのである。ここで、内容に触れるに先立って、「OP」の出現とその変容に注目してみたい。

Ⅱ 「OP」の出現と変遷

① メデジン会議

メデジン会議（1968年）は、第二バチカン公会議の憲章をラテン・アメリカの状況に適用することをめざした会議である。会議では「OP」という「表現」は使用されないが、「教会の貧しさ」と題された第四章に次の一文がある。

「貧しい人々への福音宣教」という主の特別な教えは、われわれを、貧しく最も恵まれない人々、理由は何であれ差別されている人々に最も実質的な優先権を与えるような資源と使徒職者の分配を行い、そうした目標を胸に抱いてすでになされつつあるイニシアティブや研究を励まし、進めるよう導くはずのものである³⁾。

表現は異なっているけれども、ここに「OP」の本質が言明されているように思われる。すなわち、教会が限られた資源と使徒職者をいかに配分するかということである。「選択」という言葉をメデジン会議は使っていないが、「選択」に伴う困難と「選択」に要求される勇気とがともに認識されていることが行間から察せられる。

② フリオ・デ・サンタ・アナ

はっきりと「OP」という表現を初めて使用したのは、プロテスタントの神学者フリオ・デ・サンタ・アナである。1970年の論文で、彼は次のように述べている。

神学が預言的な立場をとるときはいつでも、社会学的な省察を考慮しなければならぬ。同様に、聖書的な宣教 (biblical proclamation) は貧しい人びとを基本的に 選択する 方向へとわれわれを導く⁴⁾。

ここに「OP」という語が初めて使用され、その根拠が表明されている。現代の預言は盲目的でもなければ、「宗教」的でもない。現代の預言とは、社会学的な省察を考慮したうえで現代の諸状況を見極めることである。しかも、その社会学的考察はあくまで貧しい人びとを目的とする。

③ グティエレス

解放の神学において「OP」という表現を初めて用いたのはグティエレスである。彼は1972年以前にも、「被支配者を選択する (optar por el oprimido)」と表現したことがあったが⁵⁾、「貧しい人を選択する (optar por el pobre)」は、1972年にエル・エスコリアルでの会議において初めて使用された表現である⁶⁾。文脈は次の通りである。「われわれが貧しい者になりさえすれば、路傍で自然に貧しい者に出逢えるわけではない。その人に近づかなければならぬ⁷⁾」。他者に近づくということ自体が「貧しい人を選択する」ことなのである。

この「OP」は、1972年以降、解放の神学のトレード・マークとなった

が、やがてプエブラ会議によって受け入れられた後、微妙にその特徴を失っていくのである。

④ プエブラ会議

プエブラ会議（1979年）の公文書は、第二バチカン公会議と同様、妥協の産物である。会議の構成からみると、その目的は明らかに解放の神学の影響を相殺することにあつたと思われるが、解放の神学を支持する人びとの尽力で「OP」の精神は保持された⁸⁾。しかし、妥協の結果、「OP」の意味が希薄になったということも認めざるを得ない。このことは表現の曖昧さに顕著に表れているが、この点を論じる前に、公文書の構成を説明する必要がある。

④—(1) 公文書の構成

プエブラの公文書は、教皇のメッセージを除くと、五部から成り立っている。第一部はラテン・アメリカの司牧的な展望。第二部はラテン・アメリカの現実に対する神の計画。第三部はラテン・アメリカ教会における福音化の特徴であるコンミュニオンと参加。第四部はラテン・アメリカの福音化に仕える宣教の教会。そして、第五部は聖霊の導きのもとでの司牧的な選択 (option)。「OP」は第四部第一章で論じられるが、正確な表題は「貧しい人びとを優先的に選択すること」である。「優先的」という修辭語が追加されることによって、公文書において「OP」の概念が蒙った変容の意味については後述する。さらに、同章で、「若者を優先的に選択すること」というもう一つ別な優先的選択が並記されて論じられている。

④—(2) 用語の問題

プエブラ会議の公文書で次のような表現が頻用される。

“preferential option”（「優先的選択」733, 1134, 1153, 1166）。前者三節は貧しい人びとに関わるもの、第四節は若者に関わるものである。

“preferential concern”（「優先的配慮」1217, 1218）。それぞれ、貧しい人びとと若者に関わる。

“preferential attention”（「優先的注意」1142, 708）。前者は貧しい人びとに関わるが、後者は「大神学校（seminary）」に関わるものである。

“preferential love and concern”（「優先的愛と配慮」382）。貧しく恵まれない人びとが対象である。

“preferential love”（「優先的愛」643）。ふつうの（common）人びとが対象である。

“preferential but not exclusive love”（「排他的ではない優先的愛」1165）。貧しい人びとが対象である。

“preferential commitment”（「優先的参与」769）。貧しい人びとに関わる。

このほかにも、“preferential” という形容詞は2回、“priority” という名詞は8回を数える。前者（590, 1145）は家族と貧しい人びととの関連で、後者（590, 701, 711, 734, 977, 1043, 1044, 1081）は家族、福音化、福音宣教、教理、教育、指導者、コミュニケーションなどの関連で用いられている。

まず、プエブラ会議の公文書において、「OP」（“option for the poor” 貧しい人びとを選択すること）が「POP」（“preferential option for the poor” 貧しい人びとのための優先的選択）または「PNEL」（“preferential but not exclusive love” 排他的ではない優先的愛）にいい換えられたことは興味深い。確かに「PNEOP」（“preferential but not exclusive option for the poor” 排他的ではない貧しい人びとのための優先的選択）という用語そのものは使われていない。しかし、「POP」や「PNEL」には「PNEOP」への移行の可能性を感じさせるものがある。次に、“option”, “commitment”, “love”, “concern”, “attention” はそれぞれ異質の含蓄を持つ語なのである。“option” と “commitment” は実践的な行為に関わるのに対して、“love” と “concern” はとりわけ内面的な心情に関わり、“attention” は意識の一面に過ぎない心理学的な現象にとどまるからである。最後に、“priority” の多

様化によって、“preferential”の実体的な意味が失われるのではないかという危惧を感じるのである。

④—(3) プエブラ会議の公文書の解釈学

プエブラ会議の公文書にみられる曖昧さを正しく把握するために、第二バチカン公会議の解釈学を援用することができよう。ポットマイヤー(H. J. Pottmeyer)が指摘するように、公会議の憲章にみられる二つの異なる傾向の重複は、「先行の論題に何かを付け加えることによって、その論題を相対化し、新たな理解への発展を促すのである⁹⁾」。しかし、その重複を正確に理解するには、歴史的背景の認識が不可欠である。

プエブラ会議の目的は、解放の神学の影響を阻止することにあつたと思われる。このことは、とりわけ、“periti”と呼ばれる専門の神学者たちの選択方法からもうかがわれる。メデジン会議の場合、参加神学者たちは司教たちの裁量で自由に選ばれたのに対して、プエブラ会議の場合は、教皇により任命されたのである。任命された神学者たちのなかに解放の神学者(グティエレス、ポフ、エヤクリア、セグンド、ソプリノなど)は一人もいなかったが、解放の神学の批判者(ビゴなど)は数人が名を連ねていたのである。しかも、公文書(ローマ教皇庁に認可された「DO」—“Documento Oficial”)が完成するまでに、「DC」(“Documento de Consulta”「参考書」)、「DT」(“Documento de Trabajo”「草案」)、「1 R」, 「2 R」, 「3 R」(第一、第二、第三草稿)および「DF」(“Documento Final”「最終文書」)が作成されたのである。「DC」は出発点であつたと同時に、最も解放の神学に対して敵対的な立場をとった文書であつた。従って、これらの文書に表れる「OP」概念の変遷を分析することによって、最終的にどの程度まで解放の神学が認知されたかを確認することができよう。その解釈にあたり、次の規準を考慮しなければならない。①「OP」に関する表現の総括。②論争にみられる表現の変遷¹⁰⁾。①の総括については既述してあるので、②の表現の変遷について述べたい。

「選択 (option)」という表現が残ったこと自体は大きな成果である。ただ、その対象は一つだけではないし、異なった意味を持つようになった。貧しい人びとを（優先的に）選択することが貧困の解消を意味するとするなら、若者を（優先的に）選択する目的はどこにあるのだろうか。換言するなら、たとえ表現は同一であっても、内容は根本的に異なる。貧しい人びとを選択することはある種の葛藤を前提としているのに対して、若者を選択することは葛藤がなくとも可能である。「OP」が意味していたことは、何人かの司教が懸念していたように、階級闘争を含意する選択であったため、公文書は「選択」という語を残しつつも、「優先的」という形容詞を付け加え、更に対象を二重にすることによって、「選択」の尖鋭さを曖昧にしたのである。

しかしながら、公文書に一応「選択」の語が採択されたからといって、解放の神学の中心命題である「OP」に問題がなくなったわけではない。解放の神学に敵対的な意見は、後日、より一層強固な形で噴出するからである。

⑤ プエブラ会議と解放の神学

セグンド（彼の公文書批判は後述する）を除く他の主な解放の神学者たちは、プエブラ会議の公文書に対して肯定的である。彼らはプエブラ会議において解放の神学が否認されるのではないかという危惧を抱いていたので、その危惧が杞憂に終わったことに安堵したのであろう。それでも不安の影は残っている。グティエレスは、「選択」に「排他的ではなく優先的」という修辭語を追加されることによって「選択」の意味が否定されたのではないか、という見解に対して、次のように答えている¹³⁾。福音を所有していないすべての人に福音を伝えなければならない。それは神はすべての人を愛しているからである。のみならず、その伝え方が「排他的」になってしまったら、逆説的に「優先性」の困難さも解消されてしまう。さまざま人びとにとって、福音の普遍性が「優先」という特有性によって具体

化されること自体が躰^{つまづ}きである。いうまでもなく、福音はすべての人を対象にしているのだから、「神に優先されている人びと」と連帯する限り、だれでも福音の受け手となり得るのである。

当時のソプリノの反応も同様である¹²⁾。プエブラ会議の公文書が「排他的ではない優先」を表明していることは問題ではない。表現の意味するところはこうである。つまり、だれ一人教会から疎外されている者はなく、また、「選択」なしにはだれ一人教会に属する者もない、ということである。しかし、ソプリノは1985年の論文¹³⁾では、「優先的」という言葉に含まれている皮肉を指摘している。大部分の人びとが貧しい国において、彼らを「優先」することは無意味である。そのような場合、「選択」は意志によるものでもなければ、困難な識別の結果でもない。現実には否応なく押しつけられた「選択」だからである。

L. ポフによれば¹⁴⁾、プエブラ会議の「排他的ではない優先的選択」の意味は二通りに解釈できる。第一に、教会は大多数を占める人びとと連帯しなければならない。第二に、貧しい人びとの貧しさは、貧困化と収奪を惹き起こす不正の産物であるが故に、教会の連帯は不正や貧困との闘いに向けられなければならない。「貧しい人びとを選択すること」は、正義にのっとった兄弟的な社会を建設するために、不正な貧困をもたらした社会を改革することを含意しているのである。

「優先的選択」という表現に含まれる曖昧さを最も的確に指摘したのはC. ポフである¹⁵⁾。彼によれば、この形容詞は、すべての人を愛しながらも特別に貧しい人びとに愛をそそぐ、というナイーブで感傷的な選択を示唆する危険がある。一方、「排他的選択」—すなわち貧しい人びとのみを選ぶ—という表現も同様な曖昧さに陥る。貧しい人びとは他の人びとから孤立して存在するわけではない。彼らは常に他の社会集団と結ばれている。すなわち、彼らの「支援者」に対しては肯定的に、彼らの「抑圧者」に対しては否定的に結ばれているのである¹⁶⁾。それ故、排他的選択も分派

(sectaria) を生じかねない。やはり、最もふさわしい表現は「貧しい人びとを選択すること」であろう。

⑥ 『解放の神学のある局面に関する教書』

1984年のこの『教書』は、プエブラ会議の公文書にみられた「ある神学」の延長線上にあると思われる。この『教書』の解釈に着手する前に、「OP」に関わる主要箇所を引用してみたい。

⑥—(1) 解放の神学。

『解放の神学』という言葉は、まず第一に、貧しき者と抑圧の犠牲者に対する特別な関心を意味する。その結果として、正義との関わりが生まれる¹⁷⁾」。

⑥—(2) 優先的選択。

「各種の解放の神学が置かれている位置というのは、一方には『貧しき者のための優先的選択』というものがあり、これはメデジン会議の後のプエブラ会議で力強く、明確に再確認された。他方には福音をこの世の福音に還元しようとする誘惑があり、二つの立場の間にあるといえる¹⁸⁾」。

「プエブラで述べられた優先的選択には二面性があることを思い起こさなくてはならない。すなわち、貧しき者のための選択と『若者のための』選択である。概して、若者のための選択が全く黙殺されてきたことは重大である¹⁹⁾」。

「結果として、信仰、希望、愛に新しい内容が与えられる。つまり、これらがそれぞれ『歴史への忠誠』、『未来への確信』、『貧しき者のための選択』となる。これは神学的実体が空にされたというに等しい²⁰⁾」。

『『貧しき者の教会』は、その積極的な意味においては、どのような形の貧困であっても例外なく、貧しき者が優先されることを意味している。というのも、彼らは神によって優先されているからである²¹⁾」。

⑦ 『解放の神学のある局面に関する教書』に対するセグンドの対応²²⁾

前述のように、プエブラ会議の公文書に対して最も慎重な態度をとった

のは J. L. セグンドである。その慎重さは、この『教書』に際しては、悲しみと真摯さにとって代わられる。彼は、『教書』の神学が正しいのであれば、自分のいままでの神学は間違っていたことを認めなければならない、と述べているのである²³⁾。それ故、まず、ここで『教書』を吟味することから始めたい。

⑦—(1) 『教書』の構成

『教書』は二部から構成されている。神学的な意図は第一部に収められており、本稿では主として第一部を取り扱う。なお、第二部で指摘されるさまざまな「誤謬」は、第一部で認定された神学によって「裁かれた」ものであることに留意する必要がある。

第一部の六章は二グループに分類できる。奇数章（Ⅰ，Ⅱ，Ⅴ）は「正しい」解放の神学を描写し、偶数章（Ⅲ，Ⅳ，Ⅵ）は歪められた解放の神学を大胆に描写する。セグンドが指摘したように、『教書』の「正しい」解放の神学が認知されるならば、他のあらゆる解放の神学は誤った神学として否定されなければならない、ということになる。

⑦—(2) 『教書』の神学

なんらかの誤謬を正す方法は二通りある。一つは、引用しながら、その誤謬を具体的に指摘することである。もう一つは、方向性の誤りを明らかにすることである。前者の場合、引用しない限り、似たような誤謬は指摘から逃れやすい。後者の場合、一般化の危険はあるが、扱っている対象の傾向を明らかにすることはできる。ただし、同時に、自分の立場（この場合『教書』の神学）も明確にしなければならない²⁴⁾。以下に、セグンドに従って、『教書』の神学の焦点がどこにあるかを検討してみよう。

⑦—(3)—a 「正しい」解放の神学の識別

『教書』によれば、『「解放の神学」という言葉は、まず第一に、貧しい者と抑圧の犠牲者に対する特別な関心 (special concern) を意味する²⁵⁾』。または、「解放と自由という聖書的テーマと緊急を要する実践的理解とを

中心とした神学的考察を示す²⁶⁾。解放への憧れは「時のしるし」であるが故に、これを識別しなければならない、と『教書』は述べている²⁷⁾。しかし、この「識別」という語の用い方は極めて特殊であるといわざるを得ない²⁸⁾。イエスによれば（『マタイによる福音書』16・3）、「時のしるし」は識別の規準であって、識別の対象ではないからである²⁹⁾。

⑦—(3)—b 貧しい人びとに対する特別な関心

これはプエブラ会議に始まった「OP」をめぐる表現の変遷の終着点である。この表現を福音にあてはめて読むならば、「さいわい」といわれている貧しい人びとは、「神から特別に関心を持たれている人びと」ということになる。従って、「神の国」は「優先的」に彼らのものである³⁰⁾。

⑦—(3)—c 聖書の選択的な読み方

第四章で、『教書』の聖書的な背景が描かれるが、その目的は人間の内面性を強調することである。『出エジプト記』の焦点は神の民の誕生にあり³¹⁾、預言者のメッセージは解放者である神を体験することを人間に促すことであり³²⁾、貧しさは神の国にとっては「さいわい」とされる³³⁾。従って、人間の本当の—autentica—活動は、それだけに限定されないまでも、おおむね、自らの精神活動、もしくは『教書』のいう「個人の完全性」(Ⅳ, 15)へと還元されてしまうのである³⁴⁾。

⑧ 『「自由の自覚」に関する教書』

1986年の『「自由の自覚」に関する教書』は、『解放の神学のある局面に関する教書』に比べると、解放の神学に対して非常に肯定的だと思われているが、神学的な根拠にさほどの変化があるとは思えない。1984年の『教書』との関連性は、とりわけ、「貧しい人びとを優先する愛」という表現において明らかになる。

⑧—(1) 「貧しい人びとを優先する愛」

「貧困、不正な抑圧、肉体あるいは精神の病気、そして最終的には死、というように、人間の惨めさは、原罪以来自覚されるようになった、人間

の生来的な弱さのはっきりとした証拠であり、人間が救いを必要としていることのしるしです。それが、救い主キリストの慈しみを呼び、その惨めさをわが身に受け、ご自分をその兄弟たちのうち最も小さな一人と同一視させることになったのです（『マタイによる福音書』25・40, 45参照）。それ以来、貧しさにうちひしがれている人々は、特に教会にとっても優先的な愛の対象となっています。……（中略）……

教会はまた、貧しい人々を愛することによって人間の尊厳をあかします。教会の明白な主張は、人間の価値が、何を持っているかよりも、何であるかによって決まるといことです。人がどんなに貧しく、どんなに軽蔑され、排斥されても、あるいは無力な状況におかれたとしても、人間としての尊厳な破壊されないという事実を証言します。教会は、精神的にも時には物理的にも社会から排斥され、社会の一員として扱われない人々と連帯します。教会は、大人の不行跡ゆえに日の目を見ずに殺される子どもたちや見捨てられ孤独な老人たちに特別に母の愛を感じます。

貧しい人々を特に優先することは、神の恵みがある特定の人に限られているとする説あるいは派閥主義のしるしであるどころか、むしろ、教会とその使命の普遍性を示しています。貧しい人々を優先するからといってだれをも排除するわけではありません。

まさにこの理由で、教会は、こうした優先を、社会学的範疇を用いて表現できないと考えるのです。この優先を党派的な選択や闘争の原理に格下げすることになりかねなからからです³⁵⁾。

⑧—(2) 『教書』の神学

⑧—(2)—a 貧しさ

ここで描かれる「貧しさ」の概念は広義に過ぎて正確に理解しにくい。「みじめさ」はおそらく解放の神学者たちのいう「形而上学的な貧しさ」一人間の偶然性³⁶⁾に等しいものであろうが、他の貧しさとの相違がはっきりしない。『教書』が説く「形而上学的な貧しさ」への対応は「優先的

「選択」ではなく「優先的愛」である。しかし、だれもがそのみじめさを帯びているのであるから、それは「優先的選択」とは言いえない。さらに、「イエズスが、あなたたちは幸いだ、と宣言されたのは、すべてを捨て、神に信頼し、慎み深く、他人には寛大な貧しい人々でした³⁷⁾」。という一節は、現代の聖書学者には認めがたい³⁸⁾。

⑧—(2)—b 「貧しい人びとを優先的に選択すること」

この表現は否定的な言辞によって定義されている。それは、「イデオロギー的な」範疇に属するものでもなければ、「排他的選択」でもない。しかし、このような「選択」の定義こそが「自由主義」のイデオロギーに染まっているといえなくもないのである。『「自由の自覚」に関する教書』も、先の『解放の神学のある局面に関する教書』と同様に、イデオロギーの問題をマルクス主義に還元しようとする傾向があるが、セグンドが指摘するように、「他の正しい憧れと異なり、正義への憧れだけが、実践に置き換えることによって歪められたり、曖昧にされたりする危険がある、とはいえない³⁹⁾」のである。

III まとめ

「OP」の基本はイエスへの信仰にあることは拙論で既に述べた⁴⁰⁾が、その特徴は貧しく抑圧されている人びとへの「アガペ」に表れる。その両極一すなわちイエスへの信仰と貧しい人びとへの「アガペ」一を媒介するものが正義である。イエスへの信仰が神学的なレベルにあるとすれば、正義の選択は倫理的および政治的レベルにある。「貧しい人びとを選択すること」は、信仰と正義の具体的な対象化である。すなわち、正義とは、イエスと貧しい人びとを選択することをつなぐ唯一の絆なのである⁴¹⁾。

弁証法的に言えば、正義の要求は、貧しい人びと自身にも、彼らを選択する人びとにも同様に関わるものであるから、階級闘争で表明される「わ

れわれ対彼ら」という敵対の正当化は、「OP」の場合には考えられない。「OP」に「優先的な」を付加することにより、プエブラ会議の公文書も二つの教書も『『党派的』意識¹²⁾』を回避しようとしたが、そうした危惧は「OP」に対する誤解に基づいていると思われる。自分の利害に拘泥せずに貧しい人びとを選ぶ人は、正義を選び、そして、そうと意識しないとしても、イエスを選ぶのである。信仰と信仰を具体化する実践（信仰のプラクティス）とが不可分なものであるように、貧しい人びとに対する神の愛（愛の根源）と貧しい人びとが神に向ける愛（愛の応答）とは同一のものである。これが聖書を貫く愛の弁証法である。「OP」の誤解に基づく『『党派的』意識』を避けるには、「貧しさの種類」を更に詳細に検討しなければならない。経済的な貧しさや他の貧しさを、性、人種、文化、宗教、年齢などから生じる貧しさと単純に同置することはできない。後者の貧しさ（もしくは差別）は必ずしも階級と結びついていないし、生産制度の副産物ではあるにしろ、制度に直結して生み出される産物とは異なる特徴を持っている。

既に考察してきたように、最大の難点は「選択」の問題である。言葉自体がいくつかの可能性から一つを選ぶことを意味しているにもかかわらず、プエブラ会議の公文書もローマの教書も二者択一の選択を「排他的選択」として否定している。しかし、「排他的選択」といっても、選択する人の意志の志向性をさすのではなく、状況の限界性に強いられた現実的な決断をさすのである。メデジン会議の公文書が述べるように、「OP」の意図は「最も恵まれない人びとに、実質的な優先権を与えるような資源と使徒職の配分」に過ぎない。しかし、抑圧者と被抑圧者との間に利害対立が存在する以上、選択は必然的に「排他的」にならざるを得ない。抑圧者の不当な利潤は被抑圧者に還元されなければならないからである。「排他的選択」を通じて「疎外」されている人びとの側に立つ（逆説的であるが、「疎外」している人びとを「排する」ことによって）「OP」の実践は、

「疎外」ではなく、「疎外」を「疎外」しようとするプラクシスなのであるから、正しくは「包括的 (inclusive)」と呼ばれるべきものである。グティエレスが述べたように、「OP」の本質は周辺 (路傍) に横たわっている人のところに「赴く」ことにある。その人が追い出されている (疎外されている) のでなければ、そのような選択は不要であろう。しかし、ラテン・アメリカの実情が、疎外された80%の大衆と彼らを疎外している少数の特権階級とから成り立っている限り、「OP」は不可避の選択であり続けるのである。

(筆者は上智大学文学部人間学研究室助教授)

注

- 1) 「日本の解放の神学を求めて I 一解放の神学における『貧しさ』および『貧しい者』の意味」、『社会正義』紀要6, 1987年, 参照。
- 2) Pixley, J./Boff, C., *Opción por los pobres*, Madrid, 1986, p. 17.
- 3) メデジン会議の公文書Ⅲ, 9 (邦訳は関望訳, 「メデジン文書」『パチカンと解放の神学』南窓社, 1986を使用)。
- 4) Bussman, C., *Who Do You Say? Jesus Christ in Latin American Theology*, Quezon, 1985. "Whenever theology takes a prophetic stance, it has to take cognizance of sociological reflection. Similarly, the biblical proclamation leads us to a basic option for the poor."
- 5) Gutierrez, G., *Teología de la Liberación. Perspectivas*, Salamanca, 1973.
- 6) "Evangelio y Praxis de Liberación," AA. VV., *Fe Cristiana y Cambio Social en America Latina*, Salamanca, 1973, p. 234. "esto (salir al encuentro de "el otro") es lo que ocurre con la "opción por el pobre."
- 7) 注1), 116頁参照。
- 8) Ramos Regidor, J. R., *Jesús y el despertar de los oprimidos*, Salamanca, 1984, pp. 68-95.
Eagleson, J./Scharper, Ph., *Puebla and Beyond*, New York, 1979, pp. 3-43.
Equipo Seladoc, *Puebla*, Salamanca, 1981, pp. 13-126.
- 9) Pottmeyer, H. J., "Hacia una nueva fase de recepción del Vaticano II: Veinte años de hermenéutica del Concilio" Alberigo, G./Jossua, J. P., *La*

Recepción del Vaticano II, Madrid, 1987, pp. 49-67.

- 10) *Ibid.* pp. 61-62. "Pero ya la yuxtaposición constituye un progreso porque, al aportar un complemento a las tesis anteriores, las relativiza como unilaterales y señala una orientación para el desarrollo ulterior de la inteligencia de la fe... La fidelidad al Concilio exige que se asuman las dos tesis yuxtapuestas y que, mediante una reflexión teológica profunda y una praxis eclesial renovada, se trate de armonizarlas en una síntesis que nos permita avanzar."
- 11) Gutierrez, G., *La Fuerza Histórica de los Pobres*, Salamanca, 1982, pp. 169-211.
- 12) Sobrino, J., "The Significance of Puebla for the Church in Latin America," *Puebla and Beyond*, pp. 307-308.
- 13) Sobrino, J., "Lo fundamental de la Teología de la Liberación," *Proyección* 138 (1985), p. 172. "Se comprende la ironía que está implicada en esa frase que se repite tanto: opción preferencial por los pobres. Se pide que sea preferencial, que no sea exclusiva. Pero en unos países donde la inmensa mayoría son pobres apenas cabe preguntar por quienes hay que optar, porque la realidad se impone."
- 14) Boff, L., "Lectura del Documento de Puebla desde América Latina oprimida," *Puebla: El Hecho Histórico y la Significación Teológica*, Salamanca, 1979, pp. 50-82.
- 15) Boff, C., "A igreja, o poder, o povo," *Revista Eclesiástica Brasileira*, 157 (1980), pp. 11-47.
- 16) *Ibid.*, p. 39.
- 17) 『解放神学のある局面に関する教書』Ⅲ, 3 (邦訳は、大石昭夫訳, 「資料・ラッツィンガー教書」『解放神学 虚と実』荒竹出版, 1986を使用)。
- 18) 同上, Ⅳ, 5。
- 19) 同上, Ⅳ, 6。
- 20) 同上, Ⅳ, 5。
- 21) 同上, Ⅳ, 9。
- 22) Segundo, J.L., *Teología de la Liberación: Respuesta al Cardenal Ratzinger*, Madrid, 1985.
- 23) *Ibid.*, p. 27.
- 24) *Ibid.*, pp. 28-29.

- 25) 教書, III, 4。
- 26) 同上, III, 4。
- 27) 同上, I, 1。
- 28) Segundo, p. 47.
- 29) *Ibid.*
- 30) *Ibid.* p. 59.
- 31) 教書, IV, 3。
- 32) 同上, IV, 4。
- 33) 同上, IV, 9。
- 34) Segundo, p. 84.
- 35) 『自由の自覚』68 (邦訳は, ホアン・マシア訳, 『自由の自覚』カトリック中央協議会, 1987を使用)。
- 36) 「日本の解放の神学を求めて I」, 121頁。
- 37) 『自由の自覚』66。
- 38) Dupont, J., *El mensaje de Bienaventuranzas*, Estella, 1983, p. 44. "Hay manifiestamente un vínculo muy estrecho entre estas dos expresiones : pobres de espíritu y mansos. Se trata de una misma y única actitud de espíritu, la *anawah* de los monjes de Qumran, donde se unen la humildad, la mansedumbre, la paciencia, la no violencia, con la sumisión y la docilidad."
- 39) Segundo, p. 49.
- 40) 「日本の解放の神学を求めて I」。
- 41) Pixley, J./Boff, C., p., 145.
- 42) 『解放神学のある局面に関する教書』, VIII, 4。

Towards a Japanese Theology of Liberation II

—Historical Background of the Option for the Poor

Juan M. Rivera

SUMMARY

Although the term “Option for the Poor” (OP) has become the trade mark of the Theology of Liberation, the expression has undergone, in recent times, some changes that might affect not only its theological content but also its praxis. The present article is an attempt to show that the original expression of “Option for the Poor” is to be preferred to such other alternatives as “Preferential Option for the Poor,” “Preferential but not exclusive Love for the Poor” etc., and that, ultimately, it is nothing else than a way of expressing the political implications of the *traditional* christian love for the poor.

<特別寄稿>

Science, Technology and Spiritual Values —Searching for a Filipino path to Modernization*

Bienvenido F. Nebres**

In terms of the theme of this seminar, the fundamental problematic of the Philippines is that it is a country of fragmented and largely unarticulated cultures. Fr. de la Costa once wrote that the majority share only two things: our music and our faith. Some of us might add, our family-centeredness and our sense of humor. For this seminar, I have tried to focus on the question of the culture and the values that may both guide us towards modernization and also help hold the nation together amidst the centrifugal forces unleashed by modernization. I shall look at three value-systems: progress and prosperity promised by science and technology; Marxism-Leninism and its promise of greater equality and the victory of the poor and oppressed; Christianity. I propose that popular Christianity as absorbed and prayed by the majority of lowland Filipinos serves as the basic cultural matrix of the country and can guide a Filipino approach to

* This article was presented at the INTERNATIONAL SYMPOSIUM "Science, Technology and Spiritual Values," Sophia University, May 25~29, 1987, under the co-sponsorship of the United Nations University and Sophia University.

** Bienvenido F. Nebres, S. J. is Provincial, Philippine Province of the Society of Jesus.

modernization.

Science and Technology and the Dream of Progress. If there is a value-system associated with science and technology, it is probably that associated with the dream of progress. We speak of the tiger economies of Asia and the newly-industrialized countries (NICs). What drives many of our economic planners is the dream that we are finally on the runway to progress and we may be next in line for takeoff. But if we look at some areas of science and technology (medicine, agriculture, economics), we see that this is an illusion. In terms of medicine and health care we have a modernized sector: sophisticated hospitals, well-trained doctors and nurses. Heart bypasses and kidney transplants are routine in the specialized centers in Manila. At the same time, the country is not coping with thousands, perhaps millions, of Filipinos afflicted with tuberculosis, with epidemic diseases such as malaria and schistosomiasis. If we look at agriculture, the most dramatic impact of science and technology has been in the green revolution for rice. Rice output per hectare has increased dramatically. However, it has been so dependent on imported fertilizers and pesticides that it has not helped the small farmer in a substantial way. In the area of economics, the dominant direction of economic policy-makers seems to be that modernization for the Philippines means the expansion of a modernized industrial and agricultural sector. The argument for this is in terms of measures of productivity and efficiency. But experience continues to show that these modernized sectors continue to coexist with, even to create and to subsist on, an impoverished sector. Thus the export processing zones in Bataan and other places and the large export crop plantations, such as Del Monte, in Mindanao.

The conclusion is that science and technology in the Philippines is contributing to the creation of a small, isolated modernized sector, but is not modernizing the country.

Is this only a question of economics, i. e., can science and technology play a role only in a sector of society that can afford it? In which case, one has just to wait till the poorer traditional sector gets richer. Or is it also a question of culture and values, i. e., science and technology could enter into the efforts of the traditional sector and educate them towards modernization. One might argue that the pursuit of progress in terms of creating a modernized sector is succeeding simply in creating islands of prosperity, whose existence depends in part on a large, impoverished majority.

Can it be otherwise? Can science and the dream of progress uplift the poor majority? Only if it ceases to believe that modernization means creating replicas of the Western world and begins to "inculturate" itself among the people.

Two examples may illustrate the latter point. There is growing use of herbal medicines among the rural poor. But, to my knowledge, there is little scientific methodology in their use. That is, I am not aware that records are being kept: of the process used, the dosages, the various effects, etc. Health education in the rural areas, which taught people such things, could be the foundation of scientific health care in the poorer traditional sector. When I was working with some students on projects in the rural areas many years ago, a farmer once remarked on the impact of high-yield varieties of rice on his life: "I know I am harvesting more. I also know I am getting deeper in debt. And I do not know why." With some effort, we started teaching them some elementary bookkeeping. This, together with education on the relationship between the costs of inputs (seeds, fertilizers, pesticides, labor) and prices of output (rice) and the mechanisms that control these prices, could help the farmer develop more scientific farming.

The question that comes up then is what values will move the

educated scientist and leader to turn away from the temptation of mimicking the West and calling that progress and, instead, going down to his people and building progress with them.

Marxism-Leninism. Marxism-Leninism offers a path to modernization in the Philippines based on a rejection of the dehumanization and injustice created by capitalism and on the promise of a new world of equality and justice, to be ushered in by the people under the leadership of the party. It is a powerful and attractive vision and in the form it takes in various countries of Asia (the Philippines, India), of great importance to the theme of this seminar. A substantial number of dedicated Christians find in Marxism the categories and organization for a process of modernization, which will be liberating for the poor.

Moreover, Marxism-Leninism claims to be scientific (one hears that word frequently in discussions in the Philippines) and has many of the features of religion. It certainly is not scientific theory in the usual sense, since, at least in the forms it takes in the Philippines, it is quite a priori and dogmatic. It fits quite well the analysis given by Alain Besançon in his book, "Les Origines Intellectuels du Leninisme." It is a form of belief, which is akin not so much to religious faith as to Gnosticism. Like Gnosticism, salvation and liberation are for an elect, who become so by a correct knowledge and consciousness (and praxis). This knowledge is *theoretical* and provides a total insight into social reality. It is *historical* and provides a sure path for the historical process of liberation. It is *practical* and provides sure guidelines for *praxis*. Unlike Gnosticism, this knowledge is not the gift of an extraordinary enlightenment or revelation, but claims to be based on scientific knowledge and certainty. It is partly this assurance of scientific certainty (about the laws of the struggle and of history) that it gives the initiated, that provide it with its attractiveness to many idealistic people.

The question before us, however, is whether Marxism-Leninism offers an Asian or Filipino path to modernization. But, of course, this questions is not clear. What is Asian or what is Filipino? However, if what we mean is "does it respect and integrate traditional values?" the answer is probably no. In a society where trust is a linchpin of relationships, what is felt to be manipulation and doubletalk on the part of Marxist groups is a frequent source of breakdown of relationships.

What is of greater interest for our discussion is the relationship between Christians and Marxists in the Philippines and the umbrella and acceptability, which Christian leaders and Christian forms have provided Marxism-Leninism. In the opening of the Church to the world that came after Vatican II, dioceses and congregations shifted from more traditional ministries such as regular parish work and schools to social action and apostolates among the poor. In these new ministries, church workers found themselves working side by side with Marxist groups. In this process, the Church has been challenged to be on the side of the poor and to preach the Gospel to the poor. It has learned much from Marxists in terms of commitment to the struggle of the poor and to the building of a better future for them. But it can also be argued that the acceptability of forms of Marxism among many groups came from the legitimation given it by priests and religious sympathetic to it. Thus, many seminars of Marxist analysis began with biblical reflections. *Exodus* has been a favorite symbol of liberation and the *Magnificat* of the victory of the oppressed against the powerful. I presume, of course, for those who go on more deeply into dialectical and historical materialism, that the God of history who delivers us in Exodus eventually becomes History itself and the dialectical laws that govern history. And that the victory of the humble in the *Magnificat* becomes the victory of the proletariat in the class struggle. But the question

is whether there is not a folk Marxism as well and whether in the Philippines this folk Marxism with its images of Exodus and the Magnificat envisions a path of liberation which may be closer to a renewed Christianity than to Marxism. Of course, one might ask whether this may not be true of a renewed Marxism. But, in the Philippines at least, our form of Marxism-Leninism has not yet gone through its Vatican II and has not shown openness to radical change of its worldview or to accommodation with other worldviews. Nonetheless, its contribution to a focus on a liberating struggle on the side of the poor is fundamental to a genuine modernization in the country.

Christianity. I shall dwell mainly on Catholic Christianity since it is the dominant religion in the Philippines and I am most familiar with it. I shall comment on its role in modernization from two aspects: as a *social force* and as a more strictly *religious* reality.

Church as social force. In the process of social change, the Church has been both a conservative force and a force for change. For example, during the revolution against Spain in 1896, the Spanish clergy were against the revolution and for keeping unity with Spain. But in many places, it was the strong supportive role of the native clergy that kept the revolution going. In his pioneering work, *Pasyon and Revolution*, Rey Ileto argues that the worldview and motivation for social change of the peasant revolutionaries was shaped by the book called the *Pasyon*. This book is a narrative of salvation history, which centers on the passion, death, and resurrection of Jesus. It is traditionally chanted in private homes, by different groups of people during Lent. Together with novenas and other traditional devotions, it has shaped the consciousness of Christian Filipinos. Ileto argues that, while the leaders of the revolution, many of whom were educated in Europe, saw the revolution in European categories of *liberté*,

égalité, fraternité, the peasants saw it as a liberation in *passion* terms: suffering with Jesus so that they may enter into victory and triumph with him.

As with the Church in Latin America, the Church in the Philippines became more of a force for change from the late 1960's on. These efforts for change may be divided into three main groupings. The *first* approach is that of being a *prophetic voice*. Thus the many pastoral letters of the bishops, denouncing violations of human rights, urging citizens to follow their conscience, etc. The *second* is to support or align with political forces among the poor, notably with the Marxist left. In this approach, there has been much effort to integrate Christian categories with Marxist categories. In some cases, the struggle for integration is real, and Christian faith is allowed to retain its autonomy. In many others, Christian faith is instrumentalized, emptied of autonomous content, and reinterpreted in Marxist categories. (I have seen no example of the opposite happening, i. e., Marxism instrumentalized by Christianity.) The *third* approach is to develop and support social and political organizations for change, which are more explicitly compatible with a Christian orientation.

Church as religious reality. One of the enduring memories for many of us was the experience of the revolution of 1986 as a process of political change, which was also a profoundly religious experience. For myself, I used to turn to Psalm 44 ("We have heard with our ears, O God, our fathers have told us, what deeds thou didst perform in their days... Yet thou hast cast us off and abased us and hast not gone out with our armies.") to express my feeling of God being so distant from our struggles. In those February days, there was a feeling of great wonder that God had come to march with us once more. Many of us came to the realization of the power for change in the popular symbols of faith: it was in the rosary that people found strength as they

faced the tanks; they struggled to sing the "Our Father" as the soldiers came with teargas attacks. They waved rosaries and bibles to soldiers in their appeal for unity and peace. It was in rosaries and hymns and the presence of statues of our Lady that we found strength in the lonely and fearful vigils between midnight and dawn.

The EDSA experience serves to confirm much of the thesis of Rey Iletto's *Pasyon and Revolution*. There is an ethos and worldview in the majority of Christian Filipinos, shaped by the symbols and practices of popular Christianity, which can be a basis for social change. And social change in non-violent ways. During those February days, it was a big surprise to us that the spirit and methods of active non-violence caught hold so easily and so quickly. For, after all, very few had gone through the seminars on active non-violence. But looking back now, it appealed to a deep ethos of suffering with Christ so that one might triumph with Him. An ethos shaped by the Scriptures, by the *pasyon*, the novenas, the reflections on the mysteries of the rosary. It is not so surprising then that so many resonated with it and accepted it.

Linkage with base groups. More than any other worldview, Christianity penetrates all sectors of Philippine society. Traditional practices of devotion (the rosary, novenas, the chanting of the *pasyon*) cut across social classes and geographical barriers. However, there has been a tendency to see Christian practice and values as also divided into a modernized sector and a traditional sector. The first, educated in Vatican II and the Scriptures and possibly different forms of Liberation Theology, would be seen as liberating. The second, caught in traditional devotions, as conservative and keeping people docile. But Rey Iletto's analysis of the impact of *pasyon* categories as also liberating for the peasants of 1896 and the experience of the power for

courage and non-violent change in traditional devotions in EDSA of 1986 show that the power of Jesus and of the Gospels to set us free can shine through the traditional devotions and symbols as well. This can be crucial for the future path of modernization of the Philippines, as there is an urgent need for values and a worldview that can unite the modernized, Westernized sector and the traditional native sector.

A Filipino Path to Modernization. Those arguing for science and technology as the key to progress would insist that unless we improve productivity and become industrially more competitive, we cannot move forward. And this is true. With Marxism-Leninism I would also agree that we must change the structure of social relationships, the ownership and control of the means of production. And with Christian religious values that we need justice and integrity of heart. Thus, the contending paths may be seen as simply emphasizing different aspects of the task. When we were giving seminars on what was then called structural analysis in the 1970's, we tended to emphasize the economic and the political. The seminars thus defined a path to modernization akin to the Marxist model. This was because we were trying to understand the social problem and the causes of the problem. As we turned, however, to the question of moving people to become involved in the solution: to care, to be committed, to be courageous, we found ourselves struggling more and more with the question of culture and values. For most of us, we found motivation and courage in our Christian faith.

To return then to the original question: what culture and values can guide us through modernization and serve to hold the nation together in the process? I would argue that for the majority of Filipinos, it is Christianity. But not the universal Christianity in theology texts or catechisms. Rather the starting point has to be the Christianity which has been Asianized and Filipinized,

whose worldview and value-system appear in the *pasyon*, the novenas, the many devotions and practices that have shaped the consciousness of the majority of Filipinos. Among its characteristics are its emphasis on *loob*, inner integrity, integrity of spirit. As with sister Asian cultures, there is very high value on inner harmony and on harmony of relationships. This inner integrity and harmony is maintained through prayer and a virtuous life; restored, when lost, through repentance and penance. A second major characteristic is *damay*, an emphasis on *suffering with*. Good Friday is the holiest of days for the Filipino and the most revered statue is the Black Nazarene of Quiapo. It was pointed out above that the peasants in the 1896 revolution probably saw *kalayaan* or liberation in these terms: suffering with Christ, so as to rise in triumph with Him. It is this same sense of liberation and victory coming out of suffering that gave meaning and strength to the many who sat before the tanks in 1986.

Of course, as pointed out by many writers, these values can be both conservative and modernizing. The emphasis on *loob*, the inner life, can mean a personalistic, otherworldly piety. The ethos of *suffering with* can mean passivity and a religiosity, which is an opiate. But we can already see that Christianity is liberating, when it truly becomes open to the world. In part, this has to be an openness to the challenge of Marxism and of science and technology.

Openness to the Challenge of Marxism. Roger Garaudy in *Parole d'Homme* phrases the challenge this way: "The problem of the relationship between faith and socialism is a problem of mutual enrichment; the faith bringing to socialism its transcendent and prophetic dimension, preventing socialism from closing itself in self-sufficiency and opening it to a future of unending renewal; socialism bringing to the faith its historical and militant dimension, preventing faith from avoiding the world of human

struggle and obliging it to incarnate its promise and its hope, so as not to be an opiate but a leaven." The encounter with Marxism has been going on for over 20 years and has been changing Filipino Christianity, immersing it into history and a growing militancy. It is this Christianity, I believe, which can be the bearer of values towards modernization for the country.

Openness to science and technology. Less obvious to Filipino Christianity is the challenge of science and technology. It is actually the challenge of materiality, of working with earth and sea and sky and all matter and making within them a home. Making earth and sea productive so we can live and eat. Building roads and communication systems so we can communicate and dialogue. Overcoming disease, droughts, and other threats. It is the challenge of materiality. Marxism-Leninism speaks of the primacy of matter, but it actually emphasizes the primacy of social relationships. In the Philippines, it has a tendency to be *voluntarist* and does not give enough emphasis to the scientific task of coping with materiality. Christian leaders, too, place the burden of social change almost exclusively on values. There is a need then for dialogue and openness between Christianity and science and technology. I would see this dialogue beginning with the roles of the outer and the inner world in the process of modernization. The outer world of control of natural forces and of technological development, which is the domain of science and technology. The inner world of inner integrity and harmony, of grace and suffering, which is part of the ethos of Filipino Christianity. Unlike the case of dialogue with Marxism, this dialogue has hardly begun.

Openness to all sectors of society. As emphasized in the beginning, the Philippines remains a nation of fragmented and unarticulated cultures. The sense I have is that Christianity offers the best cultural matrix for us to articulate a common conscious-

ness and culture. But this Christianity will have to be open to all sectors of society. Openness to the poor and oppressed has begun with the greater efforts at inculturation. Dialogue will have to be pursued more vigorously with our Muslim brothers and sisters, with non-Christians, and among Christians of different Confessions. The thrust of this openness and dialogue will be to forge a shared culture and a shared value-system, which will be the basis for guiding the country towards modernization.

How will all this happen? How can this culture and values guide us and hold us together, and how assure openness and dialogue? As in the Scriptures, there have to be prophets and priests to interpret the signs of the times in their light. When many friends started complaining that Mr. Marcos was gone, but things were as bad as ever, I reminded them that after Exodus did not come the Promised Land. It has helped, to understand where we are, to be reminded that we may have to go through our forty years of wandering in the desert: to struggle with one another, with our leaders, with our God, and emerge from our fragmented past as a free and united people. Ultimately, the path to modernization has to be a path chosen and accepted by a people. History tells us that this path is not achieved without struggle: the people's own struggle with themselves and their weaknesses, their struggle with their leaders and with their God. In this struggle, it is the task and burden of leaders to interpret and give meaning to a people's life, to struggle to forge unity out of continuing tendencies to fragment, to work towards a common consciousness and direction. A common consciousness and direction which will ultimately be their people's path into the future.

References

Alain Besançon, *Les Intellectuels du Leninisme*, Calman-Levy, Paris, 1977, 327 pp.

Roger Garaudy, *Parole d'homme*, Robert Laffont, Paris, 1975, 265 pp.

Reynaldo Ileto, *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*, Ateneo de Manila University Press, 1979, 344 pp.

John N. Schumacher, S. J., "Recent Perspectives on the Revolution," *Philippine Studies*, Vol. 30 (1982), pp. 445-492.

科学技術と精神的価値*

—近代化へのフィリピンの道を求めて—

ビエンベニード・F・ネブレス**

本国際シンポジウム・テーマ（科学技術と精神的価値—アジアにおける近代化へのアプローチ）の観点からみると、フィリピンにとって基本的な問題は、断片的でしかもはっきりと表現されていない諸文化の国であるという点にあります。

ここでは主として、近代化へ導く指針であり、また、その過程で開放される遠心力の真只中でこの国を支える文化と価値の問題について、以下三つの価値体系の観点から考察いたします。

科学技術と進歩の夢

もし仮に科学技術と結びつく価値体系があるとすれば、多分、それは進歩の夢でありましょう。今日アジアの新興工業諸国（ニックス）の多くの経済政策立案者たちを駆り立てるものは、滑走路から離陸へと導く経済進歩の夢なのです。

しかし、現実には医療や農業や経済の分野において、科学技術の進歩の

* 本稿は、上智大学、国連大学共催の国際シンポジウム「科学技術と精神的価値—アジアにおける近代化へのアプローチ」（1987年5月25日～29日、於 上智大学）での講演である。

** イエズス会フィリピン管区管区長。

夢は、単なる幻想であったと言わなければなりません。近代的医療設備（病院、専門医、看護婦、心臓バイパス技術など）の整う首都圏マニラ地区がある反面で、いまだに幾百万もの人びとが肺疾患、マラリアをはじめとする種々の伝染病などに苦しんでいるという地方の状態があります。農業における緑の革命は、科学技術の劇的な進歩による米の増産をもたらしたところ、継続的に化学肥料や殺虫剤などの輸入に依存してきたので、小農民たちにとって十分に役立つものではなかったのです。経済についても、政策担当者たちの中心課題は、常に近代的工業や農業部門の拡大であり、そのための生産性と効率に優先順位が置かれています。近代化したバタソンの輸出加工区やミンダナオのデル・モンテに代表される輸出向け大規模作物プランテーション部門は、同時に疲弊した零細的部門と併存し、あるいは更にそれを創り出しているのです。

そこで問題は、科学技術は余裕のある社会部門の中でのみその役割を担う、という単なる経済の問題なのでしょうか。この場合、貧しい伝統的部門は豊かになるまで待たなければならぬということになります。あるいは、科学技術は伝統的部門に入ってきて、近代化へと人びとを教育するなどという文化と価値の問題でもあるのでしょうか。近代的部門を創るという意味での進歩の追求は、そこだけが繁栄する島（飛び地）を創り続けるだけであって、その近代的部門は大部分、貧困化した零細的部門の犠牲の上に依存しているとの主張があります。

では、こうした状況の逆は、あり得ないでしょうか。すなわち科学技術と進歩の夢は、いかにして貧しい大多数の人びとの生活の質を向上させることができるであろうかということです。一体どんな価値が、教育ある科学者や指導者たちを「近代化は西欧の模倣であり、進歩の夢である」という誘惑からしりぞけ、代わりに民衆までおりてきて、彼らとともに進歩を築いて行こうと促すのでしょうか。

マルクス・レーニン主義

マルクス・レーニン主義は、資本主義が生んだ不正と非人間化を拒否し、そして党の指導のもとに民衆に支援された平等と正義の新世界を約束するという信念に基づいて、フィリピンの近代化の道を提供します。それはフィリピンやインドをはじめとするアジア諸国において、独自の展開の方式で、力強く、そして、魅力ある展望を提示しているのです。かなりの数の献身的なキリスト教徒たちは、そのマルクス主義に近代化の過程で有用なカテゴリーを見出し、貧しい人びとを解放するであろうとみています。しかし、果たしてこのマルクス・レーニン主義が、アジア的もしくはフィリピン的近代化への道を提供し得るでしょうか。

大変興味ある点は、この国におけるキリスト教徒とマルクス主義者の関係、更にはキリスト教の指導者たちやキリスト教教義がマルクス・レーニン主義に示した庇護の「カサ」とその容認の度合についてでしょう。第二バチカン公会議以降カトリック教会は、貧しい人びとの真只中における司牧・社会活動に重点を移行させました。教会は貧しい人びとの側に立ち、福音宣教をする新たな挑戦の変革の過程で、マルクス・レーニン主義者たちの貧しい人びとの闘いや彼らのより良き未来の設計に対する積極的な姿勢から、多くの示唆を受けたのであります。また、マルクス・レーニン主義方式の容認の度合については、多くのグループはカトリック司祭たちの了解をとりつけていました。最近、度重なって行われるマルクス主義分析に関するセミナーは、聖書に基づく考察で始められるのです。「出エジプト記」は解放について、また、「マリアの賛歌（マグニフィカト）」は、権力者に対する抑圧された人びとの勝利について、好んで引用される象徴的箇所であります。

一方、この国のマルクス・レーニン主義はそれ自体まだ、いわゆる「第二バチカン公会議」（「刷新すること」の意味）を経験していません。それは科学的マルクス・レーニン主義ではなく、むしろ先験的であり教条的であります。

従って、それがもつ世界観の根本的変革や、他のさまざまな世界観を受け入れるまでに開かれた姿勢を示すことは、決してありませんでした。しかしながら、貧しい人びとの側に立つ解放闘争に照準をあてたその貢献は、フィリピンの真の近代化にとって根本的なものであります。

キリスト教

カトリックとしてのキリスト教（この国は大多数、カトリック教徒である）を（i）社会的勢力、（ii）信仰の現実の二つの側面からみることにします。

（i）社会的勢力としての教会は、歴史において保守的勢力でもあったし、変革の勢力でもありました。1896年の反スペイン植民地闘争の革命期には、スペイン人聖職者たちは、本国スペインとの統一を維持する理由で革命に反対する勢力でした。一方、土着のフィリピン人聖職者たちは、全国各地域において革命闘争の進行を強力に支援する役割を果たしたのです。渡欧の経験をもつ多くの革命指導者たちは、ヨーロッパ流に革命を、自由、平等、友愛の理念でとらえたが、多くの農民たちは、これを（キリストの）受難の意味で理解し、イエズスとともに身をもって苦悩を体験して、イエズスとともに勝利に与ることを確信したのです。（レイ・イレト著『受難と革命』は、農民革命家たちの社会変革の世界観と動機について、イエズスの受難、死、復活の救済の歴史の文脈で叙述している。）

ラテン・アメリカにおける教会と同様、フィリピンの教会は、1960年代末以降、ますます変革の勢力となってきています。この変革への努力の過程を大きく三つに分類することができるでしょう。①預言の声は人権蹂りんを非難し、市民の良心的行動をアピールする多くの司牧書簡に例示されている。②マルクス主義的左翼を中心とした貧しい人びとの中の政治諸勢力を支援、ないしはそれらと連けいする。このアプローチでは、しばしばキリスト教をマルクス主義のカテゴリーと統合させる努力がはらわれた。

（決してその逆は起こらなかった）③変革を求める社会的政治的諸組織を

発展させ、支援すること。（それらはキリスト教的方向づけに合致するものであった。）

(ii) 信仰の現実としての教会

1986年のエドサ通りの革命の体験は、多くのフィリピン人にとって永久に記憶に残る一つであります。それは政治的変革の経験でもあったが、すぐれて信仰的経験であったのです。そこには、社会変革の基盤である民衆のキリスト教のシンボルと実践によって形成されたキリスト教徒フィリピン人の大多数が共有するエートスや世界観が表出されています。しかもその革命は、非暴力的方法による社会変革であったのです。

基礎集団とのリンケージ（連けい）

他のいかなる世界観よりも、キリスト教ほどフィリピン社会のすべての領域に浸透しているものはありません。ところで、キリスト教の価値や実践の面においても、近代化した部門と伝統的部門に区分して見られる傾向があります。前者は第二バチカン公会議で啓発された人びとや福音書やさまざまな解放の神学の流れであり、解放するものとしてみなされます。後者は、保守的であり、従順な民衆として伝統的信仰（ロザリオの祈り、9日間の祈禱、受難の聖歌）に帰依する人びとです。1896年の農民解放に与えた「受難」の影響と1986年のカトリック信仰の伝統の中に示された勇氣と非暴力による変革の経験は、民衆を真に解放させたイエズスの力と福音の力が彼らの伝統的信仰をとおして輝くことを明示したのです。

フィリピンの近代化への道

今日、近代化（西欧化）された部門と伝統的在来部門を統合する新たな価値と世界観が要請されることこそ、まさに重要なのであります。

それは大多数のフィリピン人にとって、独特の世界観と価値体系を有するアジア化した、もしくはフィリピン化したキリスト教に求められると言えるでしょう。その特徴は、祈りによる内在的個（ロオーブ）の完全性と調和、主とともに苦しむこと（ダマイ）、主とともに勝利、解放に与るこ

と（カラヤアン）などの世界観や価値に表れています。

マルクス主義の挑戦に対して開かれた姿勢

過去20年にわたるマルクス主義との不断の出会いによって、フィリピンのキリスト教は、これまでに変化をとげてきました。このキリスト教こそこの国の近代化の価値の担い手であると、私は考えます。

科学技術に対して開かれた姿勢

フィリピンのキリスト教にとって科学技術の挑戦は、それほど容易に理解されてはいません。地や海や空をより生産的に活用することにより、生活を営み、通信をし、対話をかわし、病気や自然などの脅威を克服するという科学的役割と挑戦は、この国では任意的であり、特別な関心ははらわれてきませんでした。キリスト教指導者たちも、当然ながら社会変革の担い手として内的価値に強調点を置いてきたのです。今後はますますキリスト教と科学技術との間に開かれた対話が必要となるでしょう。近代化の過程で、外的世界（科学技術の領域）と内的世界（フィリピンのキリスト教信仰のエートス）の役割についての対話が始められるでしょう。

社会のすべての部門に対して開かれた姿勢

冒頭述べたように、フィリピンは断片的でかつ、はっきり表現されていない諸文化の国であります。しかし、共通の意識と文化を明確に表現するものとして、キリスト教が文化マトリックスのコアを提供するであろうと、私は考えます。ただし、それは、社会のすべての部門に対して開かれた姿勢をもたなければなりません。

文化的受肉（インカルチュレーション）の過程で、貧しい人びとや抑圧された人びとにその開かれた姿勢は、多大の勢力によって、実践され始めています。この国の回教徒の兄弟姉妹や非キリスト教徒やキリスト教諸宗派の人びととますます開かれた対話を積極的に推進していかなければなりません。

これらすべてがいかに可能であるか。

聖書に記されているように、時のしるしを読むべき預言者と司祭たちがいなくてはなりません。フィリピンの民衆が「マルコスが国を出ていなくなったのに、以前と変わらず、状況は悪い」などと不満を口にする時、私は彼らに「聖書にあるようにエジプト脱出の直後には、約束の地（カナン）はこなかったのだ」と、忠告してみたら彼らは、「これからも砂漠を40年間さまよいながら歩み続けなければならない」と、今日この国の置かれている状況を理解することができたのです。

いま、民衆は彼ら自身が選択して、受け容れた近代化の道を自分たちの指導者とともに、そして私たちの神とともに、断片的ではなく、共通の意識と方向に向かって闘う中で達成していかなければならないのです。究極的には、そのことが将来に向けて進み行く民衆自身の道なのです。

（抄訳・保岡孝顕）



上智大学社会正義研究所活動報告

(1987年～1988年)

I 概 要

上智大学社会正義研究所 (Institute for the Study of Social Justice, Sophia University) は、上智大学の経営母体であるイエズス会の第32回総会教令「信仰への奉仕と正義の促進」の方針に沿って、1981年4月、大学附置研究所として設立された。本研究所は、上智大学の建学理念であるキリスト教精神に基づいて、変動する世界における諸問題を社会正義の視点より学際的に研究し、その成果を教育と実践活動の用に供することを目的としている。

研究活動では、所員の専門分野からの個別研究を年1回発行の『社会正義』紀要に発表している。また上智大学学内制度を活用して所員を中心とした共同研究では、これまでに「正義」、「平和研究」、「食糧問題」、「発展途上国問題」、「難民と人権」、「解放の神学」、「カトリック社会教説と経済倫理」、「世界経済の摩擦構造」などの研究テーマを設定し、1～3年のプロジェクトとして行い、その成果をそれぞれ刊行した。海外調査研究では、本研究所の特色として実践活動を重視する点から、その活動の一つである「世界の貧しい人々に愛の手を」の会（難民、貧しい人びとへの援助協力団体で本研究所下部組織）の援助協力先を視察し、新たな協力方法をさぐるために、1981年より現在までに4回の調査研究班をアジア・アフリカ諸国に派遣してきた。

教育活動では、国内の専門家、研究者にかぎらず、国外からも、マザー・テレサ、レフ・ワレサ、ヘルデル・カマーラ、スーザン・ジョージ、サムエル・キム、グスタボ・グティエレス、サウル・メンドロビッツ、ジョン・ソプリノ各氏を招へいし、公開講演会、国際シンポジウムを開催している。特に毎年開催の国際シンポジウムでは「国際相互依存時代における人間尊重」（1981年）「アジアにおける開発と正義」（1982年）「世界の難民と人権」（1983年）「平和の挑戦」（1984年）「解放の

神学」(1985年)「現代社会と正義」(1986年)「万人に経済正義を」(1987年)をテーマとしてとりあげ、多数の熱心な参加を得た。なお1988年度は「教育問題」をテーマとする予定である。

実践活動では、「世界の貧しい人々に愛の手を」の会 (Sophia Relief Service) を研究所の下部組織として設立 (1981年5月) し、アジア・アフリカを中心とした国の援助機関に、全国からの寄付金によって現在までに総額約8千3百万円の資金協力を行ってきた。

以上、本研究所は、研究、教育、実践の各活動の推進によって、現代社会において微力ながら社会正義の促進に寄与するべく努力するものである。

Ⅱ 所員・事務局

所長	アンセルモ・マタイス	文学部教授 (人間学, 倫理学)
所員	ロジャー・ダウニィ	経済学部助教授 (アジア経済論)
	垣花秀武	理工学部教授 (核分裂・核融合, 科学哲学)
	松本栄二	文学部教授 (社会福祉論)
	緒田原涓一	経済学部教授 (国際経済学)
	大河内繁男	法学部教授 (行政学)
	渡部清	文学部教授 (哲学)
	デヴィッド・ウェッセルズ	外国語学部助教授 (国際関係論)
	山田経三	経済学部教授 (組織・リーダーシップ論)
客員研究員	エドワルド・ホルヘ・アンソレーナ	文学部非常勤講師 (人間学)
事務局	保岡孝顕	
	大竹靖	
研究所所在地	〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1	

上智大学中央図書館7階713号室

電話 03 (238) 3023・3695

Ⅲ 研究活動

1. 所員研究

昭和62年度の研究成果として、「経済と倫理」「イエズス会系学校教育の特徴〈研究ノート〉」アンセルモ・マタイス、「貧しい人びとを優先するカトリック教会」山田経三各所員の論文を本書『社会正義』紀要7にとりまとめた。

2. 学内共同研究

1) カトリック社会教説と経済倫理（昭和61年度～62年度）

研究代表者：アンセルモ・マタイス

研究分担者：エドワード・ホルヘ・アンソレーナ、ピセンテ・ボネット（文学部人間学研究室教授）、ハイメ・カスタニエダ（文学部人間学研究室教授）、ロジャー・ダウニィ、今井圭子（外国語学部国際関係副専攻助教授）、垣花秀武、松本栄二、デヴィッド・ウェッセルズ、山田経三、保岡孝顕

研究助成：昭和62年度上智大学学内共同研究助成金 650,000円

研究活動：本年は研究活動の最終年度である。原則として、月一度（第三木曜日、午後5時～7時）の予定で、前年度（61年）の成果をふまえて以下の活動を行った。

'87年5月8日「『人類共同体のために——国際債務問題の倫理的アプローチ』（教皇庁正義と平和委員会）について」アンセルモ・マタイス

'87年6月25日「南北交渉と国際経済体制——とくに日本の第三世界への援助について」川田侃（本学アメリカ・カナダ研究所所長）

'87年10月15日「モノカルチャー経済との苦闘——フィリピンとキューバの比較」今井圭子

'87年11月27日～29日「万人に経済正義を」（本研究所，国際基督教大学社会科学研究所共催，第7回国際シンポジウム）討論参加「経済生活に関するキリスト教のビジョン」ロジャー・ダウニ他。プログラムについての詳細は本書（Ⅳ教育活動 2. シンポジウム）149～151頁参照。

研究経過：前年度取り扱った米国司教団の「経済教書」のオリエンテーションを踏まえて，本年度も現代の国際経済体制の中で，第三世界がどのように位置しているかの現状分析，更に第一世界をはじめとするさまざまな経済行為主体が，どのような問題解決への政策を提示しているかについての批判的考察を引き続き行った。

結論的には，貧しい第三世界の低開発・軍事化（負の指標）の存続は，真の人間尊厳を取り戻すべく変革・民生化（正の指標）に導かれなければならない。それらの解決策（国際貿易体制，金融通貨財政，技術移転，国際機関の運営のあり方など）も究極的には，経済政治社会モラル（道徳，倫理）に立脚した追求でなければならないであろうという点にほぼ強調がおかれた研究活動であった。前述の国際シンポジウムに参加したことは，本研究活動に大変に有益であったことを付言しておく。

研究成果：今年度研究の成果を報告書に取りまとめて，刊行し，関係各位の討論の素材に資するように近く配布する予定である。

2) 世界経済の摩擦構造（昭和62年度～64年度）

研究代表者：緒田原渥一

研究分担者：ロジャー・ダウニ，浜田寿一（経済学部経済学科教授），堀坂浩太郎（外国語学部ポルトガル語学科助教授），猪口邦子（法学部国際関係法学科助教授），鬼頭宏（経済学部経済学科助教授）
山田経三

研究助成：昭和62年度上智大学学内共同研究助成金 650,000円

研究目的：今日の世界経済の特徴は，不均衡と摩擦である。それも北北間という先進国間問題，南北間という発展途上国と先進国間の問題の

二つの型に分けられる。そしてそのいずれの場合にも日本の立場は重要であり、困難である。また、経済摩擦の問題は、広く、政治、社会、そして企業や労働組合の課題、さらには文化や宗教的背景についても考えなければならない。本研究グループはこの世界経済の緊急の課題につき、広く学際的に、かつ関係諸国の地域的、歴史的特性をもふまえて研究するものである。

- 研究発表： '87年5月21日「日米欧の政策協調」緒田原滔一
'87年7月16日「米国経済の揺らぎと貿易摩擦」猪口邦子
'87年11月10日“Hoarding on the Wing,” マーチン・ブロンフェンブレナー [Martin Bronfenbrenner] (青山学院大学, デューク大学教授)
'88年3月1日「オープン・マクロ・エコノミックスの現状と展望」漆博雄 (本学経済学部講師)
'88年3月23日「日本経済における技術革新の実証分析」大西博 (本学経済学部教授)

研究成果：『学内共同研究「世界経済の摩擦構造」昭和62年度』1988年6月発行予定。

3. その他の研究会

1) 指紋押捺研究会

- '87年6月19日「指紋押捺をめぐる」栗城壽夫 (本学法学部教授)
'87年7月1日「指紋押捺をめぐる」大沼保昭 (東京大学法学部教授)
'87年7月3日「在日外国人の人権」萩野芳夫 (南山大学法学部教授)
'87年7月14日「良心による反対と不服従」ホアン・マシア (本学神学部教授)

IV 教育活動

1. 講演会

1987年4月14日 「インドシナ難民の保護—タイからの報告」

(本学中央図書館 812 会議室)

講師 石川幸子 (UNHCR タイ事務所法務官)

1987年4月24日 第四回アフリカ難民実情調査団

(本学中央図書館 921 会議室)

報告 横川和夫 (カリタス・ジャパン理事), 保岡孝顕, 渡部 清, 堀越洋一
(群馬大学学生)

1987年6月26日 「地球社会に参加する道—第三世界の開発を中心に」

(本学7号館特別会議室)

講師 チャドウィック・アルジャー [Chadwick F. Alger] (オハイオ州立大
学教授), ポール・ファン・トゥングレン [Paul van Tongeren] (オラ
ンダ, 開発協力・情報委員会 [NCO])

共催 本学国際関係研究所

1987年12月12日 「INF以降の軍縮の道筋をさぐる」

(本学中央図書館 921 会議室)

問題提起・討論

テーマ INF以降の情勢と海洋の軍事化・太平洋の非核化について

竹岡勝美 (元防衛庁官房長), 垣花秀武 (本研究所所員), 前田哲男 (軍
事評論家), 川田侃 (本学アメリカ・カナダ研究所所長)

共催 核兵器廃絶運動連帯 (代表世話人: 磯村英一, 大槻勲子, 隅谷三喜男,
伊達秋雄, 伏見康治)

1988年3月7日 「ニカラグアの民を語る—エルネスト・カルデナルの詩を通し
て」 (本学中央図書館 921 会議室)

講師 エルネスト・カルデナル [Ernesto Cardenal] (ニカラグア文化大臣,
詩人)

共催 本学イペロアメリカ研究所

2. 研修会

1987年10月23日 (金) ~25日 (日)

第一回平和教育全国研修会

(本学上智会館会議室)

共催 日本カトリック正義と平和協議会

—— プログラム ——

第1日 10月23日（金）

- 1：30p.m. 祈り，開会挨拶 相馬信夫
（日本カトリック正義と平和協議会担当司教）
- 2：00p.m. 講演1「平和教育とは」相馬信夫
- 3：30p.m. 実践報告と分かち合い1「社会科としてのとりくみ」
相本憲一（ザビエル高校教諭）
- 4：40p.m. 実践報告と分かち合い2「授業の具体的モデル」
ジーン・ファロン（メリノール女子修道会）
- 6：00p.m. 交流会

第2日 10月24日（土）

- 9：30a.m. 講演2「いま必要な平和教育」西川潤（早稲田大学教授）
- 11：00a.m. 実践報告と分かち合い3「ヒロシマ研修旅行」
横道泰郎（淳心学院教諭）
- 1：00p.m. 実践報告と分かち合い4「ミクロネシアの先生と生徒たちのとりくみ」
清水靖子（ベリス・メルセス宣教修道女会）
- 2：00p.m. 分散会

第3日 10月25日（日）

- 8：30a.m. ミサ
- 9：15a.m. 全体会
- 11：30a.m. 講演3「これからの平和教育」アンセルモ・マタイス
（本研究所所長）
- 12：20p.m. 閉会挨拶 深水正勝
（日本カトリック正義と平和協議会事務局長）
- 3：00p.m. 見学 第五福竜丸記念館

3. シンポジウム

1987年11月27日（金）～29日（日）

第7回国際シンポジウム「万人に経済正義を」

共催 国際基督教大学社会科学研究所

— プログラム —

第1日 11月27日(金)

3:00p.m. あいさつ・オリエンテーション アンセルモ・マタイス

(本研究所所長)

3:30p.m. 基調講演

「万人に経済正義を—米国カトリック司牧経済教書について」

ジェームス・ハグ [James E. Hug] (センター・オブ・コンサーン高等研究員)

「第三世界と経済正義—ラテン・アメリカを中心に」

ジョン・ソプリノ [Jon Sobrino] (セントロアメリカーナ大学教授)

第2日 11月28日(土)

10:00a.m. 分科会(1) 「経済生活に関するキリスト教のビジョン」

報告 相馬信夫(カトリック司教)

討論 酒井新二(共同通信社社長)

ロジャー・ダウニィ(本研究所所員)

司会 渡部清(本研究所所員)

1:30p.m. 分科会(2) 「特定の経済政策上の諸問題(雇用と貧困)」

報告 宮本憲一(大阪市立大学教授)

討論 小松隆二(慶応大学教授)

鈴木俊男(日本経営者団体連盟国際部長)

司会 大河内繁男(本研究所所員)

3:40p.m. 分科会(3) 「特定の経済政策上の諸問題(食糧と農業)」

報告 松岡亮(元水産庁長官)

討論 桜井誠(全国農業共同組合中央会常務)

辻井博(京都大学助教授)

司会 垣花秀武(本研究所所員)

第3日 11月29日(日)

10:00a.m. 分科会(4) 「特定の経済政策上の諸問題(相互依存の地球規模経済)」

報告 磯村尚徳(日本放送協会放送総局特別主幹)

討論 浜田寿一(上智大学教授)

小泉允雄(前日本貿易振興会経済情報部調査役)

司会 山田経三(本研究所所員)

1:30p.m. 共同の祈り

J. ソプリノ

大森元吉(国際基督教大学社会科学研究所所長)

2:30p.m. 総括討論「万人に経済正義を促進する為の私たちの選択」

討論 J. ハグ

J. ソプリノ

松井やより(朝日新聞社社会部編集委員)

杉浦英男(本田技研工業相談役)

松山昌司(南山大学社会倫理研究所教授)

司会 A. マタイス

5:00p.m. レセプション

V 実践活動

1. 「世界の貧しい人々に愛の手を」の会

上智大学は1979年12月上旬からインドシナ難民救援のため、募金活動(街頭・新宿駅前)を開始し、さらに1980年2月から同年10月まで、タイの難民キャンプに延べ152名の本学教職員・学生によるボランティアを派遣してきた。また、1981年3月22日から同年4月7日まで、A. マタイスを団長とする4名の難民キャンプ調査団が、タイ、インド、パキスタン、ケニア、ソマリアを訪れ、現地で救援活動を行っている関係者と援助協力の可能性を検討した。調査団は帰国後、学内における報告会の開催、報告書「難民調査の旅」を作成し、1981年5月に「世界の貧しい人々に愛の手を」の会が発足した。

本会は、本研究所設立と同時にこれまで本学の外事部が主管してきた難民救援活動を本研究所の実践活動のひとつとして引き継いだ。また従来の難民救援活動の全学的とりくみの精神を生かすため、本会は本学の教職員・学生ボランティア・学外のボランティアによって構成されている。なお、評論家で『人間の大地』著者の犬養道子氏には会のアドバイザー（1982年1月より）として協力を得ている。

- 1) 募金協力者 約 850 名
- 2) 募金総額 88,487,775円（1981年5月～1988年2月）
- 3) 援助協力先

① パキスタン

- カリタス・パキスタン

ベジャワルのアフガン難民のために、テント、医療品、食糧、教材等の援助を行った（1981年～83年）。援助金額 5,990,750円

- 聖ミカエル・カトリック教会

ベジャワルの貧しいキリスト教徒のために、住宅建設資金の援助を行っている。援助金額 2,023,050円

- アフガン難民救済連合

ベジャワルのアフガン難民のために、小麦粉、米、食用油、紅茶、綿等の援助を行った（1982年）。援助金額 2,312,300円

② インド

- ムザファプル・カトリック教会（ビハール州）

バングラデシュ難民および清掃業者の子弟のための学校への資金援助を行った（1983年～84年）。援助金額 2,107,350円

- デディアパダ社会奉仕協会（グジャラート州）

貧困に苦しむアディバシ族の子どもたちのために教育活動等を行っている。援助金額 4,759,800円

- NAYEE AASHA（ウッタル・プラデーシュ州）

ハンセン氏病患者のため施設に対する援助を行っている。援助金額 1,245,400円

- 聖心会

貧困に苦しむグジャール族の子どもたちのために教育活動等を行っている。

援助金額 1,869,050円

- ドン・ボスコ開発センター

農村の総合的な開発のため、小型ダム、豚小屋等の建設を行っている。

援助金額 1,025,717円

- ③ ベトナムの医療品援助。援助金額 1,448,050円

- ④ フィリピン

- イグナチオ司牧センター（マニラ）

失業者のための裁縫プロジェクトに資金援助を行った（1986年）。

援助金額 190,627円

- 聖ドミニコ宣教修道女会

成人のための職業学校、学校に行けない子どもたちのための教育を行っている。援助金額 1,064,525円

- ⑤ ケニア

- カトリック救済事業団（Catholic Relief Service）

トゥルカナ地方のカクマ、マルサビット等で井戸掘り活動、病院への木ポンプ設置、マルサビット飢餓遊牧民51世帯へ「自立のための家畜貸与」プロジェクトに1981年～84年まで援助を行った。援助金額 7,378,650円

- マリア医療援助会

トゥルカナ地方のカクマで、貧しい子どもたちのための小学校の教室建設、奨学金の援助等を行っている。援助金額 8,209,300円

- ブンゴマ教区

地域開発のために給水プロジェクトに取り組んでいる。

援助金額 543,200円

- ⑥ ソマリア

- カリタス・ソマリア

コリオーレのエチオピア人難民キャンプでの食糧援助、浅井戸ポンプ・プロジェクトおよび難民とソマリアの貧しい人びとのために総合病院建設を行っている。援助金額 18,945,174円

⑦ エチオピア

- イエズス会救済事業 (Jesuit Relief Service)

1982年より南部シダモ州ゴザで飢餓難民のための巡回保健医療活動を行っている。さらに1985年より北部被災民の再移住地である南西諸州での緊急医療を実施している。援助金額 14,075,560円

⑧ スーダン

- スーダン・エイドなど

ゲダレフのタワワ・キャンプで、エチオピア難民を対象に自立化のための職業訓練等を行っている。また、ゲダレフ地域のカトリック教会はエチオピア難民のためのアラビア語講習を開いている。南部ジュバでは貧しい子どもたち、難民のための教育を行っている。援助金額 4,970,663円

⑨ タンザニア

- イエズス会

無医村に診療所を建設し、医療活動だけでなく、生活全般の相談、指導を行っている。援助金額 435,750円

- 聖十字架女子修道会

未就学者のための教育活動を行っている。援助金額 717,500円

⑩ ザンビア

- アンゴラ難民センター

難民のために教育活動を行っている。援助金額 152,650円

⑪ モザンビーク

- リシंगा・カトリック教会

飢餓難民のための救援物資の配布等を行っている。本会からは物資運搬のためのジープを他の援助団体と協力して送付した。援助金額 1,000,000円

⑫ メキシコ

- メキシコシティ聖家族教会

地震の被災者のための援助活動を行った。援助金額 1,180,000円

⑬ コロンビア

- イエズス会

火山噴火の被災者のための援助活動を行った。援助金額 1,000,000円

⑭ エクアドル

・サレジオ会

インディオの文化的意識をまもるための教材等の作成資金に協力した。

援助金額 544,320円

4) 他の難民救援団体との交流

難民救援連絡会（難民救援にたずさわる19団体が参加）に加盟し、2カ月に1回の例会に参加している。

5) 学内外での募金活動

'87年10月15日～16日 チャリティーバザー（上智大学）収益金 173,522円

'87年12月12日 街頭募金（JR新宿駅西口）収益金 119,917円

6) ニュース・レターの発行

会の活動は年2回「世界の貧しい人々に愛の手を」を発行し、寄付協力者への報告、難民救援へのアピールを行っている。

7) 募金の受付は――

口座名義 「世界の貧しい人々に愛の手を」の会

郵便振替口座 東京 8-86078

銀行口座（普通預金） 太陽神戸銀行麴町支店 3090766

第一勧業銀行四谷支店 1310474

VI 出版活動

1. 所員研究の成果

『社会正義』紀要1, 上智大学社会正義研究所, 1982年3月

「平和と正義の実現のために」柳瀬睦男, 「ヨハネ・パウロ2世の社会教説」アンセルモ・マタイス, 「人間の顔をもつ国際秩序」高野雄一, 「マス・メディアと社会正義―フィリピンの場合を中心に」武市英雄, 「所有についてのカトリック思想」ブルクハルト・ヴェクハウス, 「新回勅『労働』に基づく経営理念」山田経三, “Toward a Global Spirituality,” Patricia Mische, 活動報

告 1981-82

『社会正義』紀要2, 上智大学社会正義研究所, 1983年3月

『正義』に関する一考察」A. マタイス, 「コミュニケーションと民衆参加」エドワード・ホルヘ・アンソレーナ, 「南北間の情報の流れ」武市英雄, 「働きすぎなのか?」B. ヴェクハウス, 「アジアにおける開発と人権—アジア隣人からの挑戦と日本人の責任」山田経三, 「難民救援活動のあり方—オーストリアと西ドイツ両国の『カリタス』の場合」渡部清, “The Impact of the Nuclear Age on Public Health,” Rosalie Bertell, 活動報告 1982-83

『社会正義』紀要3, 上智大学社会正義研究所, 1984年3月

「社会問題に関するカトリック教会の考え方」A. マタイス, 「貧しい人びとの住宅に関する財政問題について」E. J. アンソレーナ, 「新しい技術の導入と労働組合の力」B. ヴェクハウス, “The Japanese TNCs and the Transfer of Technology to Asian Developing Countries,” Keizō Yamada, “The Role of Japan in the Third World,” Helder Camara, 「難民の歴史と世界の対応」ディーター・ショルツ, 「経済危機に関する倫理的省察(要約)」カナダ・カトリック司教協議会社会問題司教委員会, 活動報告 1983-84

『社会正義』紀要4, 上智大学社会正義研究所, 1985年3月

「発展途上国との協力についての提言」垣花秀武, 「現代世界における解放の神学」山田経三, 「権威主義体制の一考察—フィリピンの場合: マルコスの実験」保岡孝頭, 「平和教育の試み」A. マタイス, 「解放の神学—グスタボ・グティエレスの著書をふまえて」山田経三, 「フィリピン社会と教会の役割」フェデリコ・エスカレル, “The Challenge of Peace—What does it say? What does it mean?” Peter J. Henriot, 「米国カトリック司教団経済教書第一次草案(要約)」, 活動報告 1984-85

『社会正義』紀要5, 上智大学社会正義研究所, 1986年3月

「現代における『神の国』とは」A. マタイス, 「カトリック教会の社会教説にみる人権と社会正義」山田経三, 「日本におけるインドシナ難民の定住状況と今後の課題」保岡孝頭, 「日本における“開発コミュニケーション”—歴史的な意味合いと今日の課題」武市英雄, 「アジアの農村開発の理念と実践—ス

リランカのサルボダヤ運動」A. T. アリヤラトネ, 「今日のイエズス会の大学」ペーター・ハンス・コルヴェンバッハ, “Speaking about God,” Gustavo Gutierrez, 活動報告 1981-86

『社会正義』紀要6, 上智大学社会正義研究所, 1987年3月

「低所得者層の住宅と経済開発の関係について」E. J. アンソレーナ, 「解放の神学の先進諸国への挑戦—現代社会における福音宣教」山田経三, “Principles of Science and Technology Cooperation in Asia,” Hidetake Kaki-hana, “Work in the Modern World—Towards a Theology of Work,” Keizō Yamada, 「フィリピン民衆の選択—フィリピン二月革命とアキノ新政権」ホアキン・ベルナス, 「コミュニケーション・文化・宗教—フィリピンの経験」ハイメ・L・シン, 「日本の解放の神学を求めてⅠ—解放の神学における『貧しさ』および『貧しい者』の意味」ホアン・M・リベラ, 活動報告1986-87

『社会正義』紀要7(本書), 上智大学社会正義研究所, 1988年3月

「経済と倫理」A. マタイス, 「貧しい人びとを優先するカトリック教会」山田経三, 「イエズス会系学校教育の特徴<研究ノート>」A. マタイス, 「第三世界における貧困と貧しい人びとへの選択—ラテン・アメリカを中心に」ジョン・ソプリノ, 「日本の解放の神学を求めてⅡ—『貧しい人びとを選択すること』の歴史」J. M. リベラ, “Science, Technology and Spiritual Values: Searching for a Filipino Path to Modernization,” Bienvenido F. Nebres, 活動報告 1987-88

2. 学内共同研究の成果

1) 学内共同研究「正義」班

『学内共同研究「正義」報告書—昭和54年度』上智大学学内共同研究「正義」班, 1980年4月

『学内共同研究「正義」報告書—昭和55年度』上智大学学内共同研究「正義」班, 1981年11月

『学内共同研究「正義」報告書—昭和56年度』上智大学学内共同研究「正義」班, 1982年5月

2) 学内共同研究「平和研究」班

『学内共同研究「平和研究」報告書—昭和57年度』上智大学学内共同研究「平和研究」班, 1983年7月

『学内共同研究「平和研究」報告書—昭和58年度』上智大学学内共同研究「平和研究」班, 1984年5月

『学内共同研究「平和研究—難民と人権」報告書—昭和59年度』上智大学学内共同研究「平和研究」班, 1985年10月

A. マタイス『現代カトリック教会の平和論』上智大学社会正義研究所, 1982年10月, 1983年1月重版, 1986年10月第三版

アメリカ・カトリック司教協議会著, A. マタイス, 片平博共訳『平和の挑戦—戦争と平和に関する教書』中央出版社, 1983年11月

『ヒロシマ・ナガサキ平和学習の旅』上智大学学内共同研究「平和研究」班, 1983年10月

3) 学内共同研究「食糧問題」班

『学内共同研究「食糧問題」報告書—昭和57年度』上智大学学内共同研究「食糧問題」班, 1983年3月

『学内共同研究「食糧問題」報告書—昭和58年度』上智大学学内共同研究「食糧問題」班, 1984年3月

4) 学内共同研究「発展途上国問題」班

『学内共同研究「発展途上国の経済・社会開発の諸問題」報告書1—昭和59年度』上智大学学内共同研究「発展途上国問題」班, 1985年3月

『学内共同研究「発展途上国の経済・社会開発の諸問題」報告書2—昭和60年度』上智大学学内共同研究「発展途上国問題」班, 1986年3月

『学内共同研究「発展途上国の経済・社会開発の諸問題」報告書3—昭和61年度』上智大学学内共同研究「発展途上国問題」班, 1987年3月

5) 学内共同研究「解放の神学」班

『学内共同研究「解放の神学」報告書—1985年度』上智大学学内共同研究「解放の神学」班, 1986年7月

6) 学内共同研究「カトリック社会教説と経済倫理」班

『学内共同研究「カトリック社会教説と経済倫理」報告書—1986年度』上智大学学内共同研究「カトリック社会教説と経済倫理」班, 1987年6月

『学内共同研究「カトリック社会教説と経済倫理」報告書—1987年度』上智大学学内共同研究「カトリック社会教説と経済倫理」班, 1988年5月

アメリカ・カトリック司教協議会著, A. マタイス, 片平博, 保岡孝顕共訳『万人に経済正義を』中央出版社, 1988年6月発行予定

7) 学内共同研究「世界経済の摩擦構造」班

『学内共同研究「世界経済の摩擦構造」報告書—1987年度』上智大学学内共同研究「世界経済の摩擦構造」班, 1988年3月

3. 海外調査研究の成果

『アジア・アフリカ難民の実情—上智大学, カリタス・ジャパン合同アジア・アフリカ難民現地調査報告』上智大学社会正義研究所, 1983年6月

『1984-85 アフリカ難民の実情—上智大学アフリカ難民現地調査報告』上智大学社会正義研究所, 1985年5月

『アフリカ難民の実情—上智大学, カリタス・ジャパン合同アフリカ難民現地調査報告』上智大学社会正義研究所, 1987年7月

4. 講演会のとりまとめ

『マザー・テレサを囲んで—Dialogue With Mother Teresa』上智大学社会正義研究所, 1981年10月

『ソリダノチ〔連帯〕のワレサ委員長を囲んで』上智大学社会正義研究所, 1981年10月

5. シンポジウムの成果

『人間尊重の世界秩序をめざして』上智大学社会正義研究所, 1982年6月

基調講演：地球化時代の変革, 国家安全保障の拘束服, 世界秩序の推進に対する大学の役割, 世界秩序にむけての戦略, 地球的精神性をめざして

シンポジウム：日本の安全保障, 東アジア世界の現状と展望, 地球社会化教育, 国際秩序のあるべき姿

隅谷三喜男, A. マタイス編『アジアの開発と民衆』YMCA 出版, 1983年11月

基調講演：近代化の再検討から内発的發展へ, アジアの経済発展と日本

分科会：韓国報告—開発にたいする民衆の声，フィリピン報告—日系企業進出とフィリピン社会，インドネシア報告—インドネシアにおける開発と正義，インド報告—人工・食糧・開発，総括討論：アジアの開発と日本—今後のかかわり方

緒方貞子，A. マタイス編『世界の難民』明石書店，1984年12月

基調講演：難民の歴史と世界の対応，難民の人権—日本の対応

分科会：アフリカ難民—救援活動の現場，アフガニスタン難民—国を離れた350万人の希望と苦悩，インドシナ難民—ボート・ピープルとランド・ピープル，日本国内のインドシナ難民—定住促進にむけて，総括討論：世界の難民と人権—私たちの自覚と連帯を求めて

関 寛治，A. マタイス編『平和のメッセージ』明石書店，1985年11月

基調講演：『平和の挑戦』—それは何を語っているか，平和教書と世界秩序，

分科会：核の脅威，軍需産業・開発，アームズコントロールと軍縮，日本の平和問題，総括討論：平和の挑戦—私たちの役割

G. グティエレス，A. マタイス編『解放の神学』明石書店，1986年11月

基調講演：『解放の神学』—神について語ること，解放の神学はアジアの教会で可能か，分科会：聖書における解放，バチカンのとる Option for the poor 南米における解放の神学，アジアにおける解放の神学，総括討論：解放の神学と私たち

稲垣良典，A. マタイス編『現代社会と正義』明石書店，1987年11月

基調講演：正義とは何か，正義と平和を求めて—フィリピンの場合，特別講演：正義と平和の世界秩序を求めて—世界の飢餓問題，分科会：西欧における正義，日本における正義，国家と正義，富の生産・分配の正義，総括討論：正義の促進のために—私たちの選択

6. 資料

- 1) 『国際相互依存時代における人間尊重』上智大学社会正義研究所，1981年10月〔第1回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
- 2) 『アジアにおける開発と正義』上智大学社会正義研究所，1982年10月〔第2回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕

- 3) 『世界の難民と人権』上智大学社会正義研究所, 1983年12月〔第3回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
 - 4) 『平和の挑戦』上智大学社会正義研究所, 1984年12月〔第4回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
 - 5) 『解放の神学』上智大学社会正義研究所, 1985年11月〔第5回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
 - 6) 『現代社会と正義』上智大学社会正義研究所, 1986年11月〔第6回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
 - 7) 『万人に経済正義を』上智大学社会正義研究所, 1987年11月〔第7回国際シンポジウムの英西文邦訳資料〕
 - 8) 『難民調査の旅』上智大学難民調査団, 1981年4月〔1981年3月～4月に実施された調査の成果〕
 - 9) スライド『難民調査の旅』上智大学難民調査団, 1981年5月
 - 10) スライド『アジア・アフリカ難民の実情』上智大学, カリタス・ジャパン合同アジア・アフリカ難民調査団, 1983年6月〔1983年2月～4月に実施された調査の成果〕(貸出可)
 - 11) スライド『第3回アフリカ難民現地実情調査』上智大学難民調査団, 1985年5月〔1984年12月～1985年1月に実施された調査の成果〕
 - 12) パネル アジア・アフリカ難民の実情を伝えるもの(貸出可)
7. その他の出版物
- 1) A. マタイス『地球社会をめざす教育』中央出版社, 1984年7月
 - 2) A. マタイス『地球社会をめざす教会』中央出版社, 1985年5月
 - 3) 相馬信夫, 酒井新二, A. マタイス『日本にとって「解放の神学」とは』中央出版社, 1986年9月
 - 4) 保岡孝顕『鉄の男ワレサー連帯の精神は死なず』中央出版社, 1984年8月
 - 5) 保岡孝顕『難民と私たち』中央出版社, 1987年10月
 - 6) パンフレット『上智大学社会正義研究所』1981年10月
 - 7) 英文パンフレット “Institute for the Study of Social Justice, Sophia University” 1984年3月, 1985年3月, 1986年3月, 1987年3月, 1988年3月

- 8) ニューズ・レター『世界の貧しい人々に愛の手を』, 創刊号(1981年6月), 第2号(1981年12月), 第3号(1982年6月), 第4号(1982年12月), 第5号(1983年6月), 第6号特集—国際シンポジウム「世界の難民と人権」(1984年2月), 第7号(1984年6月), 第8号(1985年2月), 第9号(1985年6月), 第10号(1985年12月), 第11号(1986年6月), 第12号(1986年12月), 第13号(1987年6月), 第14号(1987年12月) [本研究所気付, 「世界の貧しい人々に愛の手を」の会発行, 年2回]
- 9) アメリカ・カトリック司教協議会著, A. マタイス, F. ハクシャ, 片平博共訳『マルクス主義共産主義に関する教書』上智大学社会正義研究所, 1984年8月

INSTITUTE FOR THE STUDY OF SOCIAL JUSTICE (ISSJ)

I ORIGIN AND AIM

ISSJ was established at Sophia University (Jesuit Univ.) in 1981. Its purpose is to investigate the conditions of social justice in the domestic and international arena and to contribute to the promotion of social justice, peace and development of humanity based on interdisciplinary efforts. The creation of ISSJ was a prompt response to the Decree 4 (the promotion of justice in the name of the Gospel) of the thirty-second General Congregation of the Society of Jesus (1975).

The Institute emphasizes the need for wider support and cooperation from various research institutions both at home and abroad in pursuit of this objective. In accordance with this purpose, the Institute sets up research projects on justice issues.

One of the most important projects of the Institute is its annual international symposium on peace, justice and development issues.

Another purpose of the Institute is to find a relevant relationship between research and teaching. Since the staff members of the ISSJ are faculty members of Sophia University, they teach in their respective specialities. So, ideas and insights originating from research projects being conducted by the Institute also influence students through their classes.

Results of research projects of the Institute are published annually. One of the main publications is called *Shakai Seigi*=Social Justice.

II ADMINISTRATION AND STAFF

Director

Anselmo MATAIX (Professor, Philosophical Anthropology, Ethics)

Staff Members

Roger DOWNEY (Associate Professor, Economics, Social Accounting)

Hidetake KAKIHANA (Professor, Nuclear Fission and Fusion)

Eiji MATSUMOTO (Professor, Social Welfare)

Ken'ichi ODAWARA (Professor, International Economics)

Shigeo OHKŌCHI (Professor, Public Administration)

Kiyoshi WATABE (Professor, Philosophy)

David WESSELS (Associate Professor, Political Science)

Keizō YAMADA (Professor, Management)

Visiting Researcher

Eduardo Jorge ANZORENA (Lecturer, Philosophical Anthropology)

Administration

Takaaki YASUOKA

Yasushi OHTAKE

Location

The Institute is located at Sophia University (No. 713, 7th Floor of the Central Library Building), 7-1, Kioi-chō, Chiyoda-ku, Tokyo 102, Japan, Tel. 03-238-3023, 3695.

III ACTIVITIES

The activities of the Institute are organized in four categories: A-Research, B-Symposia, Seminars and Public Lectures, C-Action Programs and D-Publications.

A-Research

An interdisciplinary research is carried out in the form of intra-

campus research group financed by Sophia University.

Katorikku Shakai Kyōsetsu to Keizai Rinri=Catholic Social Teachings and Economic Ethics

Organized by Professor Amselmo Mataix. This group carried out research in the following areas: international debt crisis (based on the Pontifical Justice and Peace Commission's document titled "At the Service of the Human Community: An Ethical Approach to the International Debt Question"); Japan's Economic Cooperation; the Struggles with Monoculture—A Comparative Study between Cuba and the Philippines; Economic Justice (based on the reading of the US Pastoral Letter *Economic Justice for All*). This group's research focused primarily on structural injustice in the world political economy using an interdisciplinary which took account of ethics, economics, social welfare, international relations and natural science.

Research Members: Eduardo J. Anzorena, Lecturer, Philosophical Anthropology; Vicente Bonet, Professor, Philosophical Anthropology; Jaime Castañeda, Professor, Political Philosophy; Roger Downey, Associate Professor, Economics; Keiko Imai, Associate Professor, Development Economics; Hidetake Kakihana, Professor, Nuclear Fission and Fusion; Eiji Matsumoto, Professor, Social Welfare; David Wessels, Associate Professor, Political Science; Keizō Yamada, Professor, Management; Takaaki Yasuoka, ISSJ.
Sekai Keizai no Masatsu Kōzō=The Structure of Friction in the World Economy

Organized by Professor Ken'ichi Odawara. This group carried out research activities from 1987-88 period in the following areas; Policy Coordination among Japan, US and Europe; the stumbling US Economy and Trade Friction; Hoarding on the Wing; Survey on the Open Macro-economics. An interdisciplinary approach from international politics, management, economics was made to investigate the world economic conditions which generate frictions in

international political economy.

Research members: Roger Downey, Associate Professor, Economics; Toshikazu Hamada, Professor, International Economics; Kōtarō Horisaka, Associate Professor, Brazilian Economy; Kuniko Inoguchi, Associate Professor, International Politics, Hiroshi Kitō, Associate Professor, Economic History; Keizō Yamada, Professor, Management.

Shimon Ōnatsu Kenkyū=Fingerprinting in Japan's Alien Registration Law

The president of the University requested ISSJ to conduct a special study on the background and implications of the controversial issue of fingerprinting aliens in Japan.

Speakers included experts in international law, constitutional law, ethics, theology and political philosophy. An interim report was submitted to the president of the University.

Research members: Anselmo Mataix, Director of ISSJ, Eduardo J. Anzorena, Hidetake Kakihana, Eiji Matsumoto, Kiyoshi Watabe, Keizō Yamada (ISSJ members); Vicente Bonet, Professor, Philosophical Anthropology; Jaime Castañeda, Professor, Political Philosophy; Hisao Kuriki, Professor, Constitutional Law; Jose Llompart, Professor, Legal Philosophy; Juan Masiá, Professor, Theology; Tomotarō Nakamura, Professor, Philosophical Anthropology; Adolfo Nicolas, Associate Professor, Theology; Masao Ohki, Professor, Comparative Law; Juan M. Rivera, Associate Professor, Philosophical Anthropology.

B-Symposia, Seminars and Public Lectures

• **Symposia**

The 7th International Symposium

On 27 November, 1987, the Institute held the 7th International Symposium in cooperation with the Social Science Institute of International Christian University on the theme of Economic Justice for All. The following is the programme.

The 1st Day, Nov. 27 (Fri.)

Opening

ORIENTATION: Anselmo Mataix (Director, ISSJ)

KEYNOTE-LECTURES "Discerning Liberation and Judgement: An Inquiry of the US Pastoral Letter - Economic Justice for All," James Hug, SJ (Center of Concern, USA); "The Poverty in the Third World and the Option for the Poor," Jon Sobrino, SJ (Professor, Centro Americana University, El Salvador)

The 2nd Day, Nov. 28 (Sat.)

WORKSHOP (1) "Christian Vision of Economic Life," Nobuo Sōma (Catholic Bishop, Nagoya); Comment: Shinji Sakai (President, Kyodo News Service); Roger Downey, (Sophia Univ.)

WORKSHOP (2) "Selected Economic Policy Issues: Employment and Poverty," Ken'ichi Miyamoto (Professor, Osaka City Univ.); Comment: Ryūji Komatsu (Keio Univ.); Toshio Suzuki (Japan Federation of Employers' Associations)

WORKSHOP (3) "Food and Agriculture," Makoto Matsuoka (Ex-Director-General of Fisheries Agency); Comment: Makoto Sakurai (Central Cooperative College); Hiroshi Tsujii (Kyoto Univ.)

The 3rd Day, Nov. 29 (Sun.)

WORKSHOP (4) "Global Economy in the Age of Interdependence," Hisanori Isomura (NHK=Japan Broadcasting Corporation); Comment: Toshikazu Hamada (Sophia Univ.); Masao Koizumi (Ex-Japan External Trade Organization)

PRAYER: Jon Sobrino, SJ; Motoyoshi Ohmori (Director of Social Science Institute, International Christian Univ.)

PANEL DISCUSSION "Promotion of the Economic Justice for All and Our Role," J. E. Hug, SJ; J. Sobrino, SJ; Yayori Matsui (The Asahi Shimbun); Hideo Sugiura (Honda Motor Co. Ltd.); Masashi Matsuyama (Nanzan Univ.)

Chairperson: A. Mataix

• **Seminars**

(1) On 23 October, 1987, the Institute held the 1st national seminar on the theme of Peace Education in co-operation with the Japanese Catholic Council for Justice and Peace. The following is the programme.

The 1st Day, Oct. 23 (Fri.)

LECTURE: "The Meaning of Peace Education," Nobuo Sōma (President, Japanese Catholic Council for Justice and Peace)

REPORTS: "Peace Education as a subject of Social Studies," Ken'ichi Aimoto (St. Xavier High School); Jean Fallon (Maryknoll Sisters of St. Dominic)

The 2nd Day, Oct. 24 (Sat.)

LECTURE: "We urge Peace Education, now," Jun Nishikawa (Professor, Waseda Univ.)

REPORTS: "Peace Tour to Hiroshima," Yasuo Yokomichi (Junshingakuin High School); "My Exposure with teachers and pupils in Micronesia," Yasuko Shimizu (Mercedarian Missionaries of Berriz); Group Discussion.

The 3rd Day, Oct. 25 (Sun.)

LECTURE: "Peace Education for Tomorrow," Anselmo Mataix (Director, ISSJ); Visit to the Peace Memorial - Daigo Fukuryūmaru, Yumenoshima, Tokyo.

(2) On 12 December, 1987, the Institute held a Panel Discussion in co-operation with Kakuheiki Haizetsu Undō Rentai = Solidarity Movement for the Abolition of Nuclear Weapons on the theme of demilitarization and denuclearization of the Pacific Ocean. The following is the programme.

OPENING ADDRESS: A. Mataix (Director, ISSJ)

PANEL DISCUSSION: Panelists: Katsumi Takeoka (Ex-Defence Agency), Hidetake Kakihana (Professor of Physics, Sophia Univ.), Tetsuo Maeda (Critics on Military Affairs), Tadashi Kawata (Director, Institute of American and Canadian Studies, Sophia Univ.)

• Public Lectures

(1) "Protection of the Indochinese Refugees-the case of Thailand," Sachiko Ishikawa (UNHCR, Bangkok) 14 April, 1987.

(2) "Field Reports-the refugee situation in Sudan and Somalia and the rehabilitation programmes of the Jesuit Refugee Service in Ethiopia," Kazuo Yokokawa (Kyodo News Service), Kiyoshi Watabe (ISSJ), Takaaki Yasuoka (ISSJ) and Yōichi Horikoshi (Medical Student) 24 April, 1987.

(3) "A Way to participation in the Global Society-with a consideration of development in the Third World," Chadwick F. Alger (Professor, Ohio State Univ., USA), Paul van Tongeren (NCO, Holland) 26 June, 1987.

(4) "The Nicaraguan People through Poems of Ernesto Cardenal," Rev. Ernesto Cardenal (Minister of Culture, Nicaragua) 7 March, 1988.

C-Action Programs

The Sophia Relief Service was established in May 1981 within the Institute for the Study of Social Justice.

The Sophia Relief Service is an organization made up of the Japanese benefactors who are contributing money to the refugees and displaced people in the world. Funds are occasionally raised through charity shows, bazaars and symposia. The standing committee directs the periodic disbursement of such funds as collected, to the respective relief organizations engaging in relief activities.

Every other year, field research on refugees in Pakistan, Kenya, Uganda, Ethiopia, Sudan and Somalia, and Tanzania will be conducted by the members of ISSJ and the volunteers. The reports of such studies help evaluate the effective utilization of donations from the general public for education, shelter, hospital, medicare and food for the needy people in the region.

Films and slide presentations based on those trips have been

utilized effectively by different schools and organizations throughout Japan. Panels, posters and other audio-visual aids are available for any individual or organization who wishes to use them.

Figures of Donations and Disbursement (As of February 1988)
Sophia Relief Service has received ¥88,487,775
from May 1981 up to now.

Disbursement: Pakistan	¥10,326,100 ;	Sudan	¥4,970,663
India	¥11,007,317 ;	Tanzania	¥1,153,250
Vietnam	¥1,448,050 ;	Zambia	¥152,650
Philippines	¥1,255,152 ;	Mozambique	¥1,000,000
Kenya	¥16,131,150 ;	Mexico	¥1,180,000
Somalia	¥18,945,174 ;	Colombia	¥1,000,000
Ethiopia	¥14,075,560 ;	Ecuador	¥544,320

Donations: You can help Poor People and Refugees in the World by sending your contributions to: **Post Account Number Tokyo 8-86078 "Sekai no Mazushii Hitobito ni Ai no Te o" no Kai**

D-Publications

The Institute has emphasized the importance of high quality research papers and academic publications.

The following are the academic journals, research papers and other types of publications during the period of 1981-88.

1. Academic Journals

(1) *Shakai Seigi (=Social Justice) Vol. 1.* (Tokyo: Institute for the Study of Social Justice=ISSJ, Sophia University, 1982) 152 pp.

Contents:

Toward Achieving Peace and Justice/Social Teaching of Pope John Paul II/The International Order with a Human Face/Mass Media and Social Justice-in the case of the Philippines/Catholic Thought on Property/The Management Philosophy based on the New Encyclical "Laborem Exercens"/Global Spirituality/The Reports: Activities of 1981-82/

(2) *Shakai Seigi (=Social Justice) Vol. 2.* (Tokyo: ISSJ, Sophia

University, 1983) 147 pp.

Contents :

A Study on Justice/Communication and Citizen's Participation/
Information Flow between the Developed and the Developing
World/Do they really work too hard? /Development and Human
Rights in Asia-The Challenge from Asian Neighbours and Japan-
ese Responsibility/The Refugee Aid Programmes-the Cases of
Caritas Austria and Caritas Germany/The Impact of the Nuclear
Age on Public Health/The Reports: Activities of 1982-83/

(3) *Shakai Seigi* (= *Social Justice*) Vol. 3. (Tokyo: ISSJ, Sophia
University, 1984) 170 pp.

Contents :

From Rerum Novarum to Laborem Exercens/Financing Housing
of the Poor/Employment of New Technology, and the Strength
of Labor Unions/The Japanese TNCs and the Transfer of Tech-
nology to Asian Developing Countries/The Role of Japan in the
Third World/The World Refugee Problem: Our Responsibility
and Role/Ethical Reflections on Economic Crisis/The Reports:
Activities of 1983-84.

(4) *Shakai Seigi* (= *Social Justice*) Vol. 4. (Tokyo: ISSJ, Sophia
University, 1985) 191 pp.

Contents :

Proposal for Collaboration with Developing Countries/The The-
ology of Liberation in the Modern World/A Study of "An Authori-
tarian Rule"-A Case Study of the Philippines: The Marcos' Experi-
ment/Attempt towards Peace Education/(Study Note) The The-
ology of Liberation-based on the works of Gustavo Gutierrez/The
Role of the Church in the Philippine Society-The Challenge of
Peace-What does it say? What does it mean?/Catholic Social
Teaching and U. S. Economy-First Draft (Summary)/The Re-
ports: Activities of 1984-85/

(5) *Shakai Seigi* (= *Social Justice*) Vol. 5. (Tokyo: ISSJ, Sophia

University, 1986) 244 pp.

Contents:

What does "The Kingdom of God" mean to Our Modern Society?/The Human Rights and Social Justice in the Social Doctrine of Catholic Church/A Preliminary Survey of the Problems and Prospects of Indo-Chinese Refugees Settling in Japan/Implication of "Development Communication" in Japan/Theories and Practices of Asian Rural Development-A Case of Sarvodaya Movement in Sri Lanka/The Jesuit University Today/Speaking about God/The Reports: Activities of 1981-86/

(6) *Shakai Seigi (= Social Justice) Vol. 6.* (Tokyo: ISSJ, Sophia University, 1987) 165 pp.

Contents:

Housing and the Economic Development of the Urban Poor/The Challenge of the Theology of Liberation to Industrial Countries-The Evangelization in the Modern World/Principles of Science and Technology Cooperation in Asia/Work in the Modern World-Towards a Theology of Work/People's Power and the Filipino February Revolution/Communication, Culture and Religion-The Philippines Experience/Toward a Japanese Theology of Liberation I-"The Poor" and "Poverty" in the Theology of Liberation/The Reports: Activities of 1986-87/

(7) *Shakai Seigi (= Social Justice) Vol. 7.* (Tokyo: ISSJ, Sophia University, 1988) 178 pp.

Contents:

Economics and Ethics/The Catholic Church which prefers the Poor/The Characteristics of Jesuit Education/The Poverty in the Third World and the Option for the Poor/Toward a Japanese Theology of Liberation II-Historical Background of the Option for the Poor/Science, Technology and Spiritual Values-Searching for a Filipino Path to Modernization/The Reports: Activities of 1987-88/

2. Symposium Reports

(1) *Ningensonchō no Sekaichitsujo o Mezashite* (=In Search of Human Dignity and World Order) (Tokyo: ISSJ, Sophia University, 1982) 105 pp.

The report of the First International Symposium on Human Dignity in the Age of Interdependence which was held at Sophia University from 30 October to 1 November, 1981.

(2) Anselmo Mataix and Mikio Sumiya eds., *Ajia no Kaihatsu to Minshū* (=Development and Justice Issues in Asia) (Tokyo: YMCA, 1983) 266 pp.

The report of the Second International Symposium on Development and Justice Issues in Asia which was held at Sophia University in October 1982.

(3) A. Mataix and Sadako Ogata eds., *Sekai no Nanmin* (=The World Refugees) (Tokyo: Akashi Shoten, 1984) 250 pp.

The report of the Third International Symposium on World Refugees and Human Rights—Our Role and Responsibilities which was held at Sophia University in December 1983.

(4) A. Mataix and Hiroharu Seki eds., *Heiwa no Messēji-Kaku Sensō no Kyōi o Norikoete* (=Message of Peace—Beyond the Threat of Nuclear Warfare) (Tokyo: Akashi Shoten, 1985) 225 pp.

The report of the Fourth International Symposium on Challenge of Peace and Our Role which was held at Sophia University in December 1984.

(5) A. Mataix and Gustavo Gutierrez eds., *Kaihō no Shingaku Kokusai Shinpojyumu* (A Liberation Theology: International Symposium) (Tokyo: Akashi Shoten, 1986) 221 pp.

The report of the Fifth International Symposium on A Liberation Theology which was held at Sophia University in November 1985.

(6) A. Mataix and Ryōsuke Inagaki eds., *Gendai Shakai to Seigi* (=Justice in The Contemporary World) (Tokyo: Akashi Shoten, 1987) 281 pp.

The report of the Sixth International Symposium on Justice in the Contemporary World which was held at Sophia University in November 1986.

3. Research Papers

(1) *Seigi (=Justice) I* (Tokyo: Institute for the Study of Social Justice=ISSJ, Sophia University, 1980) 33 pp.

(2) *Seigi (=Justice) II* (Tokyo: ISSJ, 1981) 66 pp.

(3) *Seigi (=Justice) III* (Tokyo: ISSJ, 1982) 47 pp.

(4) *Heiwa Kenkyū (=Peace Research) I* (Tokyo: ISSJ, 1983) 72 pp.

(5) *Heiwa Kenkyū (=Peace Research-U. S. Pastoral Letter on War and Peace) II* (Tokyo: ISSJ, 1984) 63 pp.

(6) *Hattentōjōkoku no Shokuryō Mondai (=Food Problems in Developing Areas) I* (Tokyo: ISSJ, 1983) 68 pp.

(7) *Hattentōjōkoku no Shokuryō Mondai (=Food Problems in Developing Areas) II* (Tokyo: ISSJ, 1984) 103 pp.

(8) *Hattentōjōkoku no Keizai Shakai Kaihatsu no Shomondai (=Problems of Socio Economic Development in Developing Countries) I* (Tokyo: ISSJ, 1985) 137 pp.

(9) *Hattentōjōkoku no Keizai Shakai Kaihatsu no Shomondai (=Problems of Socio-Economic Development in Developing Countries) II* (Tokyo:ISSJ, 1986) 143 pp.

(10) *Hattentōjōkoku no Keizai Shakai Kaihatsu no Shomondai (=Problems of Socio-Economic Development in Developing Countries) III* (Tokyo: ISSJ, 1987) 125 pp.

(11) *Nanmin to Jinken (=Refugees and Human Rights)* (Tokyo: ISSJ, 1985) 120 pp.

(12) *Kaihō no Shingaku (=A Study of Liberation Theologies)* (Tokyo: ISSJ, 1986) 109 pp.

(13) *Katorikku Shakaikyosetsu to Keizai Rinri (=Catholic Social Teaching and Economic Ethics)* (Tokyo: ISSJ, 1987) 62 pp.

(14) *Hiroshima Nagasaki Heiwagakushū no Tabi (=A Peace Study*

Trip to Hiroshima and Nagasaki) (Tokyo: ISSJ, 1983) 111 pp.

(15) *Ajia-Afurika Nanmin no Jitsujō (=Situations of Asian and African Refugees-Research findings)* (Tokyo: ISSJ, 1983) 108 pp.

Pakistan Report/Kenya Report-Marsabit Re-settlement Project: Kakuma Project/Ethiopia, Somalia, and Uganda Reports.

(16) *Afurika Nanmin no Jitsujō (=Situations of African Refugees and Displaced Persons, 1984-85, Research Findings)* (Tokyo: ISSJ, 1985) 54 pp.

Contents:

Natural and Man-made Disasters in Ethiopia/Self-help Programmes in Somalia/Rehabilitation Works for Ethiopian Refugees and Displaced persons in Sudan/Slum Improvement Programmes in Kenya/Problems and Prospects.

(17) *Afurika Nanmin no Jitsujō (=Situations of African Refugees and Displaced Persons, 1987, Research Findings)* (Tokyo: ISSJ, 1987) 71 pp.

Contents:

Ethiopia Report: Rehabilitation Programmes of the Jesuit Relief Service/Eritria and Tigray Situations/Sudan Report: Community Development Project in the Ethiopian Refugee Camps/Somalia Report: Caritas Somalia Projects/Tanzania Report/Problems and Prospects.

These research papers have been published with the financial aid of Sophia University's Intra-campus Research Promotion Programme under the Office of the Vice-President for Academic Affairs.

4. Public Lectures

(1) *Mazā Teresa o Kakonde (=Dialogue with Mother Teresa)* (Tokyo: ISSJ, 1981) 38 pp.

Contents:

The Most Beautiful Thing in the World-Dialogue with Students/
The pamphlet of Mother Teresa's talks before students of Sophia

University on her visit to the Campus on 26 April, 1981. Her second visit was made on 24 April, 1982 and the third on 22 November, 1984 by the invitation of the ISSJ.

(2) *Walesa Iinchō o Kakonde* (=Leader of Polish Labour Union Solidarity-Mr. Walesa) (Tokyo: ISSJ, 1981) 15 pp.

Lech Walesa, on the occasion of his first visit to Japan, called on Sophia University, and had a discussion with students in May 1981. He was welcomed by the students and the faculty members.

5. Translation Works

(1) *Heiwa no Chōsen* (=The Challenge of Peace) (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1983) 218 pp.

This is the translation of the U. S. Catholic Bishops' Pastoral Letter on War and Peace by Prof. Anselmo Mataix and Mr. Hiroshi Katahira as a project of the intra-campus peace study group organised for the academic year 1983-84.

(2) Keizō Yamada & Nozomu Seki, *Kaihō no Shingaku* (=A Theology of Liberation by Gustavo Gutiérrez) (Tokyo: Iwanami Shoten, 1985) 322 pp.

(3) Keizō Yamada, *Keizai no Rinri* (=Business Ethics by Richard T. De George) (Tokyo: Akashi Shoten, 1985) 426 pp.

6. Other Publications related to Justice, Peace and Development

(1) A. Mataix, *Gendai Katorikku Kyōkai no Heiwaron* (=Contemporary Catholic Church's Treatises on Peace) (Tokyo: ISSJ, 1982) 30 pp.

(2) A. Mataix, *Chikyū Shakai o Mezasu Kyōiku* (=Education for a Global Community) (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1984) 238 pp.

(3) Takaaki Yasuoka, *Tetsu no Otoko Waresa-Rentai no Seishin wa Shinazu* (=The Iron Man Walesa, The Spirit of Solidarity Shall Never Be Forgotten) (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1984) 153 pp.

(4) A. Mataix, *Chikyū Shakai o Mezasu Kyōkai* (=Church for a Global Community) (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1985) 230 pp.

(5) A. Mataix, Nobuo Sōma and Shinji Sakai eds., *Zadankai*=

Nippon-ni totte Kaihō no Shingaku towa: Gendai kara Mirai eno Teigen (=Discussion: A Liberation Theology for Japanese Society-Suggestions for the Future) (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1986) 122 pp.

(6) Takaaki Yasuoka, *Nanmin to Watashitachi* (=Refugees and Our Responsibility) (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1987) 135 pp.

7. Newsletter

The Sophia Relief Service has its office at the Institute, whose primary task is to collect donation from the general public from all over Japan and send these donations to the needy people in Asian and African countries. The Sophia Relief Service publishes its newsletter carrying news of various activities concerning the goals of the organizations.

(1) *Newsletter (Sekai no Mazushii Hitobito ni Ai no Teo-Extending Hands to Needy People of the World)*, Vol. 1-I (Tokyo: Sophia Relief Service, May 1981)

(2) *Newsletter*, Vol. 1-II (Tokyo: Sophia Relief Service, December 1981)

(3) *Newsletter*, Vol. 2-III (Tokyo: Sophia Relief Service, June 1982)

(4) *Newsletter*, Vol. 2-IV (Tokyo: Sophia Relief Service, December 1982)

(5) *Newsletter*, Vol. 3-V (Tokyo: Sophia Relief Service, June 1983)

(6) *Newsletter*, Vol. 3-VI (Tokyo: Sophia Relief Service, February 1984)

(7) *Newsletter*, Vol. 4-VII (Tokyo: Sophia Relief Service, June 1984)

(8) *Newsletter*, Vol. 4-VIII (Tokyo: Sophia Relief Service, February 1985)

(9) *Newsletter*, Vol. 5-IX (Tokyo: Sophia Relief Service, June 1985)

(10) *Newsletter*, Vol. 5-X (Tokyo: Sophia Relief Service, December 1985)

(11) *Newsletter*, Vol. 6-XI (Tokyo: Sophia Relief Service, June 1986)

(12) *Newsletter*, Vol. 6-XII (Tokyo: Sophia Relief Service, December 1986)

(13) *Newsletter*, Vol. 7-XIII (Tokyo: Sophia Relief Service, June 1987)

(14) *Newsletter*, Vol. 7-XIV (Tokyo: Sophia Relief Service, December 1987)

社会正義 紀要 7

1988年3月25日 印刷
1988年3月31日 発行

編集者	渡部 清
発行者	アンセルモ・マタイス
発行所	上智大学社会正義研究所
	〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
	電話 03-238-3023
	3695
印刷所	聖パウロ修学院

SOCIAL JUSTICE

No. 7 (1988)

Contents

Economics and Ethics	
	<i>Anselmo Mataix</i> 3
The Catholic Church which prefers the Poor	
	<i>Keizō Yamada</i>23
The Characteristics of Jesuit Education	
	<i>Anselmo Mataix</i>47
The Poverty in the Third World and the Option for the Poor	
	<i>Jon Sobrino</i>51
Towards a Japanese Theology of Liberation II	
—Historical Background of the Option for the Poor	
	<i>Juan M. Rivera</i> ... 105
Science, Technology and Spiritual Values	
—Searching for a Filipino Path to Modernization	
	<i>Bienvenido F. Nebres</i> ... 123
Reports on Activities of 1987-1988	... 143
Institute for the Study of Social Justice, Sophia University	... 163

Institute for the Study of Social Justice
Sophia University